

阪神・淡路大震災 25年

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2020

伝える大震災、つなげる防災

目次

開会のあいさつ	1
第1部：活動報告会	
兵庫県立大学＋神戸市立渚中学校	2
兵庫県立舞子高等学校	6
滋賀県立彦根東高等学校	9
国立明石工業高等専門学校	
D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム・開発チーム	12
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	16
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	19
ポスター参加（兵庫県立明石南高等学校、福島県立白河旭高等学校・白河高等学校）	22
パネルディスカッション	24
グラフィックファシリテーション記録	36
閉会のあいさつ	40
災害メモリアルアクションKOBÉ2020のことば	41
第2部：阪神・淡路大震災25年 特別シンポジウム	
オープニングコンサート	42
特別シンポジウム「向き合い続けた25年、これから」	43
プログラム	58
委員・学生名簿	61
発表風景・交流会等	63

災害メモリアルアクションKOBÉ ACTION2020 「KOBÉのことば」

日 時：令和2年1月11日
開会 午前10時00分



第1部：災害メモリアルKOBÉ2020 活動報告会

開会のあいさつ

○牧企画委員長

皆さん、おはようございます。それから明けましておめでとうございます。災害メモリアルアクションKOBÉというのが、どういことをやろうかと思っていることについて毎年同じなのですが、きょう新たにご参加される方もおられると思いますので簡単にご説明させていただきたいとします。

今日も京都から神戸まで電車に乗ってきたのですが、25年前の建物が残っているのかなと思しながら見ていましたけれども余り残っていない。ここにいる皆さんは25歳年を取り、または25年前は生まれていなかった。そういう人たちがここに集まっていると思います。この災害メモリアルアクションKOBÉですけれども何をやりたいと思っているのかというと、皆さんと一緒に震災を体験していない人が、震災を体験していない人に震災を伝える仕組みをつくり上げていきたいというのが災害メモリアルアクションKOBÉの目的です。

この災害メモリアルアクションKOBÉというのは、震災から20年が経過し、以降始めているわけですが、決して20年後から始めた試みではなくて震災直後からこういった災害のここの情報を共有するという活動は続けておりまして、初めの10年というのは、今の東北と同じですけれども災害復興に取り組んでいる10年でしたので、いろんな災害復興に取り組む人たちがお互いに情報交換をする場として、メモリアル・コンファレンス・イン神戸というのが10年続けられてきました。それから10年たった後、やはり10年もちまちますと震災を知らない人が増えてくるということで、この大変な震災の教訓をどう次の世代に伝えていくのかということが課題になりました。その中で伝え方、どうしたら震災を体験していない若い方にそういう震災のことを伝えられるのかということが、その次の10年、10年から20年への課題としてわれわれは取り組んできまして、例えば、なかなか私たち大人が若い人にこんなことがあった、こんなに大変だったと言ってもなかなか通じない。若いときに震災の経験をした人たちの視点を入れて、その子どもたちの視点で震災の教訓をどう伝えていくのかという取り組みを行いました。お父さんが娘さんにしゃべる、その中でそのかけ合いの中から震災の教訓を伝えていく、そういった試みをやってまいりました。それで震災から20年たって30年までどうしようかと思っていたのかといいますと、だんだんと震災を直接経験した方がおられなくなっていくということで、ちょうど読売新聞が特集されていましたけれども、当時の知事だった貝原さんも当時の市長だった笹山さんもおられなくなっている。そういう実際に震災の経験をした人の話を直接聞けるという機会がだんだんと減ってきていますけれども、まだこの10年というのは聞ける期間ですので、震災を経験していない人たちが震災を経験した人たちの生の声を聞いて、それを自分たちの言葉に置きかえて震災を経験していない人に伝えていく。今後ずっと使えるような仕組みをつくっていききたいというのが、この災害メモリアルアクションKOBÉの試みということになります。

それで、これを読み上げようと思ったのですが、もう時間がございませんので、このパンフレットの最後に書いてございませけれども、こういった試みを通して次に来る災害の被害を減らしていきたいというのが、この災害メモリアルアクションKOBÉの目的でございます。今日はそのためのいろいろな取り組みをこの後、ご報告いただきますので、ぜひそういったことを学んで次につなげていきたいというふうに思っております。

本日はご参加いただきまして、どうもありがとうございます。



牧企画委員長

兵庫県立大学 ＋神戸市立渚中学校



地域で取り組む避難所開設訓練

神戸市立渚中学校 防災ジュニアリーダー
兵庫県立大学 防災リーダープログラム

取組について

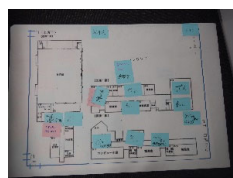
目的：若い世代の防災力向上、地域の人たちで協力して取り組む、被災者から未災者へ
参加者：渚中学校、なぎさ福祉コミュニティ、兵庫県立大学
協力者：灘区社会福祉協議会、中央区社会福祉協議会

これまでの取組

渚中学校校区地域防災情報交換会
渚中学校の見学（施設、備蓄倉庫など）
渚中学校生徒、地域住民、兵庫県立大学学生との合同HUG
訓練前ワークショップ



2019年12月1日
地域と合同での
避難所開設訓練



避難所開設訓練の概要

シナリオ

発生日時：12月1日（日）13時
地 震：震度7
被害状況：多くの建物に被害
状 況：ライフラインすべて停止

ミッション

- ①避難者を適切に収容する
- ②配慮が必要な避難者に適切に対応する
- ③次の対応に備えるため、避難所の状況を把握する
- ④避難者が必要な物資を準備する

班分け



1班：情報班
避難者や物資等の状況を確認し、ホワイトボードに書き出す。必要な情報をほかの班に伝え、人員配置等を行う。



2班：避難所開設班
受付係、避難所係に分かれて対応。避難者を受け付け、名簿を作成。避難者に適した場所を判断し、4班に避難者を引き渡す。



3班：物資調達班
備蓄倉庫係、なぎさ福祉センター係、炊き出し係に分かれて活動。福祉センターに物資を取りに行き、受け取った後炊き出しを行う。



4班：避難者誘導班
受付を済ませた避難者を体育館等の避難所に誘導。その後、避難者を避難スペースに案内する。

取組を通して

自ら何をすべきか考え主体的に行動し、うまくいかなかったときに、よりよい訓練にするためにはどうしたらよいのか経験者にアドバイスを受けることで理解を深めることができた。このプロセスにより、被災者の経験を未災者が学び、知識を身につけることにつながった。

自分で考える

失敗する

アドバイスを受ける

納得する

身につく

○**兵庫県立大学1** 私たちからは12月1日に渚中学校で行われた避難所開設訓練について発表します。

まず、兵庫県立大学の近澤、廣田、筒井からこれまでの取り組みを発表した後に、渚中学校の学生さんから避難所開設訓練について発表していただきます。

初めに、渚中学校とHAT神戸地区におけるこれまでの防災に関する取り組みをお話します。

渚中学校では、校区地域防災情報交換会を1年に2回行ってきました。情報交換会には中学生、教員、地域住民、行政の方たちが参加し、防災に関する話し合いやプログラムを実施してきました。例えば、渚中学校防災リーダープログラムの生徒が行っている防災活動や被災地でのボランティア活動についての報告会がありました。また、中学校の校内を見学し、備蓄倉庫や避難所となる体育館を、中学生と地域住民が一緒に見学したりしました。中学生、教員、地域住民とで避難所運営ゲーム「HUG」もしています。それ以外でも地域の防災訓練に中学生が参加し、中学生と地域とのつながりは少しずつ深まっています。これらのことを行う中で、中学校と地域とで訓練に取り組めないかという提案があり、12月1日に避難所開設訓練を行うことになりました。実際には、避難所の開設は行政や学校関係者が行うことになっていますが、大きな災害が発生した場合、地域住民が避難所を開設する可能性もあります。それに備えて準備しておこうというのがありますが、このような訓練を通して、自分たちが住んでいるマンションや地区内でも防災に備えてやっておくべきことがもっとあることを考える機会とすることが重要でした。また、地域住民が持っている災害の経験から多くのことを学び、次の世代に伝えていく機会として避難所開設訓練を行うことになりました。

避難所開設訓練の目的は三つあります。一つ目は、「被災者から未災者へ教訓を伝える」こと。二つ目は、それによって「若い世代の防災力を向上」させること。三つ目は、「地域で協力して取り組む」ことです。一つ目の目的の「被災者から未災者へ伝える」というのは、震災を経験した方に訓練に参加していただき、当時の避難所はどのような様子だったか、どのように対処したのかなどを未災者に知ってもらうことです。三つ目の「地域で協力して取り組む」というのは、地域にいる人と助け合うことの大切さを学んでもらうことです。地域には高齢者や障害者、小さな子供を抱えた人、外国人など、さまざまな人がいます。その人たちに自分は何をしてあげることができるのか、何をすればいいのかなどについて学び助け合う心を持つことは、これからの社会で求められることだと考えられます。参加していただいたのは渚中学校、渚防災福祉コ

ミュニティ、兵庫県立大学です。協力していただいたのは灘区社会福祉協議会、中央区社会福祉協議会の皆さんです。

次に、取り組みの様子についてもう少し詳しく説明していただきます。

○**兵庫県立大学2** この写真は、避難所訓練前のワークショップの一環として「HUG」を行っているところです。「HUG」とは避難所運営ゲームのことで、「HUG」のHは避難所、Uは運営、Gはゲームの頭文字をとったものです。「HUG」は避難所運営を任されたという想定のもとで次々にやってくる避難者の状況や要望、イベントを考慮しながら迅速かつ適切に対応する術を学ぶゲームです。その後、それを踏まえて、後日実施する避難所開設訓練の担当班に分かれて、班ごとに用意する物や部屋割り、どのような問題があるかなどについて考えて附箋に書いて整理していきました。そして、校舎の部屋をどのような避難所として使うか話し合いました。

次に、避難所開設訓練の概要について話していきたいと思います。シナリオは、地震発生日12月1日、日曜日、発生時間13時、震度7。被害状況は、多くの建物に被害。状況は、ライフライン全て停止です。つまり、停電し水道は使用できず、たくさんの人が避難してくると考えられる状況です。ミッションは、1「避難者を適切に収容する」、2「配慮が必要な避難者に適切に対応する」、3「次の対応に備えるため避難所の状況を把握する」、4「避難者が必要な物資を準備する」です。

渚中学校の生徒は4つの班に分かれて避難所の運営に当たってくれました。1班は情報班。2班は避難所開設班で受付係と避難所係に分かれました。3班は物資調達班で備蓄倉庫係・渚支援センター係・炊き出し係に分かれました。4班は、避難所誘導班です。

それでは、当日の様子について発表していただきます。

○**兵庫県立大学3** こちらは、体育館に開設する避難所の場所の設置に使うブルーシートを運んでいる様子です。

こちらは受付の様子です。足の不自由な障害者に扮して、避難に来た地域住民に名簿を書いていただいているところです。名簿を作成し、情報班に避難者数を報告し、けが人がいれば救急車を手配します。

こちらは炊き出し係の様子です。避難者数を情報班に確認した上でお汁粉を準備しているところです。

こちらは本部の様子です。



情報班が情報を収集・整理し、ホワイトボードに書き出しているところです。避難者数の把握、不足している支援物資の確認、人手の足りない班や係がないかを確認し、調整しています。

こちらは段ボールベッドをつくっている様子です。特に高齢者の方は避難所生活で体調を崩しやすいため、暖かくて昼間にはいすのかわりにもなる段ボールベッドが重宝されます。

続いて、渚中学校の学生さんに、取り組みについての詳細や感想、考えたことなどを発表していただきます。

○**神戸市立渚中学校1** 私たちは渚中学校の防災ジュニアリーダーです。このHATの町にある渚中学校のボランティア組織で、今年度は65名で活動をしています。私たち渚中学校の防災ジュニアリーダーの今年の目標は、「学校が避難所になったら」ということでした。私たち防災ジュニアリーダーは、避難所開設に向けて、まずは、「より快適な避難所生活を送るためには」ということをワークショップで学び、考えました。中学生ならではの自由な発想で多くの意見が出、まだまだ渚中学校では快適に過ごせないということがよくわかりました。

次に、協力してくださる地域の方々との顔合わせ、避難所運営ゲームの「HUG」をしました。「HUG」では、避難者から不満が出ないように配置を考えるのがとても難しく、避難所運営の大変さを思い知らされました。やはり完璧な場所はないので、「瞬時に最善の場所を考える」という大切な力を少しはつけることができ、とてもよい時間を過ごすことができました。こうして私たちは避難所開設へ向けて準備し、避難所開設訓練を行いました。

このミッションをクリアするために4つの班に分かれて活動しました。今から各班の活動を発表してもらいます。それでは、1班の発表をお願いします。

○**神戸市立渚中学校2** 私は情報班として活動したことを説明します。情報班は、まず図書館に本部を立ち上げて、ホワイトボード・マーカーペンなどを用意します。次に、物資の状況に関する情報や避難者数、避難者の状況、体調や環境などを確認します。そして、情報をホワイトボードに整理して書き出したり、避難者数を炊き出し班に知らせたり不足している支援物資を確認したり、人手が足りない班や係がないかを確認し、人手不足の班・係に人員を配置するという重要な仕事をします。実際に避難所を開設してみても私が思った課題は「連携」だと思いました。何をしても自分一人では何もできなくて、誰かの力が必ず必要になるからです。さらに、実際にしてしまったミスで、情報の手違いがあり、避難者を混乱させてしまう事態にしまいました。このミスから情報の重要性や

大切さを感じました。手違いを少なくするには各々が手帳などを持っていたらそこに書きとめることができ、情報の手違いも少なくなるかと思いました。そして、情報を整理するとき、わが校の図書館にはホワイトボードが1つしかなく、模造紙や画用紙などを取りに行くという作業が増え、とても不便に感じましたので、避難所の本部になるところは、災害前にホワイトボードを3つほど用意しておくのがよいのではないかと考えました。

これらのことを感じ、やはり準備が必要だと思い、来年も再来年も継続して行くことがとても大事なのだと思いました。

○**神戸市立渚中学校3** 私は避難所開設班について説明します。避難所開設班には大きく2つの係があります。おもに避難者名簿や救急車の手配などをする受付係と、ブルーシートを使用して場所づくりなどをする避難所係です。「避難者を適切に収容する」、「配慮が必要な避難者に適切に対応する」などの4つのミッションを定め、災害シナリオに沿って活動しました。実際に活動してみると予想以上に多くの問題が発生しました。一番大きかったのは誘導班の人数の振り分け方です。実際起こったとき、何百人もの避難者が来ることを想定すると、1人当たりの対応人数が少なく無駄が多くなってしまいました。また、感染症の方や障害で足が不自由な方などが急に来られたときどのように部屋分けをするかも課題に上がりました。誘導班の人数を増やすのはもちろん、ゼッケンをつけるなどして係の人たちの区別がつくようにするなどの改善案が挙がりました。

○**神戸市立渚中学校4** 僕は、物資調達班について説明します。物資調達班は、渚福祉センター係と備蓄倉庫係に分かれて活動しました。渚福祉センター係は福祉センターに行き、リヤカーに段ボールベッド・発電機・担架等を積んで中学校に向かいました。到着後、物資を避難所等に運び入れた後、情報班に状況の連絡をしました。渚福祉センター係では、2台のリヤカーを使っても一度に運べる物資が少なく、実際はもっと往復しなければいけないことや、調達後の物資の置き場の問題、福祉センターと中学校は少し距離があるため、運ぶのに時間がかかる。被災中の人出が少ない中で作業するので、息を合わせなくてはいけないという課題が見つかりました。備蓄倉庫係は備蓄倉庫に行き、備蓄品の在庫の確認をし、備蓄倉庫の内容を情報班に連絡しました。備蓄倉庫係では、備蓄倉庫は暗いのに懐中電灯が1つしかなく、窓が1つもないことや、ほかの班の活動でも懐中電灯が必要なのに数が足りないこと、また、想定されている避難者数が500人程度なのに、備蓄されている食糧は100人分しかないという課題が見つかりました。

○神戸市立渚中学校5 私は、避難者誘導班について発表をしたいと思います。避難者誘導班では、避難者だけがをしている人・子供がいる人・高齢者に分けて案内していききました。そこでたくさんの反省点が見つかりました。まず一つ目は、避難者を分けてしまったため、同世代の話せる人がいなくて寂しそうにしている人がいたことです。地震が起きて不安な気持ちの人が多と思うので、年の近い話ができる人を近くにしたいほうがよいのではないかと思います。二つ目は、寒いのでビニールシートの上に座ってもらうと冷えるということです。後で気がついてイスを配りました。確かに冬の体育館は寒いので、そういう配慮が必要だと思いました。また、夏などの暑いときに地震が起きたら、熱中症の対処などどのようなことをすればよいか考えなければなりません。日影と日なたでは、温度が変わってしまうので、そこについてもどうすればよいか考えなければいけないと思いました。今回初めて避難所開設訓練をしたことでたくさんの反省点や課題を見つけることができました。避難者の方々の気持ちに寄り添い、少しでも不自由がない避難所生活を送っていただくよう改善していきたいです。

○神戸市立渚中学校6 こうして避難所開設訓練を終え、災害時に役に立つ人、頼れる人になるには、最低でも三つの力が必要だと思いました。一つ目は「行動力」です。頭で考えてイメージしてみるよりも、とりあえず行動してみることが大切だと思いました。今回の訓練中も、こうした力でもっと効率よくできるのではないかと思う場面が幾つかありましたが、その力がなくアイデアを言うことができなかったのも、必要な力だと思いました。二つ目は「判断力」です。緊急の現場において1分、1秒は本当に大切で、そのときの判断でたくさんの人の命にかかわることもあります。今回の訓練でも、自分の判断が遅く、多くの方々に迷惑をかけてしまったので必要な力だと思いました。三つ目は「応用力」です。いくら防災の知識があっても、避難所訓練をしたという経験があっても、実際の場面に応じて臨機応変に行動できないと意味がないと思います。なんでとても必要な力だと思います。今回の訓練で学んだ「行動力・判断力・応用力」の三つの力をいざというときに生かせるようにしたいと思います。

これで発表を終わります。



兵庫県立舞子高等学校



災害メモリアルアクションKOBÉ2020 兵庫県立舞子高等学校

テーマ

【同年代に語り継ぐ】～未災者の視点だからこそ見えることを～

このテーマに決めた理由

- ① 去年の反省点から
＝より具体的にテーマを追究する活動をしたい
- ② ターゲットを絞った方が活動しやすい
- ③ 災害を経験していないからこそ出来る・考えられることがある
以上を踏まえ➡ターゲット 未災者、中でも私たちと同じくらいの年代

☆ 昨年度を振り返って

去年の活動

インプット➡ヒアリング調査
阪神・淡路大震災当時のお話を②
アウトプット➡なし

反省点
・準備不足
・急激な予定変更
・ミーティングの質
・活動内容の薄さ

今年度の活動

インプット➡ヒアリング調査
本校の先生方から阪神・淡路大震災のお話を②
アウトプット➡年表作成+冊子まとめ（年表は配布する予定）

気をつけたこと

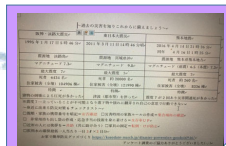
- ・綿密な準備
- ・ミーティング内容の事前確認
- ・ミーティングの質と効率向上



☆ 今年度の二大活動

ヒアリング調査

- ① 未災者へのアンケート調査（8/2）
- ② 阪神・淡路大震災経験者へのインタビュー調査（8/16）
- ※①②共に垂水駅周辺で行いました。
- ①ではお時間をあまりとらせないようにY E S or N O のシール形式で行い、アンケート終わりには下図のような紙を配布しました。
- ※多聞地区の夏祭りでも何名かに答えて頂いたのもその分も入っています。
- ②では過去or現在・未来に関する質問を4つ用意し一人につき2問ずつくらいで質問していただきました。



ヒアリング調査全体を通して良かった点

- 1 事前準備に不足がなかった
- 2 予定をしっかり立てていた為参加人数が去年より多かった
- 3 人数調整や時間➡臨機応変に対応できた

改善点や反省点

- 1 声をもっと積極的に掛けに行く
- 2 質問を深めれるならもっと深める
- 3 アンケート後のまとめ もっと見やすくわかりやすく

先生方へのインタビュー＆年表作り

インタビュー期間➡9月から12月初め
年表作成期間 ➡11月終わり頃から

きっかけは先生（身近な方）の阪神・淡路大震災の話を知ること震災を風化させずまた今後に向けての意識の向上になるのではと思ったことです。あらかじめ質問をする先生を決め6～7人を3グループに分け、インタビューをする前には必ずアポ取りをしてから昼休みや放課後に行いました。

年表ではたくさんの質問の中から4つを抜粋し見やすく付箋でまとめました。単調な年表にならないようイラストやメッセージなどを入れたことが工夫点です。

インタビュー調査＆年表を通し良かった点

- 1 先生に対しての礼儀
- 2 中途半端にせず最後までこだわられたこと
- 3 早くから取りかかれたこと（インタ）

改善点や反省点

- 1 メンバーがなかなかそろわなかったこと
➡連携がうまくいかなかった
- 2 進捗状況は随時連携する必要がある
- 3 活用方法をもっと有効的に

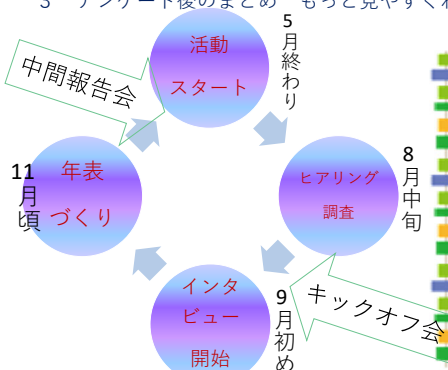
1年を振り返って

新しい試みにも挑戦でき、活動の幅を広げることが出来たように思います。それと同時に多くの改善点が見つかったので今後のメモリアルアクション舞子チームがもっと良くなるようにと努めていけたら良いのではないかと思います。このメモリアルアクションでは指定された課題がない分大変なこともあります。逆に自分のしてみたい活動などを実現することも可能なので、多くのことに挑戦できたらいいな（後輩にもして欲しいな）と思います。

<今後の改善点>

- ・ミーティングの回数、出席人数を向上させるためには
- ・テーマ決めなどに意見を持って参加する
- ・準備の出遅れをなくす などなど

年表は今後も継続し、さらに有効的に活用できるようになればいいと思います



○**兵庫県立舞子高等学校1** まず、私たちは、「同年代に語り継ぐ被災者の視点だからこそ見えること」ということを目標に、今年度、活動してきました。この目標を設定した背景としては、昨年度の反省である「活動と目標との関連性のなさ」ということから、初めに「ターゲット設定」を行いました。ターゲットには、被災者の中でも同年代を選びました。同年代を選んだ理由としては、見落とされがちな私たちと同じような年の方々に向けた活動をしたいという思いからでした。この目標に込めた思いとしては、この「メモリアルアクションKOBEBE2020」のこともそうなのですが、被災者から被災者へ。震災を経験していないからといって防災を学ぶことに遠慮をしている方々に寄り添うことや、震災を経験していないからこそできることということがあるというふうに考え、この目標を設定しました。インプットでは、今年は大きく分けて二つ行いました。一つ目に、「垂水駅前多聞地区夏祭りでのアンケート調査」です。そして二つ目に、今年のメインである私たちの学校である「舞子高校の先生方への阪神・淡路大震災についてインタビューを行い、見やすく年表にまとめる」という活動です。アンケート調査・インタビューの目的としては三つあります。まず一点目に、阪神・淡路大震災を経験していない私たち被災者が過去のことを知ることにより今後について備えるということです。二つ目に、被災された方々の貴重な生の声を聞かせていただくということ。三つ目に、私たちがこのようなアンケート結果やインタビューの回答を広めていくことにより、さらに広めていただくようにするといったことを目的としています。

○**兵庫県立舞子高等学校2** 私からはアンケート調査についてご説明させていただきたいと思います。アンケート調査は、8月2日に被災者の方、8月16日に震災経験者の方を対象に2日間実施いたしました。質問内容は、被災者の方のアンケートでは、「家具の固定をしているか」、「避難所の場所を知っているか」という2つの質問を行い、答えてもらいやすいようYESかNOのシール形式で行いました。震災経験者の方には、「阪神・淡路大震災を経験して思ったこと」、「経験者から被災者へ伝えたいこと」、「震災当時役に立ったもの」、「震災の経験を踏まえ次の災害に向けて備えているもの」と、過去と未来に向けての質問を行いました。

○**兵庫県立舞子高等学校3** 私からは、8月2日に行った被災者の人向けのアンケート調査の結果を報告します。まず、私たちのアンケート調査の対象は、小学生から大学生あたりまでです。アンケートでは二つの質問をさせていただきました。一つ目の質問は、「自宅で家具の固定をしているか」で、結果はこのようになっています。全体の

約半数の人が家具の固定をしていることがわかりました。二つ目の質問は、「緊急時に自分が逃げる避難場所を知っていますか」で、結果はこのとおりになっています。アンケートを行った49人中45人もの方が、「避難場所を知っている」と答えてくださいました。アンケート調査全体を通し、防災意識の高い人が多いことがわかりました。

○**兵庫県立舞子高等学校4** 私からは、震災経験者の方々のアンケートの調査結果を報告させていただきます。

まずは、阪神・淡路大震災を経験して思ったことです。結果はこのようになりました。このほかにも「震災を忘れていく人・知らない人に対して怒りを感じる」という回答や、「阪神・淡路大震災が発生した後1年ぐらいは大きな音がすれば地震が来たと思ってしまうぐらい敏感になってしまっていた」と回答した方もおられました。

次に、「震災当時役に立ったもの」の結果です。特に多かったものは、「特になし」という回答です。「物がなかった」または「忘れた」と答えた方が多くおられました。具体的なものを挙げた回答で一番多かったのは、「水」です。そのほか「電気ポット」や「ポリ容器」、「携帯電話」などの回答がありました。携帯電話のお話を伺った方は、当時大学生の方です。震災当時、携帯電話は普及していませんでしたが、その方はたまたま持っており、大学と連絡を取ることができたそうです。また、連絡が取れた人とそうでなかった人とは、レポートや安否確認などの行動で差が出たとおっしゃっていました。

次に、「被災者へ伝えたいこと」の回答結果です。パワーポイントをごらんください。この質問では、備えに関連する内容が多くありました。

最後に、「震災時の経験から備えているもの」の結果です。特に多かったものは、この二つです。そのほかにも、「災害時には銀行やATMが使えなくなるために現金を肌身離さず持っている」という回答や、「お風呂の残り湯を溜めてトイレに水を流せるようにしている」という回答もありました。

アンケートの結果の報告はこれで終わりです。

今回のアンケート調査で特に印象に残っている回答があったので少し紹介させていただきます。ある震災経験者の方で、「阪神・淡路大震災を経験して思ったこと」についてお話を伺っていました。その方は、東日本大震災はずっと報道で取り上げられていたけれど、阪神・淡路大震災は、発生してから約2カ月後に地下鉄サリン事件が発生し、それを境に余り報道されなくなった。ボランティアの人たちも来なくなっていった。それでも神戸は早く立ち直ったとお話していただきました。とても悔しそうですが、誇らしげにお話しされていたことを今でも覚えていま

す。また、「報道の数が少なくなることは被災者からすれば見放されたように感じる」と回答された方もいたと、他のメンバーに聞きました。私はこれまで、多くの報道が震災後も続き、神戸が復興できたのかなと思っていましたが、このようなお話を聞いてとても衝撃を受けました。また、震災を語り継ぎ風化をさせないことの大切さを改めて感じました。このほかにもたくさんのお話を聞くことができたので、私たちにとってとてもいい経験になったと思います。

○**兵庫県立舞子高等学校5** 次に、年表の作成と舞子高校の先生方へのインタビューについて発表します。環境防災科の生徒でも先生方の当時の状況を余り聞いたことがありませんでした。そこで、インタビューを行い、伺ったことを聞いた内容、時系列ごとに年表にまとめました。さらに、年表に入り切らないほどたくさんお話ししていただいたので、年表とは別に冊子にまとめました。年表の作成に当たり、一般の方ではなく先生に伺ったのは、メモリアルアクションを行っている私たちが先生方の当時の状況を聞いてみたかったため、そして、舞子高校の生徒が震災をもっと身近に感じてもらいたかったため、身近にいる先生にお手伝いいただきました。

インタビューは9月から12月の初めにかけて行い、年表は11月の終わりごろから12月中旬にかけて作成しました。質問内容は、「震災当時、何をしていたか」、「心の支えになったもの」、「震災後、自分の中で変わったこと」、「私たちに伝えたいこと」です。

年表は、このようなものが完成しました。文字だけではなく、絵も入れて見やすいものとなりました。また、年表の題名は、「一人の声を力に(言葉は生もの)」です。この題名には、一人ひとりの貴重な体験談を今後の災害に立ち向かう私たちの力になるようにという願いが込められています。

ここで、インタビューの中からつか印象に残っているものを紹介します。一人目は、K先生です。阪神・淡路大震災では、アパートで一人暮らしをしていた大学生が多数亡くなったことが印象に残っているそうです。先生は、当時勤務していた尼崎の高校へ行くために片道6時間かかったため、週に2日は学校に寝泊まりをしていました。近くの避難所へ行き手伝うことで出勤と見なす制度があったそうです。二人目は、震災当時大学生だったO先生です。先生は震災当時、自分が役に立ってないように感じ、人の役に立ちたいと思うようになったことをきっかけに教師を目指されました。日ごろからご飯を炊くのではなく鍋で炊いていたため、災害時にもご飯を炊くことに苦労はしなかったそうです。この経験から、現在もお、炊飯器ではなく鍋でご飯を炊くようにしているそうです。

そして、年表と同時進行していた冊子は現在作成中で、3学期には完成・配布を予定しています。きょうは未完成ではありますが、途中までできているものを持参しています。この後、見たい方がありましたらお声かけください。お願いします。

○**兵庫県立舞子高等学校6** 私からは、アウトプットについてお話しさせていただきます。私たちは主に二つ考えていることがあります。一つ目は、先ほど見ていただいた年表と冊子を校内に配布すること。二つ目は、私たちが防災や減災を同世代の方々に教える出前授業に参加し、先ほどお話しした街頭アンケートの結果を折り込んだものを行っていく予定です。

次に、今度の予定についてお話しさせていただきます。今後は、反省会と来年度の予定についての検討をしていきたいと考えています。そして、年表についてはこれからも継続して行う予定です。

ご清聴ありがとうございました。



滋賀県立彦根東高等学校



神戸から学ぶ 福島から学ぶ = 未災地の滋賀でできること =

滋賀県立彦根東高等学校新聞部「福島をつなぐ」取材班

災害メモリアルアクションKOBÉ報告会 2020.1.11

はじめに

東日本大震災発災以来、毎年、彦根東高校新聞4月号と10月号に連載特集「福島をつなぐ」を書き続けてきた。

改めて、『伝える』ということの意義

未災地滋賀の高校生に『伝わるのか』を考える。

伝えようとしたこと

彦根東高校新聞10月号で

①活動を伝える：神戸や福島で『伝えよう』とする人たちの活動を伝える

→災害メモリアルアクションKOBÉの活動取材25年に渡って、なぜこのような取り組みを続けているのかを調べる

②滋賀に伝える：大きな災害を受けていない滋賀にとって、災害が「他人事」でないことを伝える。
→迫る南海トラフ巨大地震についての彦根東高生の意識を調べる

①活動を伝える

- ・前川直哉先生：神戸で被災、福島で活動
過去の出来事や他所の出来事を「自分事」と捉えることの大切さを話される。
- ・牧紀男先生：災害メモリアルアクション
震災の経験を伝える仕組みの大切さを話される。未災者から未災者への伝達が必要。



▼牧先生取材の様子(2019.8.8)

▲災害メモリアルアクションキックオフイベント

- ・災害メモリアルアクションKOBÉの取り組み
神戸では、高校生や大学生が『伝える』を発災して25年たった今でも続けている。過去のことでなく、これからの防災にどうつなげるかが話し合われている。

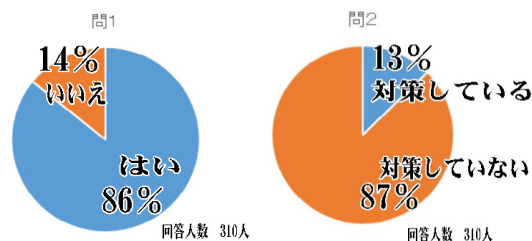


彦根東高校公式マスコット「ぎんにゃん」

②滋賀に伝える

- ・彦根東高生にアンケート：意識を調べる

南海トラフ地震の危険性は知っているが、防災対策はしていない。「自分事」としていない。

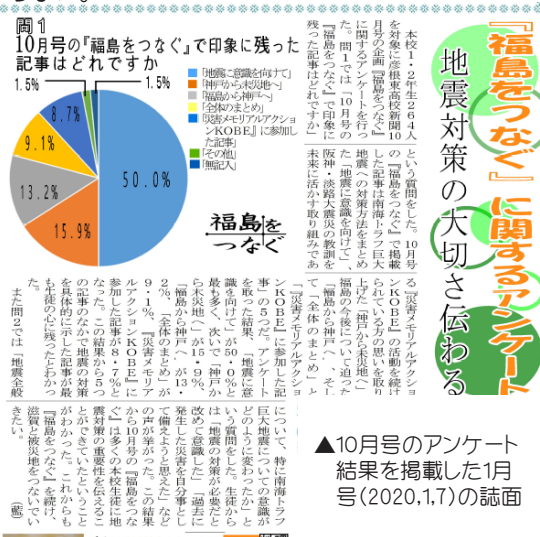


▲グラフ 問1 南海トラフ地震の危険性を知っているか？
問2 大地震が発生したときに対する対策は？

- ・小泉尚嗣先生：アンケート結果を見て
滋賀にも大地震が起これば大きな被害が出る。得た情報を共有し、何十年も続けられる対策をしてほしい。

伝わったのか

10月号発行後、アンケートを実施。地震対策の必要性を感じたとの回答を多数得る。「教訓を活かさねば」「他人事ではない」などの声も多かった。伝え続けることの大切さと、伝われば防災に対する意識が喚起されることが感じられた。未災地の滋賀でも、これからも伝え続けねばならない。



▲10月号のアンケート結果を掲載した1月号(2020.1.7)の誌面

○**滋賀県立彦根東高等学校1** 本日はこのような発表の機会をいただきありがとうございます。私たちは、滋賀県立彦根東高等学校新聞部2年、小峠 実咲と、1年、清水陽奈です。よろしくお願いします。

本日は、「神戸から学ぶ福島から学ぶ」と題し、未災地である滋賀の高校生として神戸や福島の教訓をどう伝えるかどう生かすかについての取り組みを発表します。

まず、高校の紹介をします。

私たちの高校は、琵琶湖のある滋賀県の東側、彦根市にあり、高校は彦根城の城郭の中です。彦根を治めていた井伊家の藩侯が源流です。近くには石田三成の居城があった佐和山があり、姉川や関ヶ原など、戦国時代好きの人なら聞いたことのある地名が近くにたくさんあります。スクールカラーは赤で、野球部が甲子園に出場したときは赤く染まったアルプススタンドが評判を呼びました。公式キャラクターの「ぎんにゃん」は、私たち新聞部が行っているチャリティー活動で一緒に活躍してくれます。

○**滋賀県立彦根東高等学校2** さて、私たち彦根東高校新聞部が震災について向き合い始めたのは、2011年の東日本大震災がきっかけでした。当時の新聞部員たちは、震災が発生してからわずか38日で届いた福島県立相馬高校出版局の新聞を見て、私たちにもできることをしたいという思いが募り、これまで特集「福島をつなぐ」と題し、実際に福島県を訪れ、取材してきました。これまでの8年間にどのような取材をしてきたか少し紹介させてください。2015年には、富岡町のコミュニティ放送局「おだがいさまFM」を取材させていただきました。あわせて郡山東高校新聞部の皆さんと交流させていただきました。福島での震災のことを地元の皆さんがどう発信されているのかを紹介するのが中心です。2017年3月には、初めて復興記念式に参加させていただきました。相馬市にて相馬高校出版局の皆さんと交流させていただきました。2018年3月、いわき総合高校演劇部の皆さんとの交流

は印象深いものでした。このころ先輩たちは、取材をする私たちと取材される方の思いの差に悩んだそうです。福島県でも色濃く被害の爪跡が残る地域とそれ以外の地域で差があり、また、滋賀の私たちが伝えようとするのと福島の方が発進しようとなさることに違いがありました。震災は終わっていないという視点に重きを置くと、震災からの脱却を発信したい福島の方の意には沿わない。その違いに思い悩むこともあったと言います。もうそろそろ東日本大震災の連載はやめてもいいのではないかという声が、部員の中でも大きくなりました。そんな中で、いわき総合高校演劇部員の方が、7年たってようやく話せるようになったとお父さんが亡くなられたことをありのままに新聞部員に話してくれたのです。7年たったからこそ伝えられることがあるのだと確信した瞬間でした。

8年目の今年は、福島と合わせて神戸から学べることを考えました。神戸は、震災から25年を迎えようとしています。7年目ですらこれからの伝え方に悩んだ私たちは、25年の長きにわたって伝え続けている神戸の取り組みを知りたいと思いました。今回特集を組むに当たって、スライドにあるようなことを考えました。それは、南海トラフ巨大地震が迫っている中、被災地の出来事は滋賀の私たちにとって他人事としてはいけない。神戸や福島の震災から学べることもあり、被災地の思いを伝えようと活動している人たちがいる。このようなことを私たちは知ろうとしなければならぬ、伝えなければならぬと考え、今回の特集を組みました。

これが取材の様子です。

これが完成した紙面です。「神戸から福島から学ぶ滋賀のこれから」と題して、このような取材を行いました。お手元に配付してある方は、14、15面をごらんください。滋賀県立大学小泉先生、福島大学前川先生、京都大学牧先生に取材させていただいたこと。災害メモリアルアクションKOBÉに参加したことについて記事にしました。

内容について説明します。

まずは、本校生に、「発生すると予想される南海トラフ巨大地震について危険性を知っていますか」、また、「そのような震災への対策をしていますか」とうアンケートを実施しました。「危険性を知っている」と答えた生徒は86%ですが、「対策している」と答えた生徒は18%でした。この結果から、震災を他人事のように思っている生徒が多いということがわかりました。この結果をもとに小泉先生にお話を伺ったところ、日ごろから地震に気を掛けることが大切だと教えていただきました。ほかにも、福島大学の前川先生や、京都大学の牧先生にお話を伺い、神戸や福島が震災の経験にどう向き合っているかを伝えようとしま



した。私たちが伝えようとしたことが本校生にどのように伝わったかを調査しました。新聞を読まなくなった高校生が増えたと言われている中、多くの生徒が記事を読んでいるのが実感できました。一番関心を集めたのが、やはり身近な滋賀の情報でしたが、神戸や福島の伝えようとする取り組みに興味を持ってくれた人もいることが感じられました。

今回の特集について寄せられた声を紹介します。「自分にも関係あるのだと思うようになった」、「他人事ではないと感じさせられたし、私たちにできることをしっかりしていこうと思った」、「忘れてしまう記憶を呼び起こすことができる記事だと思った」、「教訓を生かせるようにしたい」など、このほかにも多くの声が寄せられました。これらの取り組みから感じたことは、滋賀でも他人事ではないという意識はあるが防災への行動につながられていな

い。過去の教訓が伝われば生かしていこうと意識を持ってもらえる。震災が発生したということを伝え続けないと忘れ去られる。ということです。

私は、今回この特集を通して、福島だけではなく神戸から学ぶことができ、学んだことを伝え、より多くの人に知ってもらうということが大切だと思いました。震災が発生したということをただ過去の出来事と思わず、これから自分の身にも起こるかもしれないという意識を持つべきだと思います。そして、震災を経験していない私たちにできることは、伝え続けることです。神戸や福島の教訓を伝え続けなければならないと考えます。彦根東高校新聞部はこれからも伝えることを大切に活動を続けていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。



国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°(明石高専防災団)地域連携チーム・開発チーム



D-PRO135° 明石高専防災団

地域連携班

今までの活動 Past Activities

私たち D-PRO135° は、発足当時から東二見地域に関わる減災活動を行ってきました。近年はさらに活動地域を拡大し、様々な地域、防災団体と関わりあいながら活動しています。ここからは今年度の主な活動について紹介させていただきます。

神戸高専防災授業 Event in the KCEIT

毎年、神戸高専にて避難所運営ゲーム「チャレンジ」を実施しています。今年も例年通り、事前の防災授業とチャレンジ体験会を合わせて行いました。チャレンジ!の「競う」ゲーム性もあり、毎年かなりの盛り上がりを見せてくれており、防災に触れるきっかけづくりとして今後も活動を続けていきたいと思っています。

新たな活動 江井島中学校 New Activities 防災授業

地域連携事業の一環として、明石市の江井島中学校にて防災授業および避難所運営ゲーム「チャレンジ」を実施しました。7月10日の防災授業では、メンバーの学生が災害時の避難所について授業をしました。中学生の皆さんにも、避難所で起こる問題や運営について様々な意見を発信、学生と共に議論しました。11月9日には、江井島中学校 PTA、江井島まちづくり協議会のご協力のもと、江井島中学校の全校生徒に、避難所運営ゲーム「チャレンジ」を体験していただきました。今まで学習した防災知識を活かして、生徒同士で競争しつつも、防災に対しての積極的な活動を促せる活動となりました。



明石南高校との交流

今年三度にわたって、明石南高校のめいなん防災ジュニアリーダー (MRDP) のみなさんと交流会を行いました。MRDP 様は、防災事業や地域交流、防災ゲームの考案など、D-PRO135° と近い活動をしていることもあり、交流会はお互いの活動について話し合う機会となりました。第一回、第二回では、非常食の食べ比べや防災ボードゲーム RESQ の体験会などを行いました。そして第三回では、お互いのチームがそれぞれ新たに開発したゲームの体験会と、それについての意見交換を行いました。D-PRO135° のメンバーにとっては、同じ学生という立場で防災活動を行っている団体との交流で、親近感を持ち、より防災活動へのモチベーションを高める機会となっています。それに加えて、現役の高校生との交流は D-PRO135° メンバーにとってコミュニケーションについて見つめ直す機会でもあり、新鮮な視点での意見を得られる貴重な会ともなっています。今後も互いの活動を高め合うことを目的に交流を深めたいと思っています。



二見地区子ども食堂

今年度の新たな活動の1つとして、明石市二見地区の複数の子ども食堂にて、地域の子どもたちとの交流と防災ボードゲーム RESQ の体験会を実施させていただきました。昨年12月中にすでに三度活動を行い、今年1月にも一度、また別の子ども食堂で活動させていただく予定となっています。そもそも子ども食堂とは、地域の子供達が食の機会を通して地域の人と交流を深めることを目的とされたもので、今回の活動はその一環としてお声かけいただいたものです。実際の活動では、活発な子どもたちと共に RESQ を遊び、防災への関心を持ってもらう機会を作る、ということももちろんながら、それと同じくらいに、D-PRO135° メンバーにとっても地域の人と関わり、地域のこともっと深く知る大切な機会として捉えています。今後も子どもたち、地域の人々と活発な交流を続けながら、お互いに地域について、地域の防災について理解を深め合える貴重な機会として活動をしていきたいと思っています。D-PRO135° メンバーも全力で地域に寄り添える活動を、今後も目指して努力していきます。

参考：あかしこども財団様 - こども食堂とは
(19/12/30 https://akashi-kodomo-zaidan.jp/index.php/kodomoshokudo_about)



情報発信 Information



私たちの活動 About D-PRO135°

D-PRO135° は 2015 年夏に発足された防災団です。1 年次の必修科目「防災リテラシー」を経て、防災士資格を取得した有志の学生が集い、様々な防災への関わり方を発見するため日々活動しています。



D-PRO135° 明石高専防災団

ゲーム開発班

今までの活動 Past Activities

私たち、D-PRO135°は、「実は防災って楽しい」をテーマに、防災に関わるきっかけづくりをゲームを通して作ってきました。

防災ボードゲーム「RESQ」は「つくる、あそぶ、まなぶ」をテーマに、地震や共助について体感的に学べるゲームです。ホームページからゲームに必要なものは全て印刷でき、誰でも手軽に遊んでいただけます。



避難所運営ゲーム「チャレンジ」は、避難所運営について仲間と相談しながら考える、シミュレーション型のゲームです。実際にある施設を舞台にし、そこを利用する人々を対象としたローカルな目線を重視しました。また、非常時に大切な臨機応変性や現場対応力も試されるゲームとなっています。

発案：太田敏一先生 協力：鳥居宣之先生（神戸高専）

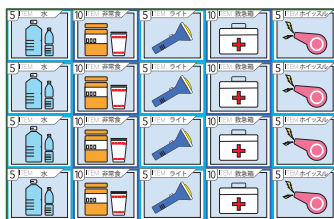
新たな活動 New Activities

RESQ+はコンセプトを「より新しく、より親しく。」とした、より身近な防災の学びを得るためのプログラムです。用意されたマップ、カードでしか遊べなかった従来のRESQの問題点を改善。Microsoft Excelを用いて、オリジナルのマップ、カードを自分たちで作成し、それを用いて遊ぶことができます。また、自分の住んでいる地域をゲームマップで再現すれば、地域の防災訓練のシミュレーションも行えます。このように、RESQ+は様々な機能が加わったことで「より新しく」なり、かつ諸地域を誰でも簡単に再現できるようになったことで「より親しく」なり、より身近な防災の学びを提供できるようになりました。



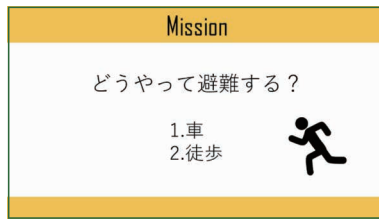
新たな活動 New Activities

Ready!は、アナログゲームならではの「直接話す」ことに重点をおいた防災ボードゲームです。RESQにはなかった、自助と風水害に焦点をあて、左のRESQ+のオリジナルマップ作成のシステムを高まった状態を想定し、避難や避難所生活に向けての準備をどう行うかを、アイテムの購入などを通してシミュレーションしていきます。しかし、諸地域を再現したマップ上で避難、避難準備を行うことで、実際に避難時に危険となる箇所や、地域としての災害への備えが万全であるかなど、地域の問題点をあぶり出し、話し合う機会を設けられるゲームに仕上がりました。



新たな活動 New Activities

Take Actionは、とにかく「避難すること」を意識を向けた、手軽に遊べる防災ボードゲームです。今までのゲームになかった、短時間でより短かな体験を得ることを目的としています。こちらも風水害に焦点を当て、災害の危険性が高まった状態を想定。避難に関する様々な選択、「ミッション」をクリアしながら、偶発的に災害が発生する前にうまく逃げ切ることがゲームの目的です。ゲーム内ではポイントの多さによって勝ち負けが決まります。最終的には、避難所にたどり着ければOK、辿り着けなければ減点という非常にシンプルでゲーム性のなかで、避難時の瞬時の判断や、事前避難の大切さを体感的に学ぶことのできるゲームとなっています。



情報発信 Information

Twitter
日々の活動やお知らせなどの内容を投稿しています。もっとも更新頻度が高いので、最新情報はこちらをご確認ください。

D-PRO135° [明石高専防災団]
@135_dpro

Facebook
基本的な投稿内容はTwitterと同じですが、写真や文章はこちらの方がより詳しいものになっております。

明石高専防災団
@dpro135

HP
組織概要やゲームの詳しい内容などを掲載しています。RESQのデータダウンロードもこちらから可能です。

D-PRO135° ホームページ
https://www.google.com/maps/d/view?hl=ja&ll=35.466667,135.466667&gl=ja

私たちの活動 About D-PRO135°

D-PRO135°は2015年夏に発足された防災団です。1年次の必修科目「防災リテラシー」を経て、防災士資格を取得した有志の学生が集い、様々な防災への関わり方を発見するため日々活動しています。



○国立明石工業高等専門学校1では、今から明石高専防災団D-PRO135°の発表を始めさせていただきます。D-PRO135°の金子と申します。よろしくお願いします。

まず、D-PROとは何ぞやというところを私から簡単に説明させていただきます。

D-PROというのは、明石高専内で防災士の資格を取得

した有志のメンバーが結成した防災団で、今年度は30名ほどで同好会として活動しております。

本日はパンフレットにもあるように、地域連携班とゲーム開発班の発表をそれぞれ行います。前半は、地域と連携した事業について説明して、後半は、防災ゲームの開発を中心とした開発班の活動を説明させていただきます。

ではまず、地域連携班のほうから始めます。

○国立明石工業高等専門学校2 地域連携班を担当しています曾我部と申します。よろしくお願いします。

こちらでは、地域や学校内の防災力を高めて、そのためのきっかけを提供することを目的に活動しています。主に、もう一つの活動であるゲーム開発のほうで制作した防災ゲームを用いて地域の方々を招いてゲームの体験会を行ったり、いろんな講演会に参加したりしています。

今年度は、主にこれらの活動に参加しました。順に説明していきたいと思います。

まずは、神戸工業高専での防災授業です。神戸高専では毎年、3年生を対象に防災事業が行われており、D-PROはそのサポートとして参加しています。今年は9月24日に講演を行って、同じく25日に避難所運営ゲーム「チャレンジ!」を行いました。「チャレンジ!」というのは、避難所運営ゲームである「HUG」をもっと楽しいゲームにできないかということで開発されて、チームに分かれて避難所の運営方法について話してもらって次々と起こるハプニングに対応していくというゲームです。「HUG」よりももっとゲーム要素がふえています。学生たちがさまざまなアイデアを出してくれて、とても盛り上がる議論となりました。

次に、同じ明石市内の江井島中学校というところで防災授業を行いました。7月10日に出前授業と題して避難所についての講演会を行いました。実際の災害での避難所の実態や現状を交えていろいろ知ってもらいました。そして11月9日に、同じく避難所運営ゲームの「チャレンジ!」を行って、中学生らしく元気に議論してもらい、避難所、防災について考えるきっかけというのをつくりました。

次に、明石市の二見地区というところで行われている子ども食堂に、防災ゲーム「レスキュー」の体験をしてもらいに行きました。二見地区の自治会とは以前から防災訓練と一緒に参加するなどやってきたのですが、今回はその活動の延長として、小学生らを対象とした子ども食堂、そこで、その中の催しとしてゲームの体験会を行いました。これは、今、まさにやっている活動の中で、去年の12月に3カ所の子ども食堂で行って、今月、もう一回行う予定です。そのときには小学校の先生方にも来ていただいて、学校での防災学習ツールとして利用を検討してもらいま

す。また、子どもたちというのが、ゲームを覚えるというのが僕たちよりも早くて、ゲームさえ用意すればわれわれがいろいろと手助けをしなくても勝手に遊んでくれると考えて、今後子ども食堂であったり、学校であったりで防災学習のツールとして利用してもらうことを考え、継続的な活動として今は検討しています。

最後に。先日、明石南高校の明南防災ジュニアリーダーの皆さんと3回にわたって交流会を行いました。同じ明石市内で同じ世代の学生として、互いの活動を知るという機会をつくりました。この明南さんが、体を動かす防災ゲームをつくられていて、そのボードゲーム版をつくらうということで、われわれも同じようにボードゲームを開発しているので、こっちのゲームを遊んでもらったり、意見交換をしたりして互いに開発しました。先月、そのゲームの披露会というのを行って、われわれとは全然アプローチが違って、遊び方はいろいろあるのだという、お互いにいい刺激となりました。今回、われわれが開発したゲームについては、後ほど発表します。

ここまで紹介したのはほんの一部で、ほかにも地域の行事やイベントだったり、学校の学園祭に当たる高専祭というものでゲームの体験会を行ったり。また、この写真のように各地での防災訓練に参加して地域やメンバーの防災力を高めるという活動をしています。この写真は、9月に行われた和歌山県海南市での防災訓練に参加した様子です。避難所でのボランティア運営訓練で、中学生とのワークショップを通して自分たちの防災力を高めました。

最後に、地域連携授業においては、われわれはあんまり一つのこれといった活動に専念しているわけではないのですが、この幅の広さというのが強みであって、これからもさまざまな活動を展開して地域の防災力を高める、また、そのきっかけをつくるということに専念していきたいと思います。

地域連携班は以上です。

○国立明石工業高等専門学校3 明石高専防災団3年の石原 由貴です。よろしくお願いします。

私からは、二つ目の活動である防災ゲームの開発について発表させていただきます。

昨年、作成したゲームは4つで、「レスキューライト版」、「レスキュープラス」、「レディ」、「ティク・アクション」です。それぞれのゲームについて順に説明していきます。

一つ目は、「レスキューライト版」です。従来の「レスキュー!」を用いた体験会を行った際に子どもたちにも体験していただきましたが、ゲームが難しくてわからないといったご意見を多くいただいたことから生まれたゲームです。マップや道具は「レスキュー!」と同じものを使用しますが、ミッションを簡易化することで簡単に遊ぶことが



できるように改良し、小さな子どもを含む幅広い世代の方に楽しんでいただけるゲームを目指しました。

二つ目は、「レスキュープラス」です。従来の「レスキュー!」は、用意されたマップ、カードで遊ぶボードゲームでしたが、「レスキュープラス」では、Excelをもちいることでオリジナルのマップ、カードをみずから作成し遊ぶことができます。また、この際に、自分が実際に住んでいる地域をマップとして再現すれば災害を身近に感じ、考えることができる他、地域の防災訓練のシミュレーションを行うこともできます。このように「レスキュープラス」は従来の「レスキュー!」に比べ、さまざまな機能が加わったことで体験する人にとってより親しみやすく学ぶことができるものとなりました。

今まで作成してきた「レスキュー!」、「レスキューライト版」、「レスキュープラス」は、地震が起こったらどう行動するのかというポイントに着目したゲームになります。しかし、近年発生した災害は地震だけにとどまらず、台風や豪雨による風水害や土砂災害が多く発生しました。そこで、先ほど話させていただきまして、自分たちでマップを作成することができる「レスキュープラス」を活用した風水害・土砂災害に着目した新ゲーム開発を行いました。

一つ目が「レディ」です。「レディ・ゴー」の「レディ」から取っており、名前のおり「準備をすること」に重きを置いて作成したゲームです。風水害は自信と比べ、事前にある程度予測し備えることができるという大きな違いがあります。その重要性を、このゲームを通して学ぶというものです。まず、このゲームには、従来のゲームにはなかった「話し合う」という段階がメインとなっています。自分たちが実際に住んでいる町をマップに映し、もしこの町に大雨が降ったらどこが危険な場所なのか、避難場所はどこに設置するべきなのか、何を備えておくべきなのかを話し合うことで、危険箇所の確認、適正な避難場所、防災備品について、自分が住む町を町民みんなで改めて考え、見直すことができます。ゲームは、初めの6ターンで、最初に与えられるポイントを使い、それぞれが必要だと思う防災グッズを購入することで災害に備えていきます。その後ゲームが進むにつれ、土砂崩れや川の氾濫、道路の冠水など、さまざまなアクシデントが発生していきます。初めの6ターンで手に入れた防災グッズを使用しながら災害を乗り越え、また、最初に話し合っ決定した避難所へと避難して行きます。その道中にも、懐中電灯や非常食など、さまざまな防災グッズを必要とするアクシデントに遭遇し、その場面、場面で備えることの大切さを学べるよう工夫しました。また、事前に設定した避難所ですが、ゲームの進行とともに避難者が増加し避難所に入れないため、第2の避難所へ向かうなどのアクシデントをゲー

ムに含ませることで、よりリアリティを持たせました。避難所到着後、手元に残されたポイントの比較でゲームの勝敗が決定します。このゲームに取り組むことで、決して災害が他人事ではないということ、備えることがどれだけ命を守ることにつながるのかということをゲーム感覚で楽しく学んでいただけたらと思います。

二つ目が、「テイク・アクション」です。このゲームは、「とにかく避難すること」に重きを置いたゲームです。「レディ」と同様、風水害に対応するゲームですが、従来のゲームに比べ短時間で身近な体験を得ることを目的としています。ゲームは、ミッションを随時クリアしながらポイントを獲得していき、ゲームの進行とともに発令される避難勧告や避難指示に従いながらゴールとなる避難所を目指していきます。非常にシンプルなゲーム性の中で、避難勧告や避難指示などの情報の見方、また、災害発生時に「迷わず避難」という選択をすることを、小さな子供でも簡単に短時間で学ぶことができます。

ここまでさまざまなボードゲームを紹介してきましたが、特徴をまとめていきたいと思います。

上が「簡単で手軽」、下が「奥深い」「難しい」、左は「量産性が高い」、右は「地域性が高い」という表です。

まず、初代「レスキュー!」は、簡単につくって簡単に遊べるゲームです。さらに難易度をさげて小さな子でも遊べるようにしたのが、「レスキューライト版」です。「レスキュー」の遊びやすさはそのままに、マップやミッションを自分の地域に合わせてつくることできるようにしたのが「レスキュープラス」です。ここまでは、おもに地震災害を対象としています。

マップづくりを生かし、新たに風水害や土砂災害に対応させたのが、「レディ」と「テイク・アクション」です。「レディ」は、準備するにも遊ぶにも手間と時間がかかりますが、地域やプレイヤーの情報をかなりインプットすることができるため、シミュレーションとして使うことができます。「テイク・アクション」は、地域性を入れながらも手軽に遊ぶことができます。

このようにさまざまなタイプのボードゲームがあり、加えて避難所運営ゲーム「チャレンジ!」があります。行うタイミングや対象者に応じて使い分け、活用していきたいと思っています。

今年も新たなゲームの作成を考案中ですが、ボードゲーム以外のゲームとして、防災を学ぶカードゲームを考えています。私たちが継続して取り組むこれらの活動が、さまざまな形でさまざまな人へと防災として伝わり、いつかまた来る災害に防災士として貢献できればと思います。

○国立明石工業高等専門学校1 以上でD-PROの発表を終わります。ありがとうございました。

神戸学院大学

現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ



災害メモリアルアクションKOBЕ 2020 「わせらん新聞」第2号 ～阪神淡路大震災の教訓～

神戸学院大学 / 現代社会学部 / 社会防災学科 / 安富ゼミ



インタビュー

昨年度の活動では、「行政」「マスコミ」「研究者」などといった専門的な知識をもった方々にインタビューをしましたが、今年度は昨年度の分野に加え「住民」「消防官」の方々にインタビューをさせていただきました。阪神淡路大震災から得た教訓、災害に対する考えを家族や大切な人に伝えているかについて調べてきました。



インタビューに
ご協力いただいた方々、
ありがとうございました！

インタビューは、学生が2～3人組となって対象者にアポイントを取り、実施しました。

インタビュー対象者の中には、今もなお防災の第一線で活躍されている方はもちろん、震災当時現場で活躍されていた方など、幅広い方々にご協力いただきました。

期間は7月下旬から12月上旬の約五か月の間で、合計27人の方々にインタビューをさせていただきました。

新聞作成

今年度も昨年度に続き、インタビューにとどまらず、「発信」にも力を入れ、正しい伝え方を模索する一つの手段として新聞を選び、読売新聞大阪本社で35年間、記者として働きデスクも経験している安富先生の監修の下作成しました。神戸新聞社が提供するクラウド型アプリ「ことまど」を利用し、新聞を作成しました。

「ことまど」は、小学生が学校で新聞作成のために利用するアプリです。簡単に、本格的な新聞を作成することができます。

新聞名は、「わせらん新聞」としました。「わせらん」とは、淡路島の方で、「忘れない」を意味します。

教訓と災害に対する考えを聞き、さらに家族や大切な人に話をしているか、などのインタビューした内容をまとめました。阪神淡路大震災の当時の思いを風化させないという気持ちを込めて、全部で9枚の新聞にまとめました。



-----Member-----

教授(デスク) 安富 誠
3年(記者) 楠橋 力 林 優真
鈴木 大貴 武岡 洸樹 安藤 彪華
灘井 彩乃 榎本 倅生 山 楓生
佐々木 文都 田邊 銀平 大矢 哲也

ポートアイランドキャンパス 〒650-8586 兵庫県神戸市中央区港島1-1-3 ☎078-974-1551

○**神戸学院大学1** 神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミの大矢と武岡と灘井と楠橋です。よろしくお願いします。

僕たちの活動としては、昨年と同様、「わせらん新聞」という新聞を作成させていただきました。その活動の流れとしては、9月ごろからインタビュー対象者を27名と決定して9月ごろからインタビューを開始し、新聞を作成していきました。今年のインタビュー対象者が27名で、去年が24名で、合計51名。去年から合計51名の方にインタビューさせていただきました。今年の取り組みとしては、インタビュー対象者が一般の住民の方10名と行政の方5名、研究者の方5名、マスコミの方4名、消防の方3名にインタビューさせていただきました。このインタビュー対象者は、昨年が行政中心の人が多かったため、今年は住民の方を中心にインタビューさせていただきました。また、新しく消防の方にもインタビューをさせていただきました。

新聞作成ですが、「ことまど」という神戸新聞社のものを利用して作成させていただきました。インタビューしただけでは発信できないので、この新聞を通して多世代の人が読めて、物として後世に残せるので、新聞をつくって発信していこうとなりました。

「わせらん新聞」として、皆さんの手元にあるように、このように一面に3人の方を載せさせていただいて9枚作成しました。その中で、5人の方をインタビューした中で、

27名中の5名の方を発表していきたいと思います。

まず一人目として、もと神戸市役所の職員であった太田さんにインタビューさせていただきました。太田さんは、阪神・淡路大震災のときは神戸市役所で働いていて、震災当時、復興計画に携わっていました。復興計画をする中で、最初はどうしていいかわからず手つかずの状態が続いたそうです。その中で、阪神・淡路大震災の教訓として一つ目が、阪神・淡路大震災の被害を学んで次の世の中に残して、その経験を生かしていくというのが大事だとおっしゃっていました。その中で、災害は多種多様であって、後世に残すのだけど、その経験が必ず全部生きるわけではなくて、生きる部分もあれば全く生きない部分もある。災害は多種多様であるので、新しい災害が起こったら次どうしたらいいかなど研究を続けて新しい災害にも対応できるようにしていかなければいけないとおっしゃっていました。

続いて二人目になります。

○**神戸学院大学2** 次に、私は、兵庫区で被災したト部さんにお話をお伺いしました。当時、ト部さんは、神戸市上沢にある実家に住んでいました。部屋で寝ているときに地震に遭い、実家の一部は潰れて2階は道路側へ滑り落ちていました。その後、外に出ようとしたのですが階段が半なくなっていたため、2階からカーテンを2本つなぎ合わせてロープがわりにして脱出しました。その際に、向かいのアパートの1階に祖父が埋まっていることを知り、声が



している間に助けないといけないという思いで、何もしていないということは考えられなくて近所の人と祖父の救助活動をしました。この救助活動の中で、知っている人は助けようとするが知らない人は助けないといった人間味のある瞬間を感じたそうです。震災以降、ト部さんの災害に対してのイメージは大きく変わり、現在では震災をきっかけに防災とデザインに関係した仕事をされています。また、家族とともにハザードマップで避難経路や安全な避難場所を確認されているそうです。

以上のことから得た教訓は、人間は知っている人は助けようとするが知らない人は助けないということと、建物を建てる前に、事前に防災を踏まえた構造を取り入れるということです。

○**神戸学院大学3** 私は、まちづくり会長の田中保三さんにお話を伺いました。地震が起き、社長をしていた田中さんの会社は、6棟あったうちの5棟が燃え1棟だけが残っている状態でしたが、田中さんは社長として、残っている1棟で社員とその家族を守ることを決意します。田中さんは、トップは、やるにしてもやらないにしても早い決断をしなければいけない、社員を不安にさせてはいけないとおっしゃっていました。そこから、震災以前に付き合いのあった卸売業者のほかに、地震が起きたことで出会えた人たちと助け合いながら会社経営を続けます。田中さんは、震災に出会った人たちのつながりをとても大切にされていました。震災で失ったものはたくさんあるけど地震が起きたことで出会えた人もいて、その出会いと出会った人たちのきずなが震災を経験し得たものの中で一番大きいとおっしゃっていたその言葉がとても印象的でした。お話を聞き、私は今まで出会った人たちとのつながり、これから出会う人たちとのつながりを大切にしたいと思いました。

○**神戸学院大学4** 私は、防災伝道士の大西賞典さんと神戸学院大学の中田敬司教授にお話を伺いました。

まず、大西賞典さんは、当時、仏壇屋を営んでおり、震災発生後、自分にも何かできないのかを考えていたところ、社員たちの声で、会社全体でボランティアを行おうという結果に至りました。震災が起きたことがきっかけで防災に対する意識が変わりました。世間では災害の後の炊き出しや災害ボランティアなどの「事後活動」を防災活動だと勘違いしている人が多く、その要因としてメディアの伝え方に問題があるとおっしゃっていました。以上のことから、防災とは「事前の活動」が大切であることや、自らが発信源となり、相互通信で伝えていくことが教訓として挙げられました。

次は、神戸学院大学の中田教授についてです。当時は広島消防の職員で、消防職員としては震災にかかわっていないそうですが、その後の研究や幅広い活動などから、教訓としては、災害に対する危機感や対策を市民一人ひとりで行う、災害が起きるたびに新たな課題・教訓が生じるなどが挙げられました。

次に、インタビューした方に聞いた災害に対する意識の変化です。震災前は、70%の人が「していない」、30%の方が「している」。震災後は、85%が「している」、15%が「していない」という結果になりました。このことから、震災を経験された方は震災前より災害に対する意識が高くなるという傾向があると言えます。

最後に、僕たちの世代は震災を経験していない人が多いので、現在は震災前の70%の枠に入っている人が多いと思いますが、本日のメモリアルアクション活動を通して、震災前の30%に若い人たちが入っていけるように活動や行動を起こしていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。





災害関連死の教訓は生かされているのか？
～児童・住民の意識の現状～

稲葉 真緒 Mao Inaba / 関西大学社会安全学部 4 年

背景・目的

阪神・淡路大震災では、災害関連死で919名が犠牲になった。これを受け、国レベル、地方自治体レベル、地域や住民レベルで様々な対策が実施されてきた。しかし、その後も、2004年中越地震、2011年東日本大震災、2016年熊本地震などで多数の関連死が発生している。本研究では、25年前の教訓は生かされているのかを検証する。具体的には、住民の間に関連死を減らすことにつながるようなイメージがどの程度定着しているのかを明らかにする。

手法

1. 南海トラフ巨大地震から1週間が経過したと仮定し、「避難生活で何に困るか」というテーマでワークショップを実施する
2. ワークショップ成果物を関連死発生フロー図（川崎作成）に対応させ、分析する。



結果

対象：南海トラフ巨大地震で大きな被害が想定されている愛知県田原市のA小学校

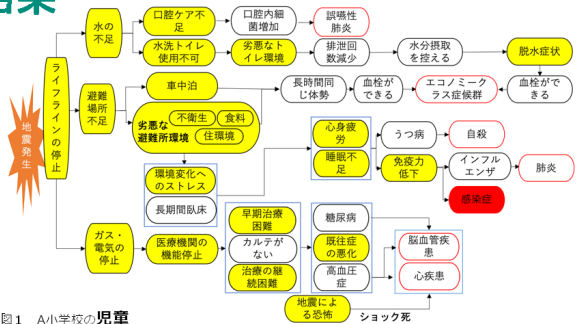


図1 A小学校の児童

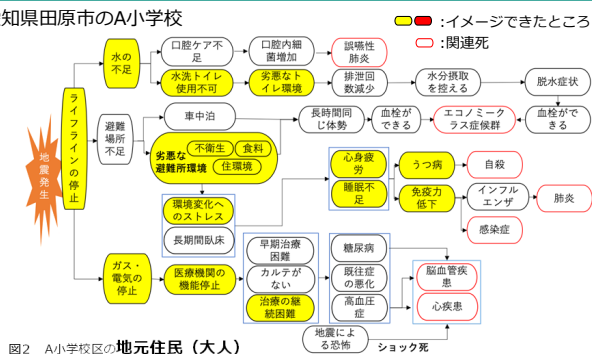


図2 A小学校区の地元住民（大人）

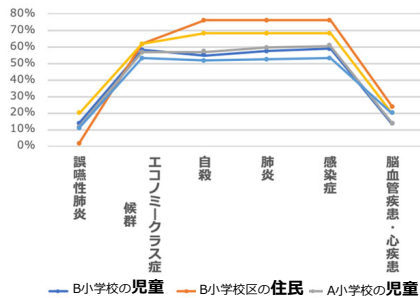


図3 グループ毎の全アイデア数における死因別割合

表1 循環器疾患と呼吸器疾患による関連死の割合（災害別）

	阪神・淡路大震災	東日本大震災	熊本地震	中越地震
循環器疾患	38%	37%	39%	61%
呼吸器疾患	35%	31%	28%	16%
計	73%	68%	67%	77%

A小学校の児童（図1）

- ・37個あるフローのうち20個の指摘があった。
- ・「死」の部分を指摘することができた。

A小学校区の地元住民（図2）

- ・37個あるフローのうち13個の指摘があった。
- ・「死」の部分を指摘することができなかった。

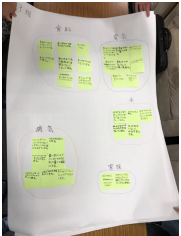
全体（図3、表1）

- ・全体的に誤嚥性肺炎（呼吸器疾患）と脳血管疾患・心疾患（循環器系疾患）が想像できていない。

結論

関連死を発生させないように避難所生活をどうしていくべきかを地域レベル・個人レベルで検討する場合、以下の点に注意が必要である。

1. 多様な関連死の発生プロセスに対して、そこに至る前の段階の問題をいずれも指摘できているが、死に至る所までは想像できていない。そのため、死に至る深刻な問題だと捉えて対策が実施されにくい可能性がある。
2. 過去の災害で多く犠牲が出ている循環器疾患（脳血管疾患・心疾患）や呼吸器疾患（誤嚥性肺炎）が十分に想像できていない。



参考文献

- 1) 第12章今後の災害に向けた体制整備等-熊本県。
https://www.pref.kumamoto.jp/common/UploadFileOutput.ashx?c_id=3&id=23049&sub_id=1&fileid=136857 2019年5月9日閲覧
- 2) 上田耕蔵. 震災関連死におけるインフルエンザ関連死の重大な都市問題/第100巻-12号, 2009年12月号
- 3) 読売新聞社「震災関連死の疑い」282人. 避難所 不衛生, 寒さで拡大. 本紙3県病院調査「2011年4月11日, 夕刊,p1.(3ミダス歴史館2019年5月9日閲覧)
- 4) 突然死の現状 | 実地診療のためのデータベース | 循環器最新情報 | 日本心臓財団の活動 | 日本心臓財団とは | 公益財団法人 日本心臓財団, <https://www.jhf.or.jp/pro/info/shotuwaen.html> 2019年5月9日閲覧
- 5) 震災関連死の実態とその対策-神戸協同病院, http://kobekyo-hdp.jp/images/material/disaster-related_death_and_countermeasures.pdf 2019年7月5日閲覧

北風の防災から太陽の防災へ



社会安全学部 / 社会安全研究科
総合防災・減災学分野 奥村研究室



○**関西大学1** 関西大学から来ました稲葉です。今日は、「災害関連死の教訓は生かされているのか」について発表していきます。

今回、この研究でワークショップを実施したのですが、それはこの地図の青いフラッグが立っている2カ所で行いました。一つ目は、右のほうの愛知県田原市で行いました。ここは、南海トラフ巨大地震が発生した際、被害が大きいと予想されている地域です。また、もう1カ所は、今、私たちがいる神戸でワークショップを実施しました。この研究の背景としては、1995年に阪神・淡路大震災が発生して、関連死で919名の方が犠牲になりました。それを受けて国や地方、住民間で関連死の対策がさまざま行われてきたのですが、中越地震、東日本大震災、熊本地震などでは関連死で多くの方が犠牲になるという関連死の被害が繰り返されています。それで私は、25年前の教訓は生かされているのか疑問に思いました。また、私たちのゼミ室で、南海トラフ巨大地震が起こった際、関連死でどのぐらいの方が犠牲になるのかを予想してみました。すると、約7万4,000人の方が犠牲になる可能性があることがわかりました。これをきっかけに、私は関連死のことを研究していこうと思いました。今回、私の研究の目的は、災害関連死について25年前の教訓は生かされているのかを検証することです。手法としてはまず一つ目、ワークショップを実施しました。このワークショップは、南海トラフ巨大地震から1週間が経過したと仮定し、避難生活で何に困るかというテーマで実施しました。右上の図がそのときの様子です。このワークショップを受けて二つ目、ワークショップ成果物を関連死発生フロー図に対応させ分析しました。右下の図が、関連死発生フロー図です。これは、地震が発生して関連死に至るまでどのようなプロセスを経て関連死で犠牲になるかというものを表した1枚の図です。

ワークショップについて説明します。

ワークショップは、先ほど申したとおりテーマとして南海トラフ巨大地震発生から1週間が経過したと仮定し、避難生活で何に困るのかというのを考えてもらいました。実施場所は3カ所で行って、愛知県田原市の二つの小学校で児童と住民に参加してもらいました。また、神戸の災害を専門に学んでいる大学生にも参加してもらいました。作業の流れは、まず個人で考えてもらい、それをグループになって意見を出し合ってもらいました。今回、私は、この黄色の一つひとつの部分がフロー図にどう対応しているかを見ていきました。

次に、フロー図について説明します。このフロー図は、同じゼミ室に所属している川崎が作成したものです。こ

れは、過去の災害について文献を読み込んで、それを1枚の図にまとめたものです。まず、左側の「地震が発生してライフラインの停止」というところから始まり、最終的には、赤丸で示している「誤嚥性肺炎」で亡くなることや、「エコノミークラス症候群」で亡くなる。「自殺」、「肺炎」、「感染症」、「脳血管疾患」、「心疾患」で亡くなるというものが、1枚の図で表されています。例えば「誤嚥性肺炎」を例にとってみると、ライフラインがまず停止して、その次に水不足が起こります。そして、口腔ケア不足という歯磨きができないというようなことになり、口腔内細菌が増加して誤嚥性肺炎になります。

このフロー図とワークショップの成果物を比べて結果を見ていきます。

今回、3カ所でワークショップを実施しましたが、今回は1カ所に絞って結果を見ていきます。その後、全体についての結果も見えていきます。

まず、B小学校で実施したワークショップの結果です。これは、B小学校の児童がどのように関連死をイメージできているかを表したものです。児童は43名参加して、カード数は212枚集まりました。項目がそれぞれ31カ所あるのですが、そのうち19カ所がイメージできていました。また、赤丸で示している死因についてどうかというと、感染症については、死因のところまで想像できていました。他のところは、死因に至る前の段階ではそれぞれ指摘できているのですが、死因のところまでは想像できていませんでした。

次は、B小学校区で行った地元住民の結果です。地元住民の方は16名に参加していただき、カード数は57個集まりました。項目31カ所ある中で13カ所をイメージできていました。死因については、そこに至るまでの部分はそれぞれ指摘できているのですが、死因というところまではイメージできていませんでした。

次に、全体の結果を見ていきます。ここでは、各死因に関連する問題をどの程度イメージできているかを見ていきます。それが左のグラフになっています。このイメージ度合いというのは、こっちの右に書かれているように死因Aに関するイメージ度合いは、死因Aに関連するカード数を分子にとって全カード数で割ったものです。例えばこの死因Aに当てはまるのは、フロー図で死因にあった誤嚥性肺炎やエコノミークラス症候群、自殺、肺炎、感染症、脳血管疾患、心疾患などが入ります。誤嚥性肺炎を例に取って見てみると、まずライフラインの停止というところにカード数が6枚集まっていて、次、水不足が20枚、口腔ケア不足が2枚集まっていて、これらの数を足したものが分子に当たるもので、B小学校の児童の全カード数が分

母に当たるものです。これを計算した結果が左のグラフになりました。左のグラフでは赤丸のところに注目してほしいくて、誤嚥性肺炎と脳血管疾患、心疾患の部分が余り想像できていませんでした。私は当初、この研究を行ったとき、児童、住民、大学生によって何か違いがあるのかなと思っていましたが、誤嚥性肺炎、脳血管疾患、心疾患については他の死因に比べて全体属性に関係しなくても、あまりイメージできていませんでした。こちらの右下の表2を見てほしいのですが、これは、循環器疾患と呼吸器疾患による関連死の割合を示した表です。過去の災害で、循環器疾患と呼吸器疾患でおよそ7割の方が亡くなっています。それにもかかわらず、今回ワークショップを実施したところでは、呼吸器疾患である誤嚥性肺炎と循環器疾患である脳血管疾患、心疾患についてあまり想像できていませんでした。

これらの結果より、私は二つのことを結論づけました。

関連死を発生させないように避難生活をどうしていくべきかを検討する場合、以下の点に注意が必要であると思います。

まず一つ目、多様な関連死の発生プロセスに対して、そこに至る前の段階はいずれも指摘できているのですが、死に至るところまでは想像できていませんでした。そのため、死に至る深刻な問題だととらえて対策が実施されにくい可能性があると思います。二つ目、過去の災害で多く犠牲が出ている脳血管疾患、心疾患や誤嚥性肺炎が十分に想像できていませんでした。そのため、これらの対策が不足する可能性があると思います。

以上の点に注意してこれから関連死の対策を進めていく必要があるのではないかと思います。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。



兵庫県立明石南高等学校

めいなん防災ジュニアリーダーMRDP

【活動テーマ】絆～地域で繋がる防災～

活動の目標

「楽しく防災」

昔の人が生活の知恵として日常生活で行ってきた「防災」を高校生の視点で取り組んでいます。このチームは生徒会や部活動や委員会ではありません。防災、地域づくりに関心のある有志生徒による**高校生自主防災組織**です。

M(meinan)R(regional)D(disaster)P(prevention)は地域防災に取り組むチームとして名づけました。

1. プロフィール

2013年

兵庫県教育委員会教育企画課の事業で誕生した。

※生徒会・ボランティア部の生徒2014年から公募開始(1年生対象)

※公募にした理由
災害発生直後に動くのは被災者自身で特別な人ではない！
⇒「自助」「共助」の観点
「いつでも・だれでも」
令和元年は15名が参加。
⇒生徒による自主防災の実践グループです。

3. オリジナリティ

- I 公募で集まった生徒の自主的な活動チーム
- II 視点を地域コミュニティに置いた取組
- III 手作り感覚の活動



3. 2019年度の主な活動

- 6月14日 文化祭で南三陸町への支援募金活動実施。
- 6月28日「ファミリーぼうさい教室」
地域の小学校で防災イベント主催。
- 7月 5日 防災教育職員研修会(HUG)を実施。
- 7月12日 地域の知的障害者施設での交流会に参加。
- 8月24日 地域でHUG講習会実施。
- 9月 8日 高齢者施設で防災セミナー実施。
- 9月10日 明石高専D-PRO135*との交流
- 11月17日 地域の行事で防災イベント実施。
- 12月15日 防災訓練で実施。
- 12月18日 ひょうご若者被災地応援PROJECT活動報告。
- 12月24日 地域の知的障害者施設でクリスマス会実施。
- 12月25日 明石高専D-PRO135*と新作ゲームプレゼン。
- 1月11日 地域の新春の祭りにボランティア参加。
災害メモリアルアクションKOBEBEで活動発表。
- 1月27日 地域の幼稚園で「ぼうさいきょうしつ」実施。
- 3月 3日 地域の高齢者施設で傾聴ボランティア。
- 3月24日-26日 東日本大震災復興支援ボランティア
(宮城県本吉郡南三陸町)

©MRDP Produce 「にげろ！あにまるず」

防災知識遊んで学ぼう
地震発生、家族と避難～模擬体験ゲーム考案

緊急地震速報でシェイクアウト

急いで避難グッズをリュックに入れます。持ち出せるのは10品目

家族で協力して避難物を運べるから簡単です！

2018年チームで考案した高齢者から子どもまで楽しく防災に取り組める体験型ゲーム「にげろ！あにまるず」を地域の防災訓練で実施しました。今年明石高専D-PRO135*との交流を通じて「にげろ！あにまるず」のゲームボード版を現在作成中です。

ゴール後持ち出したものについて報告。ゲームの感想などを聞いて終わります。

完成品イメージ

ボードゲーム版は3～4人のチームで3チーム対決で実施します。もちろん、チームでなくてもOKです。

©2019年度の主な活動 (2019.4月～12月)

2019.6.14募金活動

2019.6.28HUG講習会

2019.6.29ファミリーぼうさい教室
にげろ！あにまるず

2019.7.5職員防災教育研修会(HUG)

2019.7.12「大地の家」訪問

2019.7.17防災ACTIVITY

2019.8.24鳥羽まち協HUG講習会

2019.9.10明石高専D-PRO135*との合同会議

2019.9.8和気あいあい防災セミナー

2019.11.17野々池コミセン祭り

2019.12.15鳥羽小校区防災訓練

めいなん防災ジュニアリーダーMRDPは防災の原点である地域での繋がりを目標に楽しく活動を続けます。

福島県立白河旭高等学校 福島県立白河高等学校

白河の高校生有志が活動する高校生編集部 裏庭編集部（一般社団法人 未来の準備室 内）

震災メモリアルアクション KOBÉ 2020 2020 年 1 月 11 日

福島県白河市 高校生防災ライター体験事業 白河の防災と復興を高校生が伝える！パンフレット 編集記

裏庭
Uhaniwa



1. はじめに - 福島県白河市と裏庭編集部について

福島県白河市にあるコミュニティ・カフェ EMANON を拠点に活動する「裏庭編集部」。有志の高校生ライターが、地域の情報を発信しています。滋賀県立彦根東高校との合同取材 (A) をきっかけに、2016 年から活動をスタート。これまでに、地域でがんばる人取材したインタビュー記事をウェブサイト執筆したり、高校生による高校生のためのフリーペーパー「ヨリミチ」(B) を製作したり、白河市役所とコラボレーションして、「広報しらかわ」で白河のお菓子を取材した連載記事を執筆 (C) したりしてきました。2019～2020 年の活動テーマは地域の防災。東日本大震災をきっかけに白河市に生まれた防災・復興の取り組みを取材し、白河市内外に発信するプロジェクトに取り組みしました。



白河市は、福島県中通り地方の南部に位置する街。人口は約 59,671 人、面積は 305.3 km² (2019 年現在)。東北の玄関口と呼ばれ、歌枕として有名な「白河の関」や松平定信が治めた「小峰城」があります。市内には白河高校・白河旭高校・白河実業高校 3 つの高校がありますが、大学や短大がなく、マスコミのような情報系企業もほとんどありません。

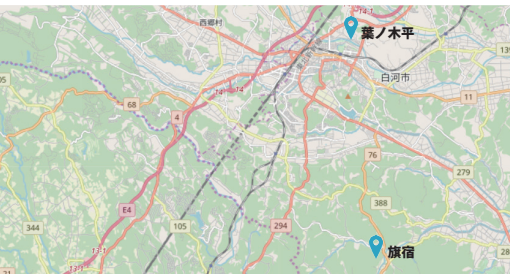
東日本大震災は、2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に発生。日本観測史上最大のマグニチュード 9.0 の揺れが、東日本の沿岸地域を中心に未曾有の被害をもたらしました。白河市では、震度 6 強の揺れによる土砂災害などで、葉ノ木平地区で 13 名、萱根地区で 1 名、大信限戸地区で 1 名がなくなりました。また、双葉郡にある福島第一原子力発電所の事故由来の放射性物質による環境汚染、それに伴う風評被害の影響も受けました。

2. 白河市旗宿地区と葉ノ木平地区、取材活動について

旗宿は、「白河の関」跡のある地域です。白河市の南部にあたり、栃木県と接しています。山林に囲まれ、里山が広がるエリア (D) です。地域の特産物は蕎麦で、関の森公園で行われる新そば祭りがあります。白河市内の汚染土壌をまとめて管理する「旗宿仮置き場」が設置されています。また、2019 年の台風 19 号では、地区内で土砂崩れが発生し、いくつかの道路が通行不可になってしまいました。



葉ノ木平は、小峰城から見て、阿武隈川の対岸にあたる地域。住宅地になっています。地域の東側を国道 294 号線が走り、西側には斜面があります。国道 294 号線は、国道 4 号線や東北自動車道と接続するために現在拡張工事中です。裏庭編集部では、2019 年 11 月にそれぞれの地区を取材 (E) しました。ご協力いただいたのは、白河市役所環境保全課・都市計画課・教育委員会のみなさんです。



3. 旗宿地区と除染、台風 19 号

旗宿地区には、「仮置き場」(F) があります。仮置き場とは、白河市内から取り除かれた除染廃棄物 (学校や住宅地、工場の敷地にある土や木の枝、葉っぱなど) を保管する場所です。それらを梱包したフレコンバッグを土で覆って盛り、住宅地からは離れた場所に作られました。仮置き場には、フレキシブルコンテナ (略称: フレコン) と呼ばれる袋があります。フレコンには、家庭や工場の除染作業で発生した土や木の枝、草が約 1 トン詰まっています。白河市旗宿地区仮置き場には、国会議事堂より広い敷地に、フレコンが 15 万袋並べられています。住んでいる近くには、除染で発生したゴミの詰まったフレコンがあったら、体に悪い影響が出るのではないかと考える人もいかもしれません。しかし、旗宿地区では違いました。仮置き場を設置する際、市の職員の方の説明もあって、住民全員が設置に同意しました。そして地域の方からは、(白河市全体の) 除染を子供たちのためにはやく進めて欲しいという声があったそうです。震災から 9 年が経とうとしている現在でも、地域の方々の安心感を確保するために旗宿の住民自ら組織した「旗宿監視委員会」が活躍しています。<丸山>



2019 年の台風 19 号の際には、地区の中を流れる阿武隈川支流の社川 (やしろがわ) が氾濫しました。山に囲まれた地形のため、地区内では土砂崩れも発生しました。地区と白河市街地を結ぶ道路が氾濫によって陥没し、土砂が流入。集落が孤立状態になってしまう危険性がありました。旗宿の住民の方は、市職員が到着するより先に、公民館に集まっていた。避難所の設置に携わった藤田さんは「避難所は市役所が設置するもの、と思っていたので驚いた」「心強いな」と感じたそうです。<青須>

4. 葉ノ木平地区と震災復興記念公園

葉ノ木平地区では東日本大震災により大規模な土砂崩れが起こりました (H)。約 7 万 5000kg の土砂が流れ落ち同地区を襲い、13 人の方が亡くなりました。この被害を忘れないようにと白河市によって作られたのが葉ノ木平震災復興記念公園 (I) です。ただの公園ではなく、防災公園として様々な工夫がなされています。

<かまどベンチ (J)> 通常はベンチとして使用。災害時には、座板を外すことで炊き出し用かまどになる。薪を燃やして、お湯を沸かし、鍋料理ができる。

<防災トイレ> マンホールの蓋を外し、テントや仮設洋式便座を組み立て、非常用トイレとして使用することができます。断水等で水洗トイレが使用できなくなった際にも、下水道と直接繋がっているため、流す必要がありません。

<防災あずまや> 屋根付きベンチのあずまや。災害時には、防風のためのテント幕を張ることができる。寒冷期の被災でも、休憩場所として活用できる。

<震災の記念碑> 公園の奥に行くと「震災の記念碑」があります。毎年、3 月 11 日は公園で慰霊祭が行われています。午後 2 時 46 分、記念碑の前で住民の皆さんが黙祷をします。<坂田>



5. 仮版パンフレット配付中 & 編集中です！

私たちは「防災ライター」。取材した内容をパンフレットに編集し、白河市内外の方に広く伝えていきます。パンフレットには、今日の震災メモリアルアクション KOBÉ に参加した感想も加筆して紹介する予定です。完成したら郵送いたしますので、ご希望の方はぜひ右の申し込みフォームからお申し込みください！



※お問い合わせ先
旗宿地区 (白河旗宿) 「白河旗宿」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。
旗宿地区 (白河旗宿) 「旗宿地区」地区、旗宿地区の防災・復興に関するお問い合わせ先です。

パネルディスカッション

テーマ：今、私が伝えたい??こと

【コーディネーター】

- 関西大学 社会安全学部 准教授 奥村与志弘さん
- 人と防災未来センター研究部 高原 耕平さん

【グラフィックファシリテーション】

- TAGAYASU 鈴木 さよさん
- 滋賀県立大学 環境科学部 1年 多田 裕亮さん

【登壇者】

- 神戸市立渚中学校
小沼 楓夏さん 橋本 和香さん 西田 哲男 先生
- 滋賀県立彦根東高等学校
小峠 実咲さん 宮下 晶さん
藤村 知行 先生(新聞部顧問)

○司会 人と防災未来センターリサーチフェロー 辻岡さん

お待たせいたしました。それではパネルディスカッション「今、私が伝えたい??こと」を始めます。

防災は、私たちの大切な出来事を誰かの大切な未来へつなげる試みです。そんな試みをアクションすることになった学生たちと、震災を「伝えたい」「活かしたい」という思いの原動力や活動の中での迷いや気づきを考えます。福島の人たちと一緒にことばを探しているチームと、神戸の人たちと一緒に避難所のあり方を考えているチームに登壇していただき、次の時代に「KOBEのことば」が伝わる形を探ります。

コーディネーターをご紹介します。

向かって左から、コーディネーターを担当していただきます人と防災未来センター研究部、高原耕平さん、同じくコーディネーターを担当していただきます関西大学社会安全学部、奥村与志弘さん。

続きまして、舞台下でグラフィックファシリテーションを担当していただきますTAGAYASUの鈴木さよさんと滋賀県立大学の多田裕亮さんです。

そのほか、本日ご参加いただいている学生さんや関係者の皆さんも意見交換にぜひ御参加ください。また、ここでグラフィックを担当していただきます鈴木さよさんから、グラフィックについて一言御説明いただきます。

○TAGAYASU鈴木さん パネルディスカッションの様子をその場で絵に描かせていただく鈴木と申します。今日、この絵にする理由なのですけれども、KOBEのことばと表紙に書かれているのですけれども、私たちは人に聞いた話をすぐ忘れてしまう。自分が話した話も30秒後には忘れがちと言われているのです。けれども、そういったものを残す一つの方法として絵と文字で残していくという方法をとらせていただきたいと思います。せっかくの貴重な一時間の話を文字に残すことも映像に残すことも全部大事だと思うのですけれども、熱量と一緒に色と絵で残させていただきます。答えのない未来について話し合うと思うのですけれども、今日話したこと、今日感じたことは、一年後に見返したときに感じることは違うのかなと思うので、皆さんが今日終わった後もこの絵を見ながら思い出していただければ。あと今日この場に来られなかった人に次に来る災害に備えるために伝えたいことを伝えるときに使っていただければと描かせていただきます。よろしくお願いします。



○司会 人と防災未来センターリサーチフェロー 辻岡さん

ありがとうございます。

ここからの進行は、コーディネーターの奥村さんと高原さんをお願いしております。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

○高原コーディネーター こんにちは、高原です。よろしくお願いいたします。ここに立つとめっちゃ光がきます。先ほど発表してくださっていた学生の方たちがこんなところでやっていたのだなと思って、改めてすごいことをやっていたのだなとちょっと思いました。

まず、自己紹介をお一人ずつさせていただけたらと思うのですが、所属と学校の名前と神戸との縁みたいなものがあったら、あるいは神戸市出身ですとか、おばあちゃんから住んでいましたみたいな話とか、あるいは遠くから来られている方だったら神戸のイメージはこんなんですみたいなお話でもありがたいです。

しょっぱななんで私からさせていただくと、多分「ど」がつくほどの神戸市民を自称しております。母親が神戸の中央区に住んでいて、母親の実家は元町で旅館だったのです。お相撲の巡業の人たちが泊まりにきていたという話を聞いていました。なので、母は昭和四十何年の阪神大水害の話なんかもしたりします。震災のときは、僕は小学校5年生で神戸の東灘区というところにおりました。ただ、阪急より北でそんなに揺れなかったので、別に家が壊れたりとか家族がどうだったかということはないのですけれども、それから25年たってここにいることになるというのは全然考えていなくて、ここに座っているというのは不思議な気持ちだなと思ってちょっと面白いなと思っています。よろしくお願いいたします。

○奥村コーディネーター 関西大学社会安全学部の奥村と申します。私も実は高原さんと同じ人と防災未来センターで以前研究員を勤めていたというご縁が神戸にはありますけれども、実は神戸学院大学の学生さんに今回インタビューを受けて、今日配られている記事の中にも書かれていますのですが、私は亀岡市、亀岡は多分全国区ではないので知らない人もいると思うのですけれども、大河ドラマでもうすぐ有名になりますのでそのうち、亀岡市出身で京都なのです。当時阪神・淡路大震災が起こったときはちょうどこれくらいです。私は中学2年生でした。中学2年にもなると修学旅行のことが大変楽しみになります。もうすぐ3年生になって修学旅行だな、そういうときに地下鉄サリン事件が発生いたしましたので、実は私は子どものころは阪神・淡路大震災の記憶よりも地下鉄サリン事件で修学旅行が中止になってしまうのじゃないかというほうが印象に残っていたぐらいの子どもでした。だ

けど、人生は面白いもので恩師との出会いがきっかけで、しかもその恩師との出会いも災害のことを学びたいとか全然関係なく、面白い先生だなと思って勉強を始めて、今ここに座っているという、こういう人間でございます。自己紹介は以上です。終わらせてもらいます。

○橋本さん 神戸市立渚中学校防災ジュニアリーダーの橋本和香です。

○奥村コーディネーター 神戸出身ですか。

○橋本さん 違います。

○奥村コーディネーター 出身はどこですか。

○橋本さん 神奈川県です。

○奥村コーディネーター いつ神戸に引っ越してきたのですか。

○橋本さん 小学3年生のときに神戸に来て、そこからいろいろ防災のこととかはHAT神戸に来たのでいろいろ学ばせていただきました。

○奥村コーディネーター ちなみに年齢は。

○橋本さん 13歳。

○奥村コーディネーター 阪神・淡路大震災が起こったときは、生まれる何年も前だね。お父さんとお母さんは何歳ぐらいなのかな。阪神・淡路大震災が起こったとき、今から25年前はお父さん、お母さんは25歳引いたら何歳ぐらい。

○橋本さん 20歳ぐらい。

○奥村コーディネーター お父さんお母さんが20歳ぐらいのときに起こった災害ということですね。まだきっと出会われていなかったころでしょうね。じゃあ次、いきましょうか。

○小沼さん 同じく神戸市立渚中学校の防災ジュニアリーダーとして活動しています小沼楓夏です。HAT神戸で生まれ育ちました。

○高原コーディネーター お父さんもお母さんもずっとHAT神戸におられてという。

○小沼さん お母さんは神戸市の灘区のほうに住んでいたのですけれども、お父さんは静岡のほうの出身で震災は経験していません。

○高原コーディネーター お母さんは経験されていてということですね。ありがとうございます。先生、お願いします。

○西田先生 失礼します。神戸市立渚中学校の教員をしております西田哲男といたします。よろしくお願い致します。今は渚中学校におりますけれども、まず神戸に来たのは、私は大阪出身大阪市内なのですから、大学は東京だったのですけれども、学生時代に奥さんと知り合いましてそのまま結婚することになりまして、奥さんが神戸出身

だったので大阪は嫌やと言われましたので、神戸を受験して運よく通りましたので神戸の教員になっております。私も若かったころがあるのですけれども、若かったときに震災を経験しました。教師として経験しました。そのときにちょうど生徒指導というのを一番メインでやっていたので、生徒の安否とか、それから今日話に出てくるかなと思う避難所を開設させていただきました。実際にもうパニックの中で経験していますので、ちょっとその辺はお話できるかなと思います。その後、一つ前は太田中学校という学校もそうなのですが、鷹取駅の横で燃えたような学校です。今回、HAT神戸の渚中学校は防災を一番取り組んでいる学校ということで、彼女らもそうですけれども防災ジュニアリーダーという、他の神戸市の中学校にはないと思うのですけれども、防災を勉強するようなボランティア活動を中心にやっているような取り組みを今しています。よろしくお願いします。

○奥村コーディネーター すみません。ちなみに震災が起こった年というのは、先生は何年目の先生だったのですか。

○西田先生 年がわかってしまいますね。何歳でしたかね。三十何歳ぐらいだったと思いますけれども。

○奥村コーディネーター じゃあもう。

○西田先生 2校目の勤務になります。長田区にあります西代中学校というところで経験しました。両校とも長田区だったのですけれども、私自身も長田区というところに住んでいまして、朝起きたときは本当にもう怪物が来て暴れたのんじゃないかというような、信号機はぶら下がっていますし、粉っぽいし、ビルは倒れているし、その中で学校に行った覚えがあります。

○奥村コーディネーター ちなみに今後の話に関係するかわからないのですけれども、教科は何を教えておられますか。

○西田先生 社会科です。

○奥村コーディネーター 社会の先生ですね。ありがとうございます。

○西田先生 だから授業の中でも教えています。歴史の中で。

○奥村コーディネーター ありがとうございます。すみません、きょうは私が話を止める側、時間をコントロールする側なのですけれども、いきなり暴走していますけれども、今日は時間がたっぷりありまして当初の予定だと55分だったのですけれども少し時間に余裕がありますので、高原さんに怒られない限りいろいろ気になったことをどんどん聞いていきたいと思います。

○西田先生 子どもにたくさん聞いてください。

○奥村コーディネーター 子どもに聞いていきます。ありがとうございます。

○西田先生 たくさんしゃべってすみません。失礼します。

○高原コーディネーター 彦根東高校の皆さんにお願いしたいと思います。

○小峠さん 滋賀県立彦根東高校の2年生の小峠実咲です。先ほど前で発表させていただきました。神戸はこの災害メモリアルアクションKOBに初めて参加するときに。

○奥村コーディネーター この取り組みに参加するのがきっかけで初めて神戸の街に足を踏み入れたと。

○小峠さん はい、そうです。

○奥村コーディネーター 今回は3回目ぐらいかな。

○小峠さん 中間発表がテストとかぶって行けなかったので2回目です。

○奥村コーディネーター 神戸2回目の学生さん。ありがとうございます。ちなみに彦根東の自分の家からここまで電車でどれぐらいかかる。

○小峠さん 家から学校までは大体30分ぐらい。

○奥村コーディネーター ここまでは。

○小峠さん ここまで家から2時間ぐらい。

○奥村コーディネーター きょうは早起きしたのだろうね。ありがとう。

○高原コーディネーター もう一方お願いいたします。

○宮下さん 同じく彦根東高校2年の宮下晶です。神戸に来たのは今日が初めてで、何というか来たことがない県なので少しドキドキしながら来させていただきました。よろしくお願いします。

○高原コーディネーター 第一印象は。

○宮下さん 第一印象ですか。私が住んでいる彦根の街が彦根城の町並みの関係で低い建物が多いので、高い建物が多いなという印象を受けました。

○奥村コーディネーター ありがとうございます。家族とか親戚とかで神戸というのは、これまで全然縁がなかった。

○宮下さん そうですね。神戸に親戚はいなくて、ただ阪神・淡路大震災のことは少し滋賀も揺れたということでお母さんから少し聞いていました。

○奥村コーディネーター やっぱり高校生、中学生にとってもそうなのだけれども、僕は当時中学生だったのですけれども同じ関西でも県をまたぐともう北海道も神戸も変わらないよね。すごく遠い感じがするよね。初めて来たと言ってくれたけれども、高校生、中学生で県をまたいで、彦根に行ったことある。

○橋本さん あります。

○奥村コーディネーター 彦根はあった。期待どおり進まないのがパネルディスカッションなのです。行ったことがありますか。

○小沼さん ないです。

○奥村コーディネーター ありがとう。やっぱり同じ関西でも遠いよね。神戸、兵庫県があって大阪があって京都があってもうすぐそこ、何ならJRだとすぐだもんね。2時間と言ったけれども、そんなに乗り換えなくても行けるところなのだけれども、そんな神戸から今日は新聞部、たくさん学びたいという熱い思いをさっき発表でしてくれていたの、いい話ができたらいいなと思っていますが、引き続きよろしくをお願いします。

○宮下さん よろしくをお願いします。

○高原コーディネーター 今まで聞いていて自分が彦根に行ったときに、あなたにとって彦根はどんなんですかといきなり言われても困るだろうなと思って、何か神戸はどうですかと無理やり聞いてすみませんという気持ちですけれども、お付き合いのしたいと思います。顧問の藤村先生、お願いします。

○藤村顧問 よろしくをお願いします。滋賀県立彦根東高等学校の新聞部で顧問をしております藤村と申します。私の大学は神戸の大学でした。大学を卒業後7年後に阪神・淡路大震災が発災しまして、知り合いが神戸にいたものですから何か助けになる物と思って、物を持って一週間後ぐらいに入らせていただいて、自分の見知った街が結構被害を受けているのを見てショックを受けたというのを今でもありありと思い浮かべることができます。長田のほうに家庭教師に行っていましたし、いろいろとご縁のある神戸の街の姿にやはり大きな衝撃でありました。今、本校は東日本大震災の特集をずっと続けておりますが、ちょっと力が入ってしまったりするのは、その記憶があるからかもしれません。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○高原コーディネーター ちなみに、藤村先生は何で新聞部の顧問をされているのですか。

○藤村顧問 私も高校時代新聞部だったからです。

○高原コーディネーター 今も編集長。

○藤村顧問 私は広告担当でございます。

○奥村コーディネーター 私は教科を聞くのが趣味ではないのですけれども、ちなみに何の科目を教えていらっしゃるのですか。

○藤村顧問 理科で生物を教えております。

○奥村コーディネーター 生物ですか。ありがとうございます。

○高原コーディネーター 一応一周したのですが。

○奥村コーディネーター 油断されているかもしれませんが、あちらのお二人にも聞いておきましょうか。きっと年齢を聞くのはちょっと難しいので、震災が起こったときにどれぐらいの年ごろだったかぐらいで。

○TAGAYASU鈴木さん 完全に油断していました。楽しく絵を描いていました。私は中学生のときでした。なので、教室に神戸から転入してくる子が何人かいたのですけれども、でも一回も学校に来なくてそのときは来ない理由を考えたこともなかったなと今、皆さんのお話を聞きながら思い出していました。でも、今なら何か感じるものが違うなというふうに感じて、何ていうか学校に来どころじゃなかったのだろうなと、そういったことも今ふと思い出して違う気づきがあるなと思ってお話を聞いていました。年齢は言いません。

○奥村コーディネーター ちなみに、神戸とのご縁みたいなものはどんな感じでしょうか。

○TAGAYASU鈴木さん 神戸は、今回明石高専に私が5年前にちょっとお世話になっている時期に実は神戸に最初に住んで、そこから明石に通ったのですけれども、多分初めに神戸の名前を聞いたのが中学校のときなので、すぐ震災のイメージが強くなっていたのかもと感じました。

○奥村コーディネーター ありがとうございます。知的で余りたくさん私のようにぺらぺらしゃべらなさそうな多田さんにも振ってみますか。いいですか。

○多田さん 見た目と言動のギャップが激しいと言われる多田なのですけれども。

○奥村コーディネーター よくしゃべりそうな感じでしたね。

○多田さん 滋賀県立大学3年の多田です。今、滋賀県立大学という彦根にある大学に通っているのですけれども、実は大阪出身なのです。大阪出身で滋賀県立大学に行く前は明石高専に通っていたのです。なので、明石とも関わりがあって神戸もよく行っていたので。実は今日出てくるあらゆる地名と関係があるのです。ゆかりがあるのです。神戸との関わりは高専1年生のときに今日も参加されている太田先生という方の防災リテラシーという授業が明石高専はずっと開催されていて、僕も受講していたのです。そこから本格的に防災に関わり始めて防災士という資格を取って、高専1年生の年から今日おられる、NPOのさくらネットさんのボランティアにずっと参加して、そのころから人と防災未来センターで防災活動をしていて、神戸という人防と関わり始めて今年で7年目に突入したという状態で、その後も明石高専なので今日発表してもらったD-PRO135°のOBでもあります。今日は後輩の発表を見ながら、初代のふざけていた感じからすごく真面目にみんな頑張ってくれているなと感動しているのですけれども、そんな感じです。

○奥村コーディネーター ありがとうございます。ギャップに物すごく驚きました。黙って描いているのが苦痛じゃないかと思うぐらいにたくさんお話いただきました。あり

がとうございます。

○**高原コーディネーター** こんなところに先輩がいたとはね、全然気づかず。ありがとうございます。一応、自己紹介を一周していただいたということで、きょう僕がここでやりたいなと思っていたことを少しだけ説明させていただきたいと思います。別にそんな複雑なことではなくて、一つはゆっくり考えるということなのです。皆さん、中学校、高校でいろんな活動をされてきて、しかもこういう場所で発表しようということになって、結構もしかしらばたばたと進んできたところがあるかもしれない、なので一旦立ちどまって私たちは何をしてきたのかなということをゆっくり考えてみて、ゆっくりこうだったかなと言葉が戻ってくるのをちょっと待ちながら話し合ってみたいなと思います。

二つ目は、一緒に考えるということです。せっかくいろんなチームの人とか地域の方とかいろんな世代の方、いろんな学校の方が来られているので、私のときはこんなことを考えていた。うちの学校はこうだった。でもうちの学校はこうだったなと。ここは同じだなとか違うなということをいろいろみんなでつなぎ合わせながら考えたら面白いかなと思います。というわけではないのですけれども、早速なのですけれども、渚中学校は地域の方と一緒に避難所開設の訓練をされたということで、そこのプロジェクトと一緒に参加してくださっていた地域の方、この会場にお越しいただいているので、少しそのときの見ていた風景であるとか感想であるとか、あるいはメンバーの学生さんたちに何かかける言葉なりあったらお願いしたいと思います。ちょっと手を上げていただいてよろしいですか。

○**富岡さん** 私は富岡と申します。いわゆるこのHAT地域と言うのですけれども、そこに18年住んでおります。渚中学校との関わり合いは幾つかありますけれども、昨年になります12月1日に避難所開設訓練が渚中学校を舞台にしてやらせていただきました。主体はもちろん中学生、渚中学校の生徒たちが主体になって、そしてもちろん学校、教師の方々、そして神戸市はどこにもあるのですけれども、ふれあいのまちづくり協議会というのがございまして、これは各小学校を単位にできているわけですね。それが地域防災の窓口になっている、そういう地域の防災の組織的なものと、それ以外に一般の方も加わるということで避難所開設を試みようという話が二、三年前からありました。今回は特に兵庫県立大学の馬場美智子先生を中心に、やってみるかということで、とにかく考えるよりも何よりも実行してみようということで始まったのが12月1日の避難所開設訓練でありました。準備はほとんどなかった。なかったけれども、もちろんマニュアル

もつくっていない。それでやってみようということでやったのが12月1日の避難所開設でした。何をしていたかわからない。これは子どもたち中学生も戸惑う話でありました。われわれ地域もそうでした。そして、また学校も教師もほとんど私はびっくりしたというか傍観者的な感じが強かったのじゃないかというふうに思っています。

一番初めに中学生が発表してくれた非常にまとまったお話で、なるほどというふうに思った方がほとんどではないかと思いますけれども、実は混乱と戸惑いと何をしたらのだらうという疑問を大きく抱いておられるのじゃないかと私は思っています。全くきれいごとではない。何をしていたかわからないと、うろろする。もちろん地域の間もそう。それから教師もそう。私はそういうふうに当日は感じました。ということは、訓練というのは何だったか。そういう戸惑いがあると。何をしていたかわからないということを経験したというふうに思っております。

その中でも中学生に非常に感心したのは、これは若さの一つの大切なことですが非常に柔軟性がある。私たちは地域で偉そうなことを言って防災訓練したりしていますけれども、子どもたちが何も準備をしていない、その中で言われることをしてくれるのだけれども、順応していく。これはすばらしいということを私は感じました。

それから教師、学校のことにつきましては、先ほど西田先生が現職で25年前避難所開設をしたという非常に貴重な経験をもっておられるわけですが、ほかの教師は全くないと言ってもいいほど未経験の先生方なので。その中で本当に避難所開設を真剣に考えて頭の中でも準備されておったかどうか、私は非常に疑問に思います。しかし、子どもたちが戸惑いながらもやった。そういう姿勢を見て教師たちも非常に勉強になったのではないかとこのように思っています。

それから地域の間、この地域はHAT地区というのは、まだできて20年足らずなのです。新しくできた街なのです。いわゆるHAT地区というのは、少し六甲山寄りのところに入っていますけれども、ほとんどもとと工場のところで全く一軒家は少ないのです。中高層のいわゆる住宅、マンションとか市営住宅、県営住宅、公団の中高層の住宅だけなのです。住民は20年足らず。そこへ被災してきた復興住宅と分譲住宅が混在している。そういう非常に地域性が昔からある地域とは違うという中での訓練。

それともう一つは、行政区が同じ神戸市ですが、灘区と中央区に分かれている。そういう非常に地域性がほかの街とは違う中で、それでもとりあえずやってみようというふうに決断していただいた。これは先ほど言いました馬場先生とそれから渚中学校の校長先生でした。そし

て、取り決めをしてみんなにあまりマニュアル的なものは渡さない。自分たちで戸惑うことを経験させようという意図のもとにやられたと聞いています。それが非常によかったというふうには私は思っています。だから、きれいにまとめてこういうことができた、こういうことが疑問だというふうなことには、まだきちんと整理できていない。実際は戸惑いの中に自分が置かれたというのが実情でないかと思っています。

私は結論的に言いますと、勇気をもってどの地域でも避難所開設の訓練をしてほしい。私もそんな偉そうなことを言えませんが、ほとんど準備もなしにどうしたらいいのだらうという程度のもので参加して、非常に強烈な印象を受けました。考えないといけないことが多過ぎる。それがわかったということが非常によかったなと思っています。中学生がここまでやるかというそのパワーを感じた避難所開設の訓練だったと思っています。私からはその程度です。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。一つだけ聞いてよろしいですか。わからなかったのに、いきなり何もなしでやろうとなったのですか。中学校の先生方がそういうふうに仕組まれたということですか。

○**富岡さん** 準備はもっとやったらそれにこしたことはないと思いますけれども、地域の人間、それから子どもたち、学校という全然違う人たちがそこで密接にかかわって、じゃあやりましょうかというところまでは熟していないわけですね。しかし、これを熟すまで待つと何年も後になっちゃうということで、とりあえず個人的でも知っている関係者が集まってやりましょうと。とにかくやろうじゃないかということから始まったので、きちんと準備をしてできた、できないというようなことではなくて、とにかくやろうという気持ちだけがあったということですね。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。結構アドリブというのを最初から仕込んでいた感じ。

○**奥村コーディネーター** そうですね。まず一歩踏み出すことが大事だというふう考えたというのが、今回の行事につながったということなのですかね。ありがとうございます。

○**高原コーディネーター** というふうな実はそういう魂胆だったということなのですけども、実際にされてみて少し何か感想を、やる前はこう思っていたけど、やってみたらこうだったとか。

○**奥村コーディネーター** すごく褒めてもらえていたよ。柔軟性があって中学生やるなと驚いたと、初めて地域の方の言葉を聞いたんじゃない。初めて聞いた。どう思われているかと思っていた。きっと次会ったら褒めてもらえると思っていた。

○**橋本さん** いや、それは。

○**奥村コーディネーター** それは思わなかった。やった後どんなふうに地域の人は思っていた、どう思っているかな。もう大変やったからな、とりあえず終わった、終わったというそういう気持ちだったのかな。そんな感じ。

○**橋本さん** うん。

○**奥村コーディネーター** ありがとう。きっと何か準備していたこと、言おうと思っていたことあるんだよね。それを聞かせてくれる。

○**橋本さん** もともと私たち防災ジュニアリーダーが中学生として、災害時に何ができるのかというのを見つけるために、まず避難所を開設して私たちが地域の支えになるとういうことで始めたということです。それで、避難所を開設する前というのは中学生がまだ子どもだからちょっと力が足りないとかすごく不安なところがあったんですけども、やっていく中で失敗とかもあったけどそれぞれができる限り動こうという、そういう気持ちがあっただけで、すごくいい時間を送れたと思います。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。何かありますか。

○**小沼さん** 12月1日に実施された避難所開設訓練を終えて、私たちがこれから生かしていきたいと思った提案があるので紹介したいと思います。

私たちは今回、情報班と避難所開設班と物資調達班と避難者誘導班の4つに分かれて避難所を開設しましたが、誰がどの係かわからず伝達がうまくいかないことがたくさんありました。そこで、避難所を開設する際は各係でゼッケンなどを着ることを提案したいです。例えば、受付係は緑、本部・総務スタッフはピンク、誘導係は黄色、物資はオレンジといった色の分け方をすることで、避難者の方たちにも物資はオレンジのゼッケンの人にももらってくださいなどと説明が楽になると思いました。避難所がスムーズに回るためにもスタッフは何かしら目立つ目印をつけておく必要があるのかなと思いました。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。

○**奥村コーディネーター** 結構しっかりしていますね。

○**高原コーディネーター** なかなかたくさんぎゅっと、さっき富岡さんがおっしゃっていた戸惑いというのがいつもあんまりよくない言葉で使われることが多いような気がするのですが、むしろポジティブに使っておられる面があって、その戸惑いというのを下に積み重ねながらぎゅっとまとめられた、こうしたらいいかなというところなのかなとちょっと思いました。ありがとうございます。先生にお聞きしていいですかね。先生から見て今回の避難所開設訓練はいかがでしたか。

○**西田先生** 先ほど富岡さんのほうからありましたように、本当に大人のほうが戸惑っていました。連絡がなかなか徹底されないというか、実際に横のつながりというか連絡が取れない。それから、一応入って来られるいろんな方を想定して、そういう方も来られたのですけれども、次から次へと避難されるわけですね。その把握を一体どこがするのかとか、当然その後物資もいろいろ入ってくるでしょうし、そういうことが結局いろんな場面ではばらばらになっているというか、一生懸命にやっているのだけれどもなかなかお互いに情報共有が難しいというのをすごく感じているというのが、そういうのも結局個々に対応していかないといけないということは間違いない。阪神・淡路のときもそうなのですが寒い中で来られている人を待たすわけにもいきませんし、とりあえずベストではないけれどもベターな方向へどんどん臨機応変に動いていく。そのためにこの訓練は非常に有効だったのではないかなと。これ1回ではないけどまたいろんなことを反省したところをまた意識を持ってやっていくことがすごく大事なんじゃないかなと思いました。

○**奥村コーディネーター** 25年前は実は30代で先生として避難所を実際に運営されているのですよね。受付をされたり。

○**西田先生** そうですね、はい。

○**奥村コーディネーター** そのときももちろん災害、当時そんなに防災ということが熱心に行われていたということもなかったんで、まさに準備もなくそういう事態だったと思うのですけれども、そのときと比べられて今回どんな感じだったという、その辺の印象はいかがですか。

○**西田先生** 今言われたとおり、すごく係分けがされていたのでそれぞれの仕事については徹底、徹底という自分たちの仕事の頭が整理できているのでよかったのではないかなと思います。例えば避難所はどこに開設するのかとか、私になったときは実は自分も被災しましたので、教師のほうはいろんな地域から来ていますので学校に行ける人間は限られているわけですね。実際に学校の鍵をあけたのは、地域の人がこじあけて学校に入っているのですね。そのためにいろんな教室に入られてというか、言い方は悪いですがけれども。

○**奥村コーディネーター** 鍵を壊して入っていくという。

○**西田先生** 鍵を壊して入っているのですね。電車が止まりますので、教師のほうは来る人はやっぱりバイクで来た人ですね。道もほとんど家が潰れていましたので、結局車も動けないわけですね。道路は陥没していますし、結局バイクとか自転車であつた人が一番に来たという、来たら開けられていたという、その状況で残念ながら教室や

いろんなところに被災者が入ったので、学校の復帰が非常に遅れたということも反省の中にあるのですけれども、全くわからないままそんな感じで進みました。

○**奥村コーディネーター** ありがとうございます。まず一步を踏み出すのだという、そういう思いで十分に準備もできなかったかもしれないけれども、一步踏み出されることが実際にできたということだと思うのです。校長先生がもしかして中心でその判断自体はあったのかもしれませんが、西田先生は今回これをやるとなったときに御自身、これはどういうモチベーションで取り組まれていたのですか。ご自分の経験、そういう過去のものとは照らしてちょっとお話をお願いします。

○**西田先生** 絶対やるべきだと思いました。

○**奥村コーディネーター** それはなぜですか。

○**西田先生** 今、話したとおりいろんな動きがあつて後でいろんな整理をしたのですけれども、情報のことであるとか、それから一番困ったのは水であるとか、それからトイレですよ。トイレが完全に潰れていましたのでトイレをどこでさせるのかという、つまり生活の基本的なことをどう確保するのかというところからスタートしました。校長先生ともお話したのですけれども、実は防災ジュニアというのをつくったのは私なんですけれども、名前は6年前にできたんですけど、5年目に地域の方とちょっとずつですけれども、いろんなことに参加するような形に変わってきたのです。その中で話し合うよりも具体的に動いて何かをしようと、僕は幾つか言ったのですけれども、例えば仮設トイレのつくり方はわかりますかと。先ほど言われましたけれども教師はできません。私はできますけれども。そういうところも若干経験している者としていない者とのモチベーションが違うというところもあるし、これは仕方ないことだと思いますね。仕方ないからだめじゃなくて、やはり私たちも責任がありますし、ずっと一緒にそういう機会をつくって参加の機会をつくって声をかけていく。何でもそうじゃないですか。経験がなかったら理屈や頭で本を読んだって写真を見たってわかりますけれども、その場面にならないとわからないことは何ぼでもあると思うのですけれども、一緒にやりながら考えていくという、だから経験がないからできないのではなくて、やはり対処できるように頑張っていくと、それは何でかと言ったら命をしっかりと守っていくという基本があればできるのじゃないかなと思います。

○**奥村コーディネーター** ありがとうございます。やっぱり自分で経験されているだけあって、これをやるぞとなったときのモチベーションというのは非常に強い決意というか意思を感じたのですけれども、学生さんは中学1年生

だもんね。震災も経験していないし、先生からこういうことをやるよと言われたときにどう思った。避難所の開設訓練をやります、皆さん、12月1日にやりますと言われたときに、どんな感じ。授業がなくなるという感じ。どんなふうに思った。

○橋本さん やったことがないので、すごく不安でした。

○奥村コーディネーター 不安だったんだ。どんなことになるのだろうと、ちゃんとできるのかみたいなそんな感じ。

○橋本さん 何も知らない、避難所のこととか実践するまでは余り知らなかったのですごく不安でした。

○奥村コーディネーター できたらやめたかった。

○橋本さん いや。

○奥村コーディネーター それではなかったんだ。不安だけれどやってみようとは思った。

○橋本さん はい。

○奥村コーディネーター そこはしっかりした返事が返ってきました。何でやってみようと思ったの。不安だけれどやってみよう。

○橋本さん 災害のときに自分たちがまず動かないといけないのじゃないかなと思ったからです。

○奥村コーディネーター しっかりしていますね。

○高原コーディネーター すばらしい。

○奥村コーディネーター すばらしい答えだと思いますが、どうですか。

○小沼さん 12月1日の前にHUGをこの人と防災未来センターでやったのですけれども、避難所を見たこともないし体験したこともないので、最初するとなったときはどうということかも想像もできなかったの、本当に私たちだけでできるのかなと思っていたのですけれども、ゲームとかHUGとか先生とかの話を通して、できるかわからないけどとりあえずやってみようという気持ちはありました。

○奥村コーディネーター 先生とか富岡さんからあったと思うのですけれども、すごく柔軟に落ちついてやっているように写ったと大人の皆さんは言っているけれども、結構実は焦った、不安だったりした。

○小沼さん もうずっとばたばたしていました。

○奥村コーディネーター そうなんだ。そうだね、初めてだもんね。

○小沼さん 25人ぐらい来たのですけれども、それだけでもう。

○奥村コーディネーター 25人、避難者役の人がばーと来たの。

○小沼さん 来たのですけれども。

○奥村コーディネーター どう思った。

○小沼さん ちょっと待ってくれと。

○奥村コーディネーター 帰ってくださいと、多過ぎですと。そうだね、びっくりするよね。大人が急に25人来たらね。正直なところは、やっぱり不安とか戸惑いとか大人の人と一緒に実は中にあったのかもしれないね。だけど、震災を経験してはいないけれども、こういうことはやらないといけないという思いは生徒さんにもあったのだなというのはどうでしょう。私の子供と同年ぐらいなので、そういう思いは一体どこから湧き上がってくるもののかなと思ってしまうんですけどね。でもちょっとそろそろ。

○高原コーディネーター

時間もあるので。

○奥村コーディネーター 記者の目でじっとこっちを見ている高校生たちもいるので、そっちのほうの話にまた先に進ませてもらって、今の話また戻ってくるかもしれないので話を聞いていてください。

次、彦根東高校のチーム3人さんと関係者というか実行委員長。

○高原コーディネーター 京都のほうからお越しの牧さんという方から。

○牧企画委員長 インタビューを引き受けまして、きょうのご報告を聞いて三つすごいなと思ったのですけれども、福島の話なのですけれども7年たってようやく話せることもあるのだということについて非常に感銘を受けて、多分この神戸で25年ですけれども、まだしゃべれない方はたくさんおられると思うんです。そういうことに7年で気がつきたのだというようなことに非常に感銘を受けて、私もこういうこと長いことやっていますけれども、時間がたたないとしゃべれない人もいるのだということの気づきというのは本当にすばらしいなというふうに一つ思いました。

それから二つ目なのですけれども、今日も来ていただいて、何で25年もこんなことをやっているのだということをお聞きしたのですけれども、実はあんまりうまく答えられていなくて記事に書いていただきたみたいで責任感と言ったんですけれども、これは一つお伺いしたいんですが私の言葉を聞いていただいて、それから中間報告に来ていただいて、それから今日はいろんなチームの発表を聞いていただいて、パネルディスカッションも聞いていただいて、こういうことを25年も続けていることの意味というのは何か記者としての言葉にできたものがあたら教えていただきたいなと。

それから最後は、この特集号のアンケートをされていて私は2番だったのでよかったと思ったのですが、1番は身近なやはり彦根の災害の話だったので、自分

たちがインタビューを3人の方にされて伝えなかったことが伝わったと、本当に滋賀のあの話を私は伝えたくてあの紙面をつくったのか、それとも他のことを伝えようと思ったんだけど、別のところが要するに滋賀の地震の話がみたいな伝えなかったところと伝わったことというのが一緒だったのかなということを、お二人に感想も含めてですが聞いてみたいというふうに今日の報告を聞かせていただいていたと思います。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。いきなり済みません。台本のないところから飛んできましたけれども、ありがとうございます。ゆっくり体験など思い返しながら何かあったらお願いしてよろしいでしょうか。

○**奥村コーディネーター** 二つ質問があったので、一人一つずつちょっと答えてもらおうかな。まず、やったことが本当に伝わったと思いますかと新聞記事をこうやってつくったりして、伝えるという取り組みをされているけれども、実際伝わった感覚みたいな、そういうところですよ、牧先生。

○**牧企画委員長** はい。

○**奥村コーディネーター** どうですかね、どちらか。もう一人の人、ちょっと話を聞いている間にもう一個の質問、25年もやっている、何をやっているんだと思っているのか、こういうことをやることにどういう意味があるというふうに今回参加してみて気づいたとか、何かそのあたり正直なところ、もう一人はちょっとスタンバイしている間考えてください。

じゃあ一つ目、伝わった実感ありますか。

○**小峠さん** 伝わったかどうかアンケートを実施したときに、新聞は文字だらけで余り読まれないと思っていたので、寄せられた声も紹介したのですが、そこで新聞の内容からやっぱり大切だなと思ったということを書いてくれた生徒の方が多かったの、それぞれ読み取ってくれたことがあるんだなとは思いました。

○**高原コーディネーター** これはうまいこといったみたいなものはありますか。書いて発行して伝わった。

○**宮下さん** いいですか。私は一応、編集長なので編集のことはちょっとだけ話をさせていただきたいのですが、今回滋賀のことと福島のことと、あと神戸のことを取り上げたというので、ちょうど滋賀の記事のおかげでみんな、自分たちの身に迫っていることなのだということがわかって、福島のことについては、確かに私たちは未災地だったので、一応生きている間に起こった事件として小さいころの記憶ではあるのですが、テレビとかでいろんな情報を見たので、こういうことになっていたのかとか、今はこうなんだということがわかり、さら

に神戸はもう25年もずっと続けられているので、何というか伝統じみたところとか貫禄、何ていうか説得力があるという発言されたことや聞いたことに説得力があるという点で、その三つがうまく調和してどの記事がとかではなく、三つあるからこそ説得力があり身近に感じられ、さらに自分たちの記憶を思い起こすということができたかなと思っております。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。二つ目の質問の25年もやっているのはだこれなんで、というのは何かありますか。

○**宮下さん** そうですね。私たちが続けているうちでちょっとこうなのかなと思っているところも含むのですけど、どんどん続けている間に先ほどおっしゃったように、新しく取材した人が過去に言ったこととはまた違う発見とかを伝えてくれたりだとか、同じ場所に行く、福島に毎年行っているのですけども、数年前に行って同じところにもう一回行くとしたときに、すぐく街の様子が変化していたりとかがあるんですね。そういう続けていくことによって新しく伝えられることというのにもたくさんあると思うので、それが続けられている意味の一つで、もう一つ思ったのはさっき伝統と言ってしまったのですが、長く続けていることで長く続いている分だけどれくらい大切なのかというのが伝わりやすいという点で、これは私のちょっと実体験が入るのですけど、ずっと続けているね、新聞部は。と言って友達から話しかけられた。、続けているということ、もちろん内容も大事ですし、内容は私たちも大事にしていることなのですけども、続けているという事実で関心をもってくれる人とかがいるという点で続けるということには大きな意味があるのかなと思っています。

○**高原コーディネーター** ありがとう。ちょっと変なまとめ方だったら違うよと言ってください。聞いていてすごいそうなんかと思ったのですが、でも何か最初にわかりやすいこういう理由があります、だから続けられますというわけではもしかしたらちょっとないかもしれないけど、何かよくわからないもやもやがあって、続けているのだけれども続けていたらやっぱり福島に何回も行って、これは違うなとか、こんな新しい話も出てくるみたいな話があって、続けていく理由そのものがあるというよりか、続けていること自体が続いている理由になっているみたいな。すみません、わけわかんないですか。

○**宮下さん** 理由としてはもちろん忘れられないためとかそういう理由はたくさんあるのですけども、続けていているからというのも一つの理由というか、それが、私たちが本来震災を忘れないためとか、思い出させるためとか、そういう理由が説得力を増して、関心をもってもらう

ための一つの手段ではないですけども、そういう形になっているのかなと思っております。

○**高原コーディネーター** 藤村先生にもお願いしてよろしいでしょうか。

○**藤村顧問** 福島の取材を始めたのは、きっかけとしては焦燥感みたいな、私たちに何ができるのだろうかということで、これから続けていつ何がつかれるのだろうかということは、スタート当初は基本的に考えていませんでした。とにかく伝えたい、とにかくみんなに知ってもらいたいというか、滋賀県でも知らせなければいけないのだという気持ちでスタートして、走りながら考えていったというような感じかと思います。その中でも今彼女が言ったように、そこで部員たちがいろんなものを得られたというのは、これはやっぱり大きなというふうに今聞かせてもらって改めて思いました。

○**奥村コーディネーター** すみません。福島の実態を伝えていかなければならないと強い焦りを覚えたということだと思うんですけども、先生の場合は阪神・淡路大震災も御経験されていて、そのときはそういう感情にはなかったのですか。

○**藤村顧問** そうですね。阪神・淡路のときは私個人の焦りとして何かできることはと思ってボランティアに入るとかいうことはしたのですが、それを何か形に残るものに、つまり新聞みたいなものにするようなことはその場もなかったですし、それはできていませんでした。

○**奥村コーディネーター** 神戸のあのときには芽生えなかった思いが、2011年に起こったのもう今から何年もたちますけれども、そのときには伝えることの大切さというかそういう気持ちが芽生えるという、また違った反応の仕方があったというか感じ方、同じ災害ですけどもね。何かそういうふうになったのだということをお話いただいたと思うんですけども、今学生さんたちも同じ人に同じことを聞いても歳月やタイミングが違ふとまた違った答えが返ってくるということがあるから伝え続けるとか、こういう取り組みは長くやっていくことに意味があると、同じ人に2回聞くことに意味がなければ一通り聞いたら終わってしまうはずなのだけれども、この終わりが無いというのはそこにあるのかなという、横にいる先生自身も過去の自分とは違う反応が今回東日本大震災のときにはあったのだというふうにお聞きしていて感じたのですけれども、やっぱり福島を伝えなければならないなと思ったときに、阪神のことも何かしら脳裏によぎったりすることがあったのではないかと想像したのですけれども、いかがですか。阪神のときの経験というものも何か影響しています。そういう気持ちになったときというのは、

○**藤村顧問** 阪神は発災直後に入らせてもらったので、その状況がありありと私の記憶の中にはあって、福島に入らせていただいたときはある程度形になっていたりして、そういう状況ではなかったのですが、皆さん大変な思いをしておられる、きつこういう状況だったのだろうなということはより想像がつかましたので、その原動力にはなったというふうに思います。

○**奥村コーディネーター** ありがとうございます。あの阪神・淡路大震災をご経験されているからこそ、福島は距離的には離れているけれどもそこで何が起きているのかが想像しやすいとかイメージできる、だからこそ伝えなければならないという思いが芽生えてきている。25年前のそういう経験、ややこしいですね。ちょっと新聞をやると思ったタイミングは今ではなくて2011年なので、ちょっとややこしいのですけれども、そのとき阪神の経験が今のこの活動の原動力になっているというか影響を大きく与えているのだなということですかね。ありがとうございます。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。ちょっと聞いていて少し個人的な興味になってしまうかもしれないんですけども、編集長と小峠さんに伺いたい。小峠記者にも伺いたいことが、人から聞いた話を言葉にして文字にして書き文字にして、ほかの人に読めるものの形にするのはすごく難しいと決めつけたらだめですけども、すごく大変な作業なんじゃないかなと思っていて、僕自身ハゲでちょっと似たようなことをしていたのです。西宮の復興住宅に20年以上住んでいた阪神・淡路大震災で家を失ったおっちゃんとか、アル中になっちゃった人とか、おばあちゃんとかに話を聞いて、そうやったのですかと話を聞いて録音するまではできるのです。録音して文字起こしまではできるのです。文字起こして、これはどうしたらいいと。全然わからなくて、何かすごいんですねと物語形式にしても何か伝わるわけでもないし、かと言って細切れにしてここでこの人はこう考えていると分析するのも何か違う気がして。そこら辺というところちょっと雑になっちゃうのですけれども、どんな工夫とか心がけていることとか、発見とか面白いなと思っていることとか、大変なことがあったら何か教えていただければと思います。

○**小峠さん** 私の場合なのですけれども、取材した方の取材した内容で私の中で一番印象に残ったことを伝えたいこととして記事の中に書くようにして、それを決めてから話の流れがわかりやすいようにまとめたりするようにはしているのですけれど、やっぱり私はもともと文章を書くのも苦手というのもあって、難しいこともあるのですけれども、そういうことは心がけるようにはしています。

○**宮下さん** まず記事を書いて紙面を完成させるのですけ

れども、そのときに校正会を何回も行うのですね。一つの記事につき三、四回ぐらいは全員で目を通して、ここを直したほうがいいのか、このコメントは本人が言いたいことと違うのではないかとか、すごく議論を交わすのですけれども、そういったことは議論が白熱し過ぎてすごい言い合いになったりもするのですけれども、それを経て完成したものは議論の苦労とかもありますし、相手がどういことを言いたかったのかとくみ取るのは難しいことでもあるのですけれども、そういう過程を経てできたものは自分たちなりにベストな状態かなと思いますし、読んでいる方や取材させていただいた相手の方にも、これが言いたかったのだ、きちんと伝わったとか、そういうことがあったのかとかそういうお互いに納得できたりとか逆にそれで新しい発見があったりとか、そういうような紙面を目指しています。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。それは議論しているときは、私はこの人が大事だと思っているのはこうだと思っているけれども、私は違う、こう見るというふういろんな角度からどんどん掘っていくみたいな感じなのですか。

○**宮下さん** そうですね。ここはこういう表現にしたほうがこの人の言いたいことが伝わるのではないかとか、このコメントよりもこっちのコメントのほうが主張をしっかりとしているから、そっちをメインにして記事を構成したほうがいいのではないかとか、細かいことから大きなことまでさまざまな意見が出るので、それをうまく最終的にまとめてつくっています。

○**高原コーディネーター** もう一個だけいいですか。小峠記者が最初、印象があるところをぐっとつかまえるみたいなニュアンスだったかと思うのですけれども、それはどうやってあらわれてくるのですか。読んでいて、ここだ、みたいな感じ。

○**小峠さん** 取材させていただいたときに、その方が話しているときに話し方とか表情とかで大きく強く言っていることとかがあるので、そこを見つつやっています。

○**宮下さん** すみません。ちょっと挟むのですけれども、そういうふうな表現されて取材させていただいたときに、そういうふうな表現とか表情とかでコメントされるとこちらも、これが言いたいことなのだとか、他のコメントと比べて心をつかまれるというか、実際にしゃべっているときと紙面に表れるときでは、話し手の表情とかが見えないのでどういうふうなイメージなのかなというのが伝わりにくいとは思っているのですけれども、そこで私たちがそこで判断して、ここが言いたいのかとか伝わってくるものもあるので、そこを選んで実際言いたかったことを記事に起こせるようにという工夫をしています。

○**奥村コーディネーター** ありがとうございます。実はそろそろ時間がきておりまして、まだまだちょっと続けていきたいのですが、今回もう間もなく阪神・淡路大震災から25年ということで、震災の経験を伝えたり教訓を伝えたりするだけじゃなくて、今日生かしていかなければならない、伝えるだけじゃなくて生かしていかなければならないと言ってくれていたと思うのですけれども、過去の経験だとか教訓だとか、あるいはそういうことを経験した人から話を聞くときの答えとか、これは常に変化していくものだとか、こういうふうな話があった中でやはりこれ今終わってしまったならば、もしかしたら正しくない教訓の生かし方をしているということも起こりかねないのだなと私は思ったのです。だから、何が学ばべきポイントなのかということ、あるいは本当にちゃんと伝わっているのかとか、生かせているのかとか、そういうことについてはもう25年もたっているけれども、これからもしっかりと自問自答を繰り返しながら続けていかなければならないと感じて、きょう中学生のお二人と高校生のお二人という若い世代にも参加していただきましたけれども、震災を経験していないこういう生徒さんたちもしっかりとこういう取り組みをやっているという、今日十分に話を聞けなかったのも、どういうことでそういう強い気持ちになっているのかというのは十分にお聞きすることはできなかったのですけれども、そういう方々がこれから生まれてくる限りはこういう活動を続けていける。何より実行委員長がこういう場を守っていかなければならないというふうな強い意思をおっしゃっていましたので、やっぱり続くのだろうなと思うのです。

実はきょう当初高原さんとは、もう一テーマ用意していたのです。ちょっとお待ちください。どういうパネルディスカッションにするかということをお話し合っていたときに高原さんがおもしろいことを言ってくれて、過去になりきっていない過去、未来になりきらない未来みたいな詩人のような言葉を私に言ったのです。何ですか、それはと。過去になりきらない過去、過去は過去じゃないのですか。いや、過去は過去になりきっていないのですよと言ったのです。そう言ったのですよ。私はメモしているのです。未来になりきらない未来に向かって、過去になりきっていない過去をどういうふうに行っていくのか、それはいろんな世代の人がこうやってこういう場を通じてつくられていくものだ。みたいなことをおっしゃっていて、その辺に関しても実はきょうディスカッションしたかったのですけれども、結構実は出てきたのですよね、そういう話が結果的に。こんなところで一気に振ってまとめていただきたいのですけれども、高原さん、こういうことを言った責任者

として今回のパネルディスカッションの最後を締めてもらえないかと思うのですけれどもいかがですか。どうですかね、過去になりきっていない過去、未来になりきらない未来という言葉をおっしゃった高原さん、きょうのディスカッションはどういう成果があったでしょうか。

○**高原コーディネーター** いきなり登壇して、と言われた渚中学校1年生の皆さんの気持ちが今ちょっとわかりました。僕はぶっちゃけ、継承とか語り継ぎみたいな言葉が余り好きじゃなくて、教科書的な、と言ったら失礼なのですが、それでも、何かをしなければならぬみたいなのが、ちょっと苦手な感じだったのですけれども、皆さんの話を聞いていて、ころっと何かが変わっていった、一つは固まっているものじゃなくて何かぎゅっと固まっちゃったらそれは本に残しておけばよくて、それを読んだらおしまいなのですけれども、例えば渚中学校の西田先生のいきなり鍵を開けられたとか、そのときになってみないとわからないとか、あるいは直接その場で接しないとわからないとか、私たちがふっと出てくる戸惑いとか、はっとつかまえたものは意外といろんな形で新聞とか一緒に地域の方と訓練するみたいな感じでふっと伝わることもあるのかなみたいなところが。まとめというよりは私の学びです。

○**奥村コーディネーター** ありがとうございます。皆さん、きょう高原さん最初にきょうはゆっくり考えてみたいと、一緒に考えてみたいということでおっしゃっていただいたのですけれども、それぞれの中できょうの1時間余りですか、お話につき合っていたいて、何を持ち帰るかというのもそれぞれの形であっていいのだと思うのですけれども、ざっと今日もう一回、この後振り返っていただく上で非常に参考になるものが目の前にこうやってでき上がっていますので、ぜひ今日この後、この会が終わった後にもごらんいただけたらいいかなと思います。

ちなみにもう時間なのですけれども、鈴木さん、きょう振り返っていただいてこれをつくっていただいて気づいたこととか、何かコメントしておきたいことがあれば何か一言いただけますか。

○**TAGAYASU鈴木さん** ありがとうございます。1分ぐらい大丈夫ですか。きょう描かせていただいて、ちょっと聞こえてきたのは最後ふとしたとき、はっとしたときというキーワードをくださったのですけれども、一番初めが何か形にならない見えない戸惑いとか、そういったものを感じられたのはまず何か一歩踏み出してみる、やるぞ、みたいな熟成するのを待っていたらいつになるかわからないといったところで、ぬるっと始められた。そこから気づきがたくさん得られてきて、しかもそれを続けていくときに何か皆さん原動力をもっておられて、続いて

いくうちに新しい発見とかどうやったら納得感があるかみたいな話につながっていったなというのと、最後すみません、印象的だったのでここだけ、話しておられることを文字にするとまた伝わり方が違うというところで何を編集するのかとか、どう納得感があるように伝えるようにするのかというところで、多分未災者だからこそその未災者に伝える編集の仕方というところの根底に流れているところ、何回も言葉をかえてすごい皆さんが言ってくださっていたように私には聞こえたので、すぐく見えないものを一生懸命言葉にしてくださっているなと思って聞いていました。本当にいい時間をありがとうございました。

○**高原コーディネーター** ありがとうございます。ゆっくり考えたかったですけれども、あと3時間ぐらい要るかなと思ったのでよければ来年またお付き合いください。よろしくお願いします。

○**奥村コーディネーター** じゃあ終わりますか。高原さん、終わりますか。

○**高原コーディネーター** はい、終わります。

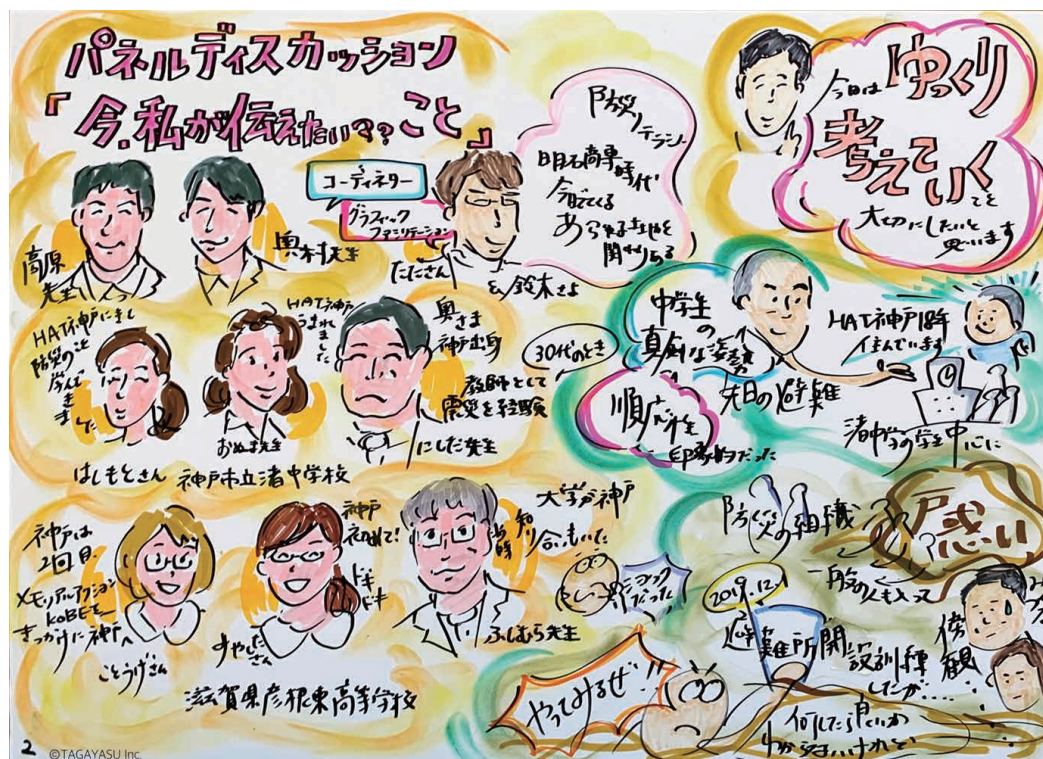
○**奥村コーディネーター** 通常であればパネルディスカッションは最後また一言ずつとかやるのですけれども、ちょっと段取りが悪くてすみません。時間がもうすでに超過しておりますので、会場の皆さんも最後までお付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。きょうご登壇いただいた6名の皆さんと会場からコメントをいただきました方々、それからお聞きいただいた皆さん、最後拍手で終わりたいと思いますが、よろしいですか。お願いします。(拍手)

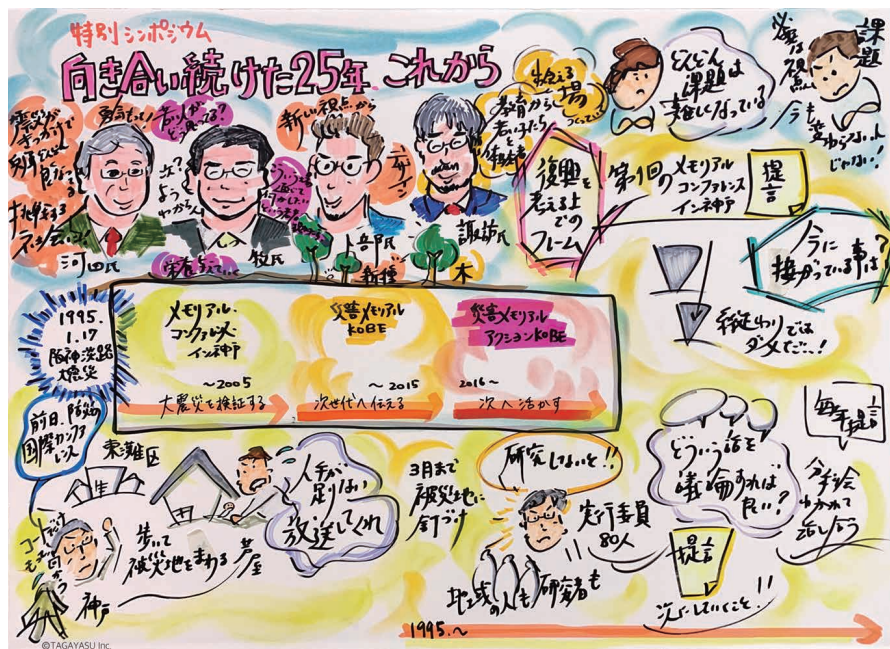
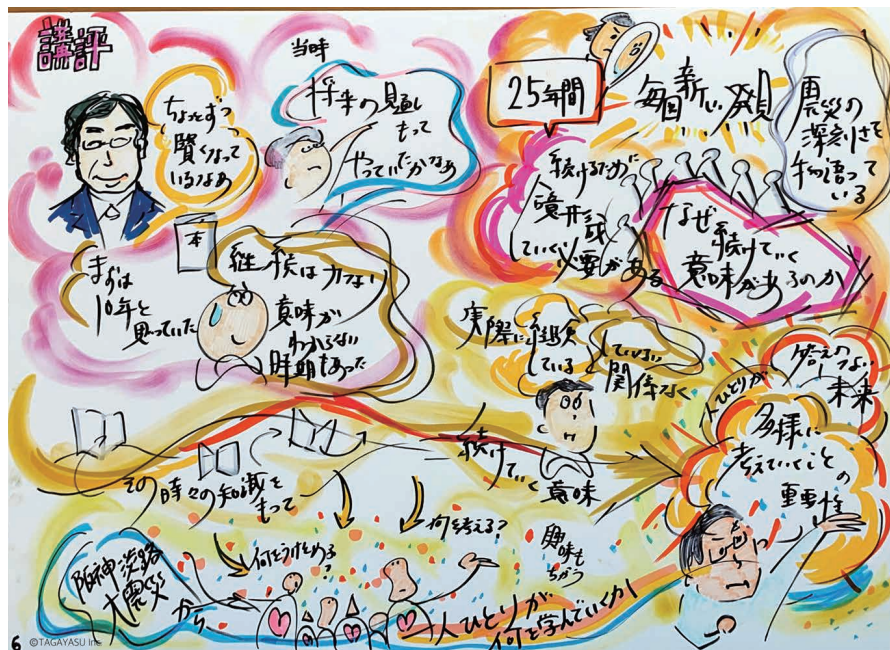
○**司会 人と防災未来センターリサーチフェロー 辻岡さん**

ありがとうございます。では、これでセッションのほうは終了となりますので、登壇者の皆さんは席にお戻りください。ありがとうございました。



グラフィック ファシリテーション記録





閉会のあいさつ

○人と防災未来センター 河田センター長

ありがとうございます。皆さん、今日のご苦勞さまでした。今年の正月、じっといろいろ考えていたのですが、少しずつ賢くなっているなという思いがしたのです。というのは、阪神・淡路大震災から25年たったのですが、いまだに自分が知らないことがたくさん起こった災害だったと思うのです。私は研究者ですから、目の前で街が壊れていくという、これを目の当たりに見て、こういう活動を始めたのですが、将来の見通しをもっていたかという、それは全然ありませんでした。人と防災未来センターができて18年なのですが、当初センター長というも自分の頭の中では2年ぐらいでバトンタッチしようという、そういうイメージでずっと来ているのです。思いますに、よく本を読まなければいけないと言われるじゃないですか。これは私なりに、つぎのように考えていました。自分の人生は一回しかないけれども、本を読むと書き手の人生がまた自分のものになるというか、そういうことをやれば本を読まないといけないと思っていたのです。この震災が起こって、起こった直後から被災地に毎日入っている方と話をし、また自分がそのときまで見られなかったことも新しく見るということを経験してきたのですが、継続は力なりというか、そういうものの意味がよくわからなかった時代がずっと続いていたのです。ですから、このメモリアル・コンファレンス・イン神戸から始めて、始めた当時は実は10年は続けようと考えていたのですね。ですから、GK京都のト部さんに10年間、毎年色を変えたパンフレットやポスターを出そうというそんな具体的なことも考えていたのですが、まさかその先にもっと続いていくモチベーションというのが、そのときなくてもその時々いろいろな知識をわかるにつれて大きくなっていくというか、そういうことを経験したということなのです。



河田恵昭センター長

きょう先ほどのパネルディスカッションを聞いていまして、まさに被災者であってもそれをどう伝えていただくかという、その機会があれば実際に経験する、しないは関係なく、そこから生まれるいろいろなものは後に伝えていけることができるのではないかと、今年実は25周年ですからこういうことをいつまでやっているのだということもきちっと答えを出さないとだめな時期に来ていると思うのです。ですから、こういう活動を続けるためには、やっぱりいろんな方に合意を得ないとなかなか進むことができません。合意形成のためにこれまで25年やってきたことを将来にわたって、なぜ続けていく必要があるのかということを説得する、そういうものをまとめる時期に多分来ているだろうと思うのです。ですから、それがないと25周年で多分公的な取り組みというのは終わってしまうのではないかと、この1月17日に秋篠宮皇嗣殿下、同紀子妃殿下様をお迎えするのですが、5年、10年という節目にこういう公式行事がこれからもやっていけるかということも、それにかかってきているんじゃないかと思うのです。全くここに立つ人も話題提供する人も阪神・淡路大震災のことを経験していないという、そういう時代になったときにこの震災が一体何を私たちに伝えてくれたのかということを一人ひとりが考えて、そこに答えはなくても違ったものがそれぞれの人の数だけ生まれておれば、それでいいのではないかという気がしました。

前回からこういう絵を描いていただいているのですが、絵を見ると実は今のパネルディスカッション、その前の報告の位置づけというか、これがかなりうまくいくということに私、実は気がつきました。防災というのは、本当に一人ひとりがどういうふうなそれを捉えるかが全部違うということなのです。ですから、違うという非常に難しい問題について多様にいろいろ考えるということの重要性というか、そういうものがこの25年間の活動で出てきたのではないかと、そういう気がします。ですから、これからどうするかは今まとめたものではないのですが、こういう非常にプロダクティブなミーティングというのはこれからも続けなければいけないのではないかと考えています。

今日を皮切りに、今月末に向かって阪神・淡路大震災に関するいろいろな行事が実は計画されております。それぞれに参加していただいて、また皆さんが持っているこの震災に対する思いを新たにさせていただき、今まで気がついたことだけでなく、これから実は気がつかなかったことに気づくという機会がこういうことを計画した中で出てくるのだということを考えていただいて、ぜひ自分の問題として阪神・淡路大震災を受けとめるとするか、そういう形につながっていただければいいと思います。まとめにはなっておりませんが、25年間もこういうことをやってきまして、また今日午後いろいろなこととお話をさせていただきますけれども、新たな気づきというものがあるということは震災が持っている深刻さというか、そういうものが通り一遍では払しょくできないと考えてもいいわけで、やはりいろんな形で継続する必要があるのだと思います。

以上でございます。

災害メモリアルアクションK0BE2020のことば



災害メモリアルアクションK0BE

ACTION 2020 のことば

避難所開設訓練は準備はほとんどなかった。

とにかくやろうじゃないかというところから始まった。中学生も、地域も、教師も戸惑った。

何をしたいかわからないという中でウロウロする。**本番ではそういう戸惑いがある、**

何をしたいかわからないということを学んだと思っている。

訓練は不安ではあったけど、

やってみたくと思った。

**災害時にはまず自分たちが
やらなきゃいけない
と思ったから。**

**神戸は 25 年もずっと続けられているので、
伝統じみたところというか、
発言されたことや聞いたことに説得力がある。**

続けていくことによって

伝えられることもあると思う。

**長く続いているということがその大切さを
伝えやすくするという面もあると思う。**

未来になりきらない未来に向かって、

過去になりきっていない過去をどう扱っていくのか、

**それはいろんな世代の人々がこういう場を
通じてつくられるものではないか**

防災は一人ひとりがどういうふうに関わるかが全部違う。
その違うという非常に難しい問題に対して、

**多様に考えることの重要性が25年間の活動で
わかってきたのではないか。**

教訓が伝わっていないという苛立ちが
ある一方で、そういうもんやと理解する
というのが大事な気がして、同じことが
ずっと起こり続けるけど、じゃあそれを
減らすためにどうしたらいいのか考えると、
**同じことを言い続けないと
いけないんだ、**

**これはそういうモデルなんだと
理解するようになった。**

災害メモリアル K0BEの10年は大人が体験した震災と
子供が体験した震災をぶつけ合ってお互いに理解し合おうとする
場だった。聞いている方が戸惑ったり悩んだり、
どう受け止めたらいいか考える、それがどこかで人の心に残って、
防災ががんばらなあかんと思うような、

原動力になるような語りができたと思う。

災害を経験しなくても賢くなるには、

被災するということが

どんなに悲しいことかを体験することが大事。

**だから、被災地に行ってもらいたい、
ボランティアでなくてもいいから。**

**阪神・淡路大震災は常に
ファーストランナーなんです。**

その後、新潟があり、東日本がありますが、
どうしても10年20年30年という

経験を繋いでいくという中では

ファーストランナーで、ファーストランナーとして
**次に活かすための新しい仕組みを
どんどん作っていききたい。**

第2部：阪神・淡路大震災25年 特別シンポジウム オープニングコンサート



特別シンポジウム 「向き合い続けた25年、これから」

【コーディネーター】

●NHKアナウンサー 大山 武人さん

【グラフィックファシリテーション】

●TAGAYASU 鈴木 さよさん

●滋賀県立大学 環境科学部 1年 多田 裕亮さん

【登壇者】

●人と防災未来センター長 河田 恵昭さん

●防災学習アドバイザー 諏訪 清二さん

●京都大学防災研究所(人と防災未来センター) 牧 紀男さん

●NPO法人防災デザイン研究会(株式会社GK京都) ト部 兼慎さん

○司会 人と防災未来センターリサーチフェロー 辻岡さん

引き続きまして第2部、特別シンポジウムといたしまして「向き合い続けた25年、これから」。

これは「震災からの25年」と、そして「これから」をテーマにしておりますが、4人の先生から、震災から今日までを振り返るお話をいただきます。

では、ここからは、NHK大阪放送局の大山武人さんに司会をバトンタッチいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○大山コーディネーター ではこれから、特別シンポジウム「向き合い続けた25年、これから」を始めさせていただきます。

私は、このファシリテーターを務めます、NHKアナウンサーの大山と申します。今、大阪放送局でアナウンサーをしていますが、2013年度と2014年度、私が大阪放送局に勤務しているときに、人と防災未来センターの研究部で特別研究調査員という形で世話になっておりました。今回こうしたシンポジウムを担当させていただくことになりまして本当にありがとうございます。

このシンポジウムの趣旨なのですが、阪神・淡路大震災を経験した世代が、教訓と提言をまとめた「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」という取り組み、これが2025年まで行われました。その教訓を次世代に伝えるための「災害メモリアルKOBÉ」というのが2015年まで。さらに次の10年を見据えて若い世代が取り組む「災害メモリアルアクションKOBÉ」、これが2016年度から行われています。この3つの活動について振り返りまして、活動の意義や思い、そしてこれからについて、それぞれの活動を牽引してきたお三方として、急遽、ちょっと事情がありまして、もう1人の方に急遽登壇していただいておりますけども、4人の皆さんに語り合ってください。

そして、グラフィックファシリテーションは、TAGAYASUの鈴木さよさん。そして滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科3年の多田さん、お二方、

引き続きよろしくお願いします。

では、パネリストをご紹介します。では一言ずつ、25年の実感をちょっと短くお話いただきまして、自己紹介がわりにしたいと思います。

まず壇上向かって一番左です。人と防災未来センター長の河田恵昭先生です。よろしくお願いします。この25年、いかがでしょうか。

○人と防災未来センター 河田センター長

この震災がきっかけで、この震災をどう考えるかという研究が始まって25年たってしまったのです。私、実は人と防災未来センター長ですから、しばしば当地に



来ておりますので、25年間ずっとつながっているという意識がありますね。ですから過去のことというよりも、ずっと続いてきていることだという思いがあります。

○大山コーディネーター ではよろしくお願いします。

そして、その壇上向かって右です。京都大学防災研究所教授、人と防災未来センター震災資料研究主幹の牧紀男先生です。

○京都大学防災研究所 牧先生

牧です。よろしくお願いします。

○大山コーディネーター

25年、いかがでしょうか。



○京都大学防災研究所 牧先生

そうですね。私、当時25年前は大学院の学生で神戸に、きょうも彦根の方が来たことないというふうにおっしゃっておられましたが、神戸のイメージというのはおしゃれなところでデートする、そういう場所が神戸だったのですけども、それがその震災の後、今日も朝から電車でずっと神戸に来る途中、その当時の、要するに古い建物の面影みたいなのを探していたのですが、もうあんまりないということで、この25年のその神戸の歩みというのがどういふことなのだろうというのは、まだ自分の中では整理ができてないのですが、きょう、このディスカッションの中でいろいろ考えたいなと思うのと、その阪神・淡路大震災はいつも、今日も若い方たくさんおられますけど、思うときにいつも考えるのが、私1968年生まれです。昔戦争の話というのをよくおじいさんから聞いたのです。妙にリアリティをもって語られるのですが、自分には全然しっくりこなかったというのが戦争の話でして、今日、おいでになってる方というのも、ほぼ先ほど誰かが歴史とおっしゃいましたけど、先生が阪神・淡路大震災を歴史で教えているというのは少しびっくりしたんですけども、そういうこともあるのかなと。だから25年ですから。それをいかに、その歴史ではなく、今現在進行形で考えていくのかということが一つ課題かなというふうに思っております。よろしくお願いします。

○大山コーディネーター そして壇上一番右に空席がご

ざいます。これ遅刻しているわけではございません。事情がありまして、今日ご登壇予定の防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪清二先生ですけれど、今、北海道からの移動中で、ちょうど今ごろ、空港を降りて会場に向かっている最中ということで、駆けつけ次第登壇していただきます。

そして、急遽登壇することになった、GK京都でNPOの防災デザインをされていますト部兼慎さん、よろしくお願いします。

○防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん

よろしくお願いします。ピンチヒッターで上がらせていただきましたト部です。私は神戸出身です。会社はGKデザイングループというところのデザイナーをやっていたのですが、入社3年目で阪神・淡路大震災がありまして、実家は、今も同じ場所に再建しているのですが上沢と大開の間です。家は全壊です。家族はおかげさまで誰も亡くなったり、けがしたりなかったのがよかったのですが、それがきっかけで、河田先生のほうにデザインで何か防災のお手伝いができることはないかと、河田先生の楽屋に押しかけまして「おお、そういうことやったら、おまえ手伝え」といって始まったのがメモリアル・コンファレンス・イン神戸です。



職業柄、情報をまとめて皆さんにお伝えするという仕事でデザインでもありますので、私は最初の当初から、ずっと、そこの看板があるような「アクション2020」とありますが、「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」の1年目から最初の10年、それから「メモリアルKOBE」の次の20年、毎年毎年そういうチラシとか、その会話がどうまとまったかというのをきっちりやっぱり保存していくというか、それをできるだけわかりやすく見やすく、なおかつ、できれば美しいデザインでちゃんと残していきたいという思いでずっと関わらせていただいて、今年今年で、翌年からだから24年になるのですかね。はい。よろしくお願いします。

○大山コーディネーター はい。よろしくお願いします。

では最初に、これまで25年間行われてきた取り組みについて説明をしていただきたいと思いますのですが、各登壇者によりまして、それぞれの活動のご紹介と、その時代についての振り返りというのを行っていききたいと思います。

では次のスライドにいけますでしょうか。

まず河田先生に伺いますけれども「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」というのは、どのような取り組みで、どのように始まったのかというのをちょっとご説明いただけますでしょうか。

○人と防災未来センター 河田センター長 実は、阪神・淡路大震災が起こるちょうど1年前にアメリカのロサンゼルス近くのノースリッジで地震があったのです。近代都市で震災が起こったという一番の事例だったものですから、研究者はアメリカに行き共同で調査したんです。ですから、そのとき初めて都市の災害を研究している人た

ちが集まって、アメリカで起こった都市震災をどういうふうに考えていくのかということをはじめていたわけです。ですから、この1月17日の前の日に、実は大阪で日米都市地震防災のシンポジウムを17日からやるという、16日はそういう日だったのです。

○大山コーディネーター 何というタイミングだったのでしょうか。

○人と防災未来センター 河田センター長 ええ。夜8時ごろ、一応アメリカ側と会合が終わって、じゃあシーユーアゲイン、明日会おうねって言って別れたのです。その翌日の朝、5時46分に地震が起こったわけです。ですから、まさかそんな、テーマにしている地震が日本で起こるなんていうのは誰も思っていなかったということなのです。シンポジウムをやることになっていましたから、会場の上六の国際ホールに行ったら、もうアメリカの研究者はタクシーで現場に入っただけ。日本側だけではシンポジウムはできませんので。けれど、大阪府知事と大阪市長が、夜のレセプションにご出席いただくことになっていたの、これだけは初日やろうという確認をして、その後どうするかといったときに、NHKの現場取材のグループが会場にお見えになって、今から現地に入るんだけど何を取材したらいいかわからないから一緒に行ってくれないかということで、私、渡りに船と、コートだけ持ってタクシーで現場に向かったんです。

最初に入ったのが東灘区の区役所です。真っ暗でした。区長室に入ったのが11時半ごろでした。全然交通渋滞もなくスッと、50分ぐらいで現場に来られたのですが、区長さんと、神戸どうなってるのですかって言ったら、いや、私にもわからないと。ですから、区役所の職員を今、自転車で市役所まで走らせていると。そこへ30歳過ぎの男の方が、おばあちゃんの遺体持って区役所にお見えになって、おばあちゃん死んだけれども、どこへこの遺体持っていったらいいのだった。そう言われても何もわからないわけですからね。とりあえず灘高校の体育館を仮の遺体安置所にする予定なので、そこへ運んでくださいっていう、そういう話だったのなんです。

その後、NHKの方と歩いてですね、被災地ずっと見て回ったんですが、もうそのときは住民が総出で、倒壊した家の瓦屋根を1枚1枚剥がして、救出しなければいけないと。私たち、テレビカメラなんか回していると、怒られるのじゃないかって心配したんですが、救援作業やっている方たちが、早く全国に報道してくれて。人手が足りなくてどうしようもないって。ですから、もうどんどん撮って放映してくれという。そういうことで、神戸から芦屋まで歩いて、いろんな光景をテレビカメラで録画したのです。夜6時ごろ、もう真っ暗ですからね。6時ごろ芦屋の国道43号のほとりに来たら、NHKの電源車がいたので。これは前日の京都女子駅伝の中継をするために全国から6台ぐらい電源車が来て、その1台が出発して芦屋の近くで地震にあって、そこで止まってた。それで全国放送できるということになって、それで国道43号の壊れた歩道橋

の上から、夜7時の総合テレビニュースで、私現場から被災地こうなっているという報道をさせていただきました。ですから、その日は午前2時ごろまで被災地をNHKの方と一緒に回って、大阪国際ホールに帰ってきたのが朝の4時ごろでした。それで私、そこの駐車場に自分の車預けてあったので一旦家に帰って、また9時に今度は八尾空港へ行って、ヘリコプターで朝日新聞社と一緒に同行取材させてほしいというので、ポートアイランドへ入りました。そうしたら、もうポートアイランドは液状化で一面海原みたいになってるのです。長靴に履きかえたのですが、島から出られないのんです。ですから、その日はずっと島の被害を見て回って、ヘリコプターで帰って、2日目は天保山から船が出ていましたので摩耶ふ頭まで船で行って、そして被災地に調査に入ったのですね。そのときには私のところの、助教授の林春男というのがおりまして、この二人でヘルメットかぶって、ずっと一緒に被災地を回っていたのです。ですから、行きは船で行くのですが帰りは電車がありませんので、何とか西宮とか御影まで行ったら、そこから部分的に阪急電車とか阪神電車が動いてましたので、それに乗ったらまあ帰れるというふうな形で3カ月間、大学に行かなかったんですよ。大学からくれたのはヘルメットとPHSという、昔の携帯電話。これ、好きなだけ使いなさいと言ってそれをいただいたということなんです。ですから、1月に起こって3月ぐらいまでは、もう被災地に釘づけになっていた。

そのときに神戸とか兵庫県が設けたいろんな委員会のメンバーに入ってくれという形で、そういうメンバーで議論をしながら、あいた時間は必ず被災地に行っているという、そういう調査をやってきたんですね。7月ごろになって、これやっぱりきちっと調査しないといかんぞと。しかも研究者だけの話じゃないのですね。ですから、この地域に住んでいる、関係する人たちが、この問題に取りかからなければいけないということで、この「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」をやろうと。大体実行委員に80人ぐらいなったのです。いろんな分野から。大学の先生だけじゃなくてマスメディアとか、個人事業主とか、いろんな方がメンバーになって。じゃあ、一度総会をやろうということになったのですが、実はそのとき、はたと気がついて、お金一銭もなかったのです。でも、2日間、この神戸国際会議場を借り切ってやろうということで、私、実は実行委員会の幹事長でしたので、要するに実質的な責任者じゃないですか。それでお金集めをしたのですよ。やり方はちょっと言いたくはないので。でもね、結局1,260万円集まった。そのお金、まだ残っているんです。ちゃんと使っていますのでね。だからそれがなかったら本当に何もできなかった。

この人と防災未来センターというのは2002年にできていますから。1996年から毎年「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」というのは、会場を借りながら点々と移動していた。ということは、会議の相談する場所もないのですよ。だからいろんなつながりで、その会議場貸しても

らって、委員会をやって、それを持ち寄るという形で計画したのです。ですから、最初はどういう問題を議論すればいいのかというワークショップをやって、報告に出てまいります、1から8つの課題が、そこで分科会として出てきたのですね。ですから、初日は各分科会に分かれてそれぞれ議論して、2日目は総合討論というので、それを持ち寄って、ああだ、こうだということで、次に備えるという意味での提言をしてきたということですよ。

○**大山コーディネーター** はい。後ほど1年目に出てきた提言も、実際ちょっと今から振り返ろうと思うのですが、また後ほど、それはご紹介したいと思います。

今、防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪清二先生が到着されました。よろしくお願いします。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

すみません。5時20分に襟裳町でバスに乗ったのはよかったのですが、新千歳で飛行機1時間遅れまして、私のせいじゃないとは言いつくすけども、ごめんなさい。本当に申しわけないです。



○**大山コーディネーター** 幸いですが、余り進んでいませんので、時効でございます。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

恐らく河田先生が全部しゃべっていたと私は思うのですが、すけども。

○**大山コーディネーター** 諏訪先生、25年たちましたけれども、この実感を伺っています。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

いやあ、25年の実感よりも、私今年還暦なので、そっちの実感のほうが強いのですが。まあしかし、ほんとね、25年たって、東日本もあって、僕の今持っている一番の実感は、若い子が向き合ってくれているということなのです。東日本のほうが阪神よりも小さいときにしゃべり出した子が多いと思うのですが、阪神のこの地で、まだ10代の子らが、あるいは20歳前後の若者たちが東日本の人とつながったりしながら、あるいは熊本とつながったりしながら、阪神を、自分は体験していないのだけど先輩から聞いた話をもって、きちんと話し合おう、伝えようとしている。そういうのが育ってきているの。それを育ててきたのは、やっぱり阪神の地で、この地で頑張っていることをやってきた大人たち、まあ還暦よりももっと上、あるいは還暦前後、もうちょっと若い人たちの努力が、これ自画自賛って変ですけども、やっぱりあったのだろうと。それをちょっとこの25年で感じています。若い子の力を感じています。

○**大山コーディネーター** ちょうど今、河田先生から「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」についての御紹介がありましたけれども、諏訪先生からこの「災害メモリアル KOBE」について、ちょっと御紹介いただきたいのですが。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

次に10年ということで、テーマはよく次世代という言

葉を使っていたのですね。次の世代に何を伝えようか。ただここで一つ誤解しないように言っておくと、災害をあの体験した大人が第一世代で、それを子どもという次世代に伝えるという枠組みではなくて、私たちがやったのは、例えば震災のときの先生とその子ども、児童。あるいは震災のときのお医者さんとその子どもで、お父ちゃんの背中見ていた人たち。あるいは震災のときの消防士で、そしてその背中を見ていた娘みたいに、親子、先輩後輩、先生子どもみたいな枠組みの中で、大人がどう震災と向き合っていたかを子どもに伝える。子供は自分の親が、先生が、どう震災と向き合っていたかというのを、そこから話を聞く。もっと大きいのは、親が、いや実は子どももすごい意味を持って震災と向き合っていたのだということに気がついていく。そういう親子、先輩後輩のやりとりを通して、例えば震災後に生まれた人たちが、「ああそうか。震災ってそんな意味があったのだ」ということを感じていく。つまり第一世代の親と第一世代の子のやりとりを通して、震災を知らない次世代に伝えていこう。そんな枠組みでやってきました。

○**人と防災未来センター 河田センター長** それから実は、この実行委員会という組織も10年で一応全部リタイアして、執行部を新しくかえたのです。ですから今、矢守先生にその後10年間お願いしたのです。10年たったらまた総入れかえで、今度は牧先生にお願いしていると。ですから、対象だけじゃなくて、やる側も世代を10年ごとにかえてきたということなのです。

○**大山コーディネーター** そのバトンを引き継いだ牧先生が手がけていらっしゃるのが「災害メモリアルアクションKOBÉ」ということですね。改めてちょっと御説明していただければでしょうか。

○**京都大学防災研究所 牧先生** はい。それで先ほど、次世代へ伝えるということで、今度はアクションという言葉で足したのです。アクションという言葉で足したのはなぜかという、やはり阪神・淡路大震災の後、ほんとにもう地震災害が連発すると。そういったことの後には南海トラフ地震がくるという、そういうことなので、その伝えるだけではなくて、それを実際のその防災の活動に生かしていくというのが、次の私が取り組んだ課題です。もう一つあるのは、先ほども東日本大震災の経験をされた福島の方が歌を歌われましたけど、阪神・淡路大震災、常にファーストランナーなのです。その後新潟があり、東日本があるのですが、どうしたって私たちが10年、20年、30年という経験をつないでいくという中ではファーストランナーですので、そのファーストランナーとして次へ生かすための新しい仕組みをどんどんつくっていききたいなというふうに思っていて、その矢守先生と諏訪先生がされた取り組みというのは、実はまだ今でもできる取り組み。だから、お父さんとそれからその娘さんとが話し合いながら次に伝えていくというのはできる仕組みですので、一歩先をとということで、これ10年から30年活動しますけど、実は目指しているのは30年以降に、この阪神・淡

路大震災の教訓なり経験というのをどういうふうに生かしていくのかということを考えていきたいなというのが今やっている新しいチャレンジで、そのチャレンジというのは当然、新潟それから東日本の方々の参考になるだろうし、そこからまたさらに新しいものが生まれてくるんじゃないかというふうに思っております。

○**大山コーディネーター** 牧先生、5年ですよね、「メモリアルアクションKOBÉ」が半分ぐらいきていますけども、今のところ、手応えというのはいかがでしょうか。

○**京都大学防災研究所 牧先生** 実はこれ、いつもうまくいかないのです。初めは。です。ので、諏訪先生のところも初めの2年ぐらい、グチャグチャするのですね。ところが私たちの「災害メモリアルアクション」1回目、物すごくよかったのです。それが実は大きな問題で、「あっ、このままいけるやん」と思ってグダグダしていたら、やっぱりその何を狙っているのかというのが実はよくわからなくなって、この隣にいるト部さんにえらい突っつかれてね。何したいのかがわからんと。ほんまに何をやるのかしっかり考えるということをして2年目、3年目ぐらいですね。1年目、2年目は惰性で走っていたのですが、ということでもできたのが、多分お手元の資料に入っている、この資料なのですが、やっぱりどの会もそうだと思うのです。メモリアルもコンファレンスも、5年後以降ぐらいはマンネリ化する。それから諏訪先生のやつも3年目ぐらいからマンネリ化するとかパターンができるということで、私どもの始めたやつも、今年4回目ですか。25年ですから。ようやくフレームができてきたのかなということで、これからどういうふうになっていくのかなということですが、きょう午前中の部門でいろんなお話をさせていただいて「あっ、いけるやろう」というのが今の感覚です。

○**大山コーディネーター** ト部さんは、感じられた違和感というのと、あときょうの発表を聞かれての感想も伺いたいと思います。

○**防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん**

こういったものをずっとつくり続けているという立場なので、まず何をやっていいかわからないというのが一番書けない。何を伝えたいのっていうのを。だから一番困るのです。ここにビジュアルついていたらよかったと思うのですが、最初の「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」のモチーフはジグソーパズルなのです。神戸の町の9つのピース。これ、河田先生がおっしゃった分科会の数なのです。その最後の1個をはめ込んで神戸をもとに戻そうというのがコンセプトだった。これ憲章というのをデザインしたのです。次は語り合いだったので、覚えてらっしゃる方もいると思うのですが、人と人が話をしているというのがモチーフなわけ。今回矢印でしょう。そう意味でやっぱり次を見てということなのですね。その中で、もうちょっと明確にしていきたいというのが最初あるのだけど、やっぱり最初始めたときはわからないから。最初のやつはわかりやすかったですよ。そういう分科会をして神戸を憲章するのだというビジョンがしっかりしていた

ので。次も誰に伝えるの。だからどんどん課題が難しくなっていると思うのですよ。それがこの矢印にも表れているのだけど、明確に言えることは、やっぱり牧先生もおっしゃったように、南海トラフというものと、首都直下地震というような大きな課題があるので、やっぱりそこに向かって進むみたいなの、そういうデザインコンセプトかなと思って、これを今使っているというのが、私がいえることかなと思います。

○**大山コーディネーター** はい。ここで時計の針を25年前に戻そうと思います。

「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」ですけれども、第1回の提言を一覧にしました。後ろをごらんください。ちょっと見にくいですが、広域防災体制の確立や地震規模の予測とインフラの設計法の見直し。産業と暮らしの早期復興のための国家による財政支援。地域に根差した協働型まちづくりシステムの確立。巨大都市災害対応におけるコーディネーション機能の強化。支援のネットワークづくり。建物の設計・施工システムの見直し。心の通う災害情報は生きた地域コミュニティをつくることからというようなことを掲げられていまして、これが1996年2月20日の提言となっていますけれども、河田先生、これちょっと振り返られて今どうでしょうか。24年前ですね。

○**人と防災未来センター 河田センター長** ですから、初日は8つの分科会で1日討論していただいたのです。その最終の結論がそれぞれ、これ出てきているということなのです。当時は災害の構造があんまりよくわからなかったもので、それぞれの専門家が自分の得意なところを解析するという形になったのですね。それで最初の広域防災体制というのは、実は阪神・淡路大震災で災害救助法が適用された兵庫県の市町村は10市10町です。20都市が実は被災したのですね。これも珍しかったのです。ですから、それを広域と言ったのですが、実は東日本大震災では241、それから昨年の台風19号では390という、市町村が災害救助法の適用になる。すなわち被害が出る。ですから、今まで市町村単位で防災体制をつくっていたのが、それじゃ間に合わないというので、この1は広域できちっとやらなきゃいけないという、そういう結論です。

2番目の地震規模の予測とインフラの設計法の見直しというのは、実はいろんなものが壊れちゃったのです。高速道路はひっくり返るし、トンネルは剥落するし。ですから、その前の年のノースリッジの地震のときも、サンタモニカフリーウェイという、アメリカで一番交通量の多い高速道路が崩れちゃったわけです。これの被害がものすごく大きかったんですね。ですから、この地震規模の予測というのを誤ると揺れが半端じゃありませんから潰れちゃう。ですから一昨年、大阪府北部地震が起こったときに、阪神高速道路もJR西日本も大きな被害出なかったじゃないですか。それはやっぱり教訓として耐震設計というのが見直されているという、そういうことなのです。ですから、インフラの設計法を二段階設計方式といって、壊れ

ても命に別状のないようにするというやり方が導入されたわけ。それまでは、壊れないようにというのが目標だったのに、壊れても被害がその人的なものにつながらないような壊れ方を考えてもいいぞと。ただし、重要な構造物については、人を殺すような壊れ方はしないような設計しなきゃいけないと。二段階設計方式ですね。これは実は東日本大震災で、L1津波とL2津波ってあるじゃないですか。L2津波はもう構造物で守れないから避難してください。だから避難できないところは高台に移転するって。こういう形で阪神・淡路大震災のその設計のコンセプトは、東日本に生かされているということですよ。

3つ目の産業と暮らし。まさにね、経済が復興しないと被災者の生活再建できないのですよ。当時は実は復旧までが災害対応のメニューで、復興がなかったのです。だけど、この震災で初めからわかったのは、被災者の生活再建は半端にできないぞって。そのためには何を最初にやらなきゃいけないかっていうのが、実はこの3番なのですね。

ですから、例えば1国2制度なんていうのは、そのときに最初から提案したのだけでも、当時、国に素気なく蹴っ飛ばされてできなかったのです。今はポートアイランドでいろいろ健康産業の制度ができていますけれども、当時はだめって。だから非常に被災地の自治体と国との関係が対立状態で動いていたということです。ですから復興基金も実は兵庫県と神戸市が9,000億円というお金を出して運営してきたのです。東日本大震災は自治体が一銭も出していないのです。僕はそれ情けないと思うのだけど、全部国費でやっている。しかももう30兆円使っているという。これはやっぱり被災地から学んでない。ですから東日本大震災復興構想会議で3人の知事に、自治体で復興基金つくれと言ったら、借金したくないって。もうそれを聞いた途端に、被災地の復興がうまくいかないって。なぜかという、自分の問題なのですよ。自分の問題だから何とかしなきゃいけないというモチベーションが低いと、依存型になってしまっていてできない。だから東日本大震災の復興が、もちろん福島の問題はありますよ。だけど自立するっていう精神が非常に薄いというのは大きな問題だろうと思っています。

そのほかにも今につながるものがいっぱいありまして、いわゆる縦割り行政を横につなげにゃいけないという。これも言うのは簡単なのですが、財政措置がどこに下りるかということによって、口だけしゃべることになってしまう。やっぱり日本のような中央集権国家では、この縦割りを、災害が起こると横につながらないと動けません。これがやっぱりネックになっている。

ですから、さっき牧先生がおっしゃったように、この地震の後、南海地震が活動期に入っていると。だからそれに備えなければいけない。そうすると、今の縦割りじゃ対応できないじゃないか。ところが、そういうことが今まで起こったことがないので、みんなね、起こるとうとうしいから、起こらないようにしているのですよ。起こらないように考

えているわけ。だから、今年東京オリンピックがあるけれども、オリンピックの最中に首都直下起こったらどうするのだと言ったら、大変だねって言うのだけれども、起こらないことにしているのですよ。もう政府がそうなのです。起こらないことにしているということは、考えなくていいでしょう。だから今テロ対策だけやっているわけ。後は起こらないことにしているのです。そういう脆弱さがわが国にはあると。そういう国が潰れるような災害を経験していないという。これがやっぱり続いているわけですね。

それから支援のネットワーク。これボランティアが140万人出ました。このボランティアをネットワーク化して、コンスタントにこれから災害に遭ったところをサポートしなければいけない。140万人来ていただいたのですけれど、その後はどうするか。これが非常に難しい問題で、当時全国的な組織というのは、福祉の関係でしか、社会福祉協議会しかなかったものですから、そこをお願いしたのです。それで、全国的にやっていただいた。でも、今となっては、災害関連死のほう遥かに多い。熊本の地震は、2016年4月16日。直接亡くなった方が50人です。災害関連死が223人出ている。ですから、そこをどう視野に入れるかということを考えると、もう社会福祉協議会の方たちには、こういう避難所の被災者をケアしていただく。医療の人たちとケアしていただくことをやっていただかないと。社会福祉協議会がボランティアのお世話をすることによって汗を流していただくのはいいのですが、一番やっていただかなければいけないところが手薄になっている。だから変えなきゃいけない。ところが日本というのはドラスティックに変えるのに勇気がないのです。日本の国が一番いけないのは、挑戦する勇気がないってことなのです。みんな小手先でちょこちょこっと変えてきている。ですから昨年の台風19号で、これだけ大きな被害が出ているのに何にも変わらずに、災害救助法の適用自治体が、東日本より149多いという形でしか動かない。こういう体質を変えなきゃいけないですね。

当然、都市地震防災は、それまでは火災が起こらなければ被害が大きくならない。これは1923年の関東大震災で10万5千人亡くなって、そのうちの90%が火災で亡くなったわけ。ですから火災さえ起こらなければ、そんなに犠牲者は出ないって思っていたのが、古い木造住宅が凶器になって、これで亡くなった方が直後に5千人です。火災で亡くなった方が500人ですから変わっちゃったわけ。ですから政府は住宅の耐震補強というのを地震防災の中軸に置いた。これは間違いじゃない。だから直接死はどんどん減っている。だけど災害関連死は増えているという状況になっている。

そして災害情報の重要性がこの震災で明らかになった。情報がなければ手も足も出ない。ですからこのときにGPSとかGISを使ったシステムをつくらなければいけない。この時代、世界で一番日本が進んでいたのです。ところが日本というのは、今のスマホもそうですけども、必要のない機能ばかり入れちゃって、もっと使いやすく安

くするという努力、やらないでしょう。だからアメリカに抜かれる、韓国に抜かれるということになっちゃってるわけ。いまだに、そういうハード依存型の開発をやっているということが、やっぱり阪神・淡路大震災のときにGIS、GPSの重要性がわかって、やらないといけないと言っているのに、ちょっとピンぼけの産業界があったということが全部それに載っているわけですよ。

○**大山コーディネーター** この1年目の提言を見て、そういうことがもういろいろと今になってわかってくるわけですね。牧先生は、どうごらんになりましたか。

○**京都大学防災研究所 牧先生** 今、若い方にとっては当たり前前のことが書いてあるのだと思う。いや、当たり前やと思うと思いますが、25年前にはこれは非常に衝撃的。

例えば、産業と暮らしなんていうことは防災・復興の中でほとんど考えていませんでしたし、協働型のまちづくり、ワークショップなんていうのは、ちょうどこのぐらいに始まったばかりですから非常に先端的で、何かそれでも悔しいのは、これ、今も問題の構造は一緒やと。多分変わったとしたら、25年前って携帯電話もインターネットもありませんからね。その話が少し、8番目ぐらいがちょっとそういうのが入ると、やはり神戸、ちょうど高齢化が始まる時代でしたから、この後3年目ぐらいですね。仮設住宅に入って高齢者の方が問題になるみたいなのがないなと思いますけど、全く変わってないというのが。ですから、その25年前に今の復興を考える上のフレームというのが初めてこういう形でできて、今も課題は同じやというふうに、非常に感銘を受けます。

○**人と防災未来センター 河田センター長** ただね、99年に台湾で集集地震が起こったでしょう。このときね、この神戸を中心にボランティアの方たちが、これはもう助けていただいたのだからというのでお返しに台湾へ行ったのですよ。台湾は賢くてですね。全部学んでいるんですよ。だから台湾ってずっと賢いのですよ。日本で成功した、あるいは問題になったところを、自分の国をよくするのに使っているって。だから今ね、実は台湾の防災体制というのは非常に立派になっているわけ。それは、日本の失敗とは言わないですけれども、こういう問題があるという指摘を自分たちのところで自分たちになりに応用してきた。これが如実に出てきているわけです。

○**大山コーディネーター** はい。今これ、参考に3年目までの提言と4年目以降、10年目までのテーマを一覧にして示しておりますけれども、これを見ますと、結構、今にも通じるあらゆるテーマが網羅されているという感じがいたしますよね。いかがですか。牧先生、ちょっとザッとご覧になって。

○**京都大学防災研究所 牧先生** いや、この25年をこれと一緒に生きてきたのですけれども、まだ解決できてない。というか、もしかすると、このごろ思うことがあって、今までの防災対策はハード対策ですので、西洋医学みたいなもので、まあ一回耐震化すれば大丈夫。メンテナンスフリー

みたいな防災対策ですけど、ここに書いてあるやつというのは、実はこれずっと続けないといけないものですから、課題として残っているというよりは、その防災対策のありようとして、今までは、要するに薬飲んだら治ると、一回すれば良いというのをやってきたのに対して、今の防災対策の課題というのは、ずっとこう続けていく必要があるようなことが課題というか、取り組みとしてあるというのが、今も同じ問題といったことにつながるのかなと思いました。

○**大山コーディネーター** 河田先生、これ10年目までを振り返りまして、皆さんどんな思いで取り組んでいらったんですか。10年目ぐらいまでは。

○**人と防災未来センター 河田センター長** だからね、例えば6回目の私の災害ボランティアってあるでしょう。もうこのときから実は心配していたのは、140万人のボランティアは、ほとんど被災地の外から来たのです。ですからわが国では災害が起こるとボランティアは被災地の外から来るって、そういう思い込みが今共通になっている。実はボランティアというのは、被災地にいて被害を受けなかった人が被災者のために動くのがボランティア。

ですから将来、南海地震が起こったときに四国なんか孤立するでしょう。行けないのですよ。どうするのだといったら、四国にいて、家も壊れず津波も来ず、何も被害なかった人が被災者のために動いていただかなかったら、全く救援が届かないということです。ですからやっぱり誤解があるところをきちっと直していかないと、このままで行くと、今、牧先生がおっしゃったように、処方箋があって、それやったら病気治ったと。こういう課題じゃないのです。

つまり時代とともに社会が変わっていくので、間尺に合わないところが出てくるということを考えると、継続してそれをチェックしていくということが大事だということが、この震災教えてくれたのですね。

○**大山コーディネーター** はい。考えてみますと、ガラッと社会も変わりましたので、当然課題も変わってくるということだと思うのですけども。

そしてですね、この10年では、2002年に人と防災未来センターがオープンしまして、舞子高校の環境防災科に1期生が入学しました。防災教育という面ではどんな変化があったのかということで、諏訪先生いかがでしょうか。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

最初8つの提言が出ています。ジッと見ていたら教育の教の字もないのですよ。それは誰が悪いのかということと教育学者が悪いんです。そういうことをきちんとした提言として出してこなかった。じゃあ教育は何もしてなかったかということ、95年10月に兵庫県の教育委員会は防災教育検討委員会から提言を出してるんです。その提言をジッと見ていたら3つなんです。防災管理を徹底すること。防災教育を徹底すること。そして心のケア・心の健康を徹底すること。何のこっちゃ、今もずっと続いていることを実はもう95年に兵庫県がやってるんです。10月に、神戸市は3月に出してるんです。そういう意味でいうと、

どうしてもね、防災を語り出すと教育の話が後になって表に出てこない。それはさっきも言いましたけど、教育学者がもっと正面から向き合って取っ組み合って、その課題を表に出さなきゃならないというところがあったと思うのですけどね。ただこれを見ても、4回目に子供たちが経験した阪神・淡路大震災を専門家が発信していただいていると。これってすごく大きなことで、次の10年、災害メモリアル神戸の10年というのは、実はこの大人が体験した阪神・淡路と、子どもが体験した阪神・淡路をばつけ合って、そしてお互いに理解し合おうとしたこと。そういうのが教育としてすごく僕は意味があったのかなと。

最初の8つの提言を見ると、やっぱりこうきちんと整理された。その整理された、僕は社会的な意味を持った語りとか提言と呼んでるんですけども、それを人々が受け取って、社会が受け取って社会を変えていくことで、絶対、社会の防災力上がるんですよ。それをちゃんと国がしてないから、今、河田先生が怒っておられると思うんです。そういった語りがある。だけど僕は子どもたちが経験した阪神・淡路みたいなね。なんかこう聞いているほうが戸惑ったり悩んだり、どう受けとめていいのかを考えたりするような語りも、やはり語りとして存在していて、メモリアル神戸の10年間は、実はそういう心が揺れ合うような語りをばつけ合った。僕個人的な意味を持った語りと言ってんだけど、それが実はどこかで人の心に残って、防災ががんばらないとあかんという原動力になってくれるのかなと。正義があればみんなやるんじゃないって、正義があっても国がやらないんですから、正義があっても人の心にひっかかるような何かを、「メモリアルKOBE」の10年は出してこれたのかなと。もし時間あったら1組ぐらい、後でまた心がホロッとする話させてもらいますけれども。

○**京都大学防災研究所 牧先生** 河田先生、実は防災教育、初めからやってたんですよ。ただしね、何をやったかという、教材の開発。ゲームとかそういうのから始まったんです。ですから学校では、今、小学校、中学校、高等学校では、答えのある今年か教えてないでしょう。防災って正解ないんですよ。ですから、そういうことに日本の教育が馴染んでなかったということは間違いのないで、一昨年から道徳が教科になったでしょう。初めてですよ。正解のない問題を先生が生徒に教えなきゃいけないって。だから現場は悩んでるはずですよ。これについての正解何だって言われたときに、実は複数あるんですよ。それも絶対じゃないっていう、こういう価値観の教育というのは、日本は経験したことがないから、やっぱり出遅れちゃったんです。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

ただそこでね、道徳も一つの価値観を押し込もうという国のあり方があって、返ってそれが悪いほうに転んでしまってるところは僕も河田先生と一緒に国に対して怒りたいというふうに思います。ほんと、きちんとやれば先生おっしゃるように、価値観が多様なことで終われる、オープンオンでの教育なんだけど、こういう価値観を教え込

みなさいに今なってしまうので、ぜひここは怒っておきたいと思います。

○**大山コーディネーター** はい。まさしく、この神戸の震災というのは答えがないことを教えてくれたということだと思んですけども、ト部さん、お願いします。

○**防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん**

僕は経験をしましたが、正直地震の地の字もね、思っていない人たちがびっくりだったと思うんですよ。河田先生とか牧先生とかという、その防災とか地震の研究をされてる方は情報あるんでしょうけど、多分役所も含めて一般人は、そんな大地震なんていうことがまず考えられてなかったのが25年前。それからやっぱり進んできたというのは、先生に教えていただいたけど、阪神・淡路がきっかけで、これからどんどん南海トラフに向かって地震がふえるぞというのを、もう明確に覚えていて、そのとおり、もう10回ぐらい大地震起こってるんですよ。大阪でも起こった。北海道も熊本、新潟、鳥取というふうに。そういうふうになっていくたびに情報というのが出てきますよね。やっぱりそれをきちっと人が見て、ああ、こういうことが起こるんやな。ハザードマップなんかも、自分のところにこういう被害がくるのだなというような情報をしっかり伝えるという文化はなかったから、それをちゃんとやるってことはとっても大事だし、それで賢くなるということでも被害が軽くなり世の中自体が大変にならないという世界がやっぱりできていくのかなと思うので、阪神・淡路大震災だけだったら、今みたいな積み上げというのはないかもしれないけど、最近の雨の降り方やその被害とかもみても、もう日本は、ここに住む以上、絶対、毎年何か起こるとというのが基本で、じゃあ自分は何ができるのかなというのを、みんながどれぐらい考えるのがめっちゃくちゃ大事と思うのですよね。そういう意味では、市民に向けては、やっぱりできるだけわかりやすく情報を伝えるということも、蓄積してきた一つのことだと思う、この25年です。そういう意味ではすごく増えたと思う。

○**大山コーディネーター** 増えたとしても、それがうまくこう前に進んでいるかどうかというのは、ちょっと毎年毎年のことを見ると、まあ不安ではありますね。もうほんとに。

○**防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん**

そう。それを諏訪先生も言いましたけど、わからないんだけど、とにかく前に進んでいるっていうのが、この僕は「メモリアル」じゃないかなと思うんです。牧さんも4年ぐらいは、もうわからないと。でもやってる。それはとてもいいことや勝手に自画自賛なんですけど。

○**大山コーディネーター** また後ほどいろいろお話が出てくると思いますが、ここ、人と防災未来センターも2002年にオープンしました。一つここも触れておきたいのですけれども、河田先生いかがでしょうか。やっぱり意義といいましょうか。

○**人と防災未来センター 河田センター長** 皆さんね、全然そういう情報をもっておられないんですけどね。今、国連がSDGsってやってるじゃない。大学なんかもSDGsを標榜し

て始めてるでしょう。実は防災が先導してるんですよ。

なぜかという、災害が起これと貧しくなるんですよ。ですから、SDGsの第一の目標は貧困をなくそうとなっているわけ。

ですから昨年の台風19号でね、ご自宅を水害でなくされた高齢のご夫妻ね。もう家を建てるなんてことできないでしょう。ということはね、貧乏になるんですよ。ですからね、この阪神・淡路大震災が投げかけたことというのは余り国際的に評価されてないんだけど、実はこの後2005年に神戸で第2回国連世界防災会議があって、兵庫行動枠組が採択されたんです。そこでこの兵庫の阪神・淡路大震災の教訓がはめ込まれてるんですよ。

ですからね、これは日本政府がいけないと思うんですけどね。何か国連が言うてるから日本もやらないかんじゃないんですよ。日本が言うたことなんですよ。だって国際防災の10年は、日本が国連に提案して動き始めて、そこで実績を上げたので、やっぱり災害が起これと貧乏になるって。開発した努力も無に帰すということで、防災の主流化とか、そういうのは実は、阪神・淡路大震災から世界に向けて発信してるんです。これが実はね、何で国連に採択されたかという、実は貧乏をなくそうと言ったら、先進国は関係ないと思うでしょう。だから経済発展とか先進国にも関係するメニューにしないと、全加盟国賛成というわけにいかないでしょう。だから国連も困っちゃって、第一番目に貧乏をなくそうと、貧困をなくそうとなってるんで、ですからこの阪神・淡路大震災が突きつけた問題というのは、世界的に共有されたと考えていただいていいと思います。

○**大山コーディネーター** はい。そこに「メモリアル・コンファレンス」が果たした10年の意義もあるということになりますね。

○**人と防災未来センター 河田センター長** ということですよ。

○**大山コーディネーター** はい。さあ続いてですね、「災害メモリアルKOBÉ」についてみていきたいと思いますけれども、この10年を受けて、どのようにこのバトンをつないで進めていかれたんでしょうか。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

いや、実は私、最初の10年出てなかったんでわからない。本来ここは矢守先生という人が来るべきなんですけれども、あの人、今日は他に仕事だとか言ってね。あの人から呼ばれたんです。初めて会議に行ったときに僕、自己紹介したんです。舞子高校の環境防災科の諏訪と申しますと。防災はほんと素人です。私は役に立ちませんが、恐らく皆さんは私の後ろに控えてる若者たちを狙ってるでしょうと言ったら、矢守さんはそうだと言いましたね。で、そこからですね、10組ほど親と子、先輩と後輩、考えたら牧さん、半分以上僕が。

○**京都大学防災研究所 牧先生** いや、全部違いますか。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

いや、全部じゃないです。1組だけ違います。まあそんなふうにして、先輩と後輩、大人と当時の子供みたいなグ

ループを連れてきて、やっぱりそこで聞いてるとね。なんかこう整理し切れない心の中のもやもやを、親が初めてしゃべって、子が初めてしゃべって、お互いに初めて理解したみたいなのがよくある。1個だけちょっと例言っているんですか。

○**大山コーディネーター** はい。どうぞお願いします。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

消防士いきましようか。神戸市の消防にいた救助の神様と言われるすごい人がいて、もうめっちゃめっちゃ怖いってみんな言ってたんですよ。その娘が小学校1年生で震災を体験して、舞子高校の環境防災科に2期生で入ってきたんですよ。何とかこの二人を引っ張り出したい。震災のときにお父ちゃんは家族を置いて家を出て行くわけですよ。消防士ですから。娘は何で家族放っていくのって言えないですよ。で、テレビはですね、長田の火災が消えない。消防力が負けてる。そんなこと言うんですけども、娘はですね、テレビに向かって、車がホース踏むからやとか、消防士は頑張ってるだとか、テレビとけんかしてた言うてましたね。その子が消防士になりたくて環境防災科に来た。でもそのとき、まだ親子で震災について語ったことがなかったと言ってました。何でと聞いたら、もし聞いてしまったら、あのカッコいいお父ちゃんが崩れるかもしれない。だから聞けなかったと言ってました。それを「メモリアルKOBÉ」でどうですかって僕が提案したら、矢守さんが食いついて、やりましよう。それでやることになったんですが、怖いお父ちゃんを説得せなあかんじゃないですか。最初娘に頼んで、ちょっとお父ちゃん落としといてくれって言って。それから娘からオーケー出たんで、わざわざ消防署まで行ってお父さんにお話して、お父さん、人前でしゃべらない人です。初めてしゃべるって言ってくれた。娘とやけどな、と照れながらうれしそうに見えましたけど。で、二人に小学校で授業してもらった。こういうシンポジウム場で親子に語ってもらったんです。お父ちゃんが言ったのは、救助の神様ですが、だけど阪神・淡路では救助に行っていないです。何でかと言うと、消防署の中で上司の命令により全体を把握する人間が必要だと。それはおまえが一番適していると。おまえを一遍外へ出したら帰ってこない。だから中におれと言われて、一回も救助に行けなかったというのを娘の前で、皆さんの前で、ぼろって涙流して語ったんですよ。林春男先生も泣いてました。娘はそんなお父ちゃん見て、お父ちゃんは崩れなかったんです。やっぱりお父ちゃん、かっこよかったなって思うんですよ。実はお父さん亡くなったんです。62ぐらいだったかな。去年64か。まだまだ退職して元気なときに心臓発作で亡くなって、僕は勝手な思い込みなんですけど、「メモリアルKOBÉ」がやった、いいことの一つは、親子が別れる前にお互いが何を思っていたかを語れる場ができたんだって。そういう思いができたというのはすごくよかったかな。そういうことが10回あったんです。親子あるいは先生と当時の子どもが語り合った。だけど、その二人のためにこの会をやったかというそうじゃなくて、そ

れを見ているほかの人たちが、自分がこの子なら、自分がこの親ならどうしようってということで、自分を置いていくんですよ。よく防災の専門家は自分事にしろとみんな怒るんですけど、具体的な方法を教えてくれないのです。ただ具体的な方法の1つに、もし自分が親なら、自分が子ならって置きかえることで、災害と向き合うことの大切さを僕は感じてくれた。その10年だったかな。ちょっと自画自賛し過ぎですかね。

○**大山コーディネーター** そういう、この「災害メモリアルKOBÉ」の期間の間に、東日本大震災が発生しましたね。やっぱりその影響というか、もたらしたこの変化とか何かありますか。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

あのときね、確か東日本のことを表に取り上げようというときに、やっぱりみんな、神戸なんだから神戸にこだわろうっていう話をしましたね。もちろんそれは、東日本大震災を見ないじゃなくて向かないじゃなくて、やっぱり東日本大震災に向けても、神戸として何が発信できるかということで、神戸にこだわり続けた。何かそんなことでしたよね。ちょっと補足をお願いします。

○**防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん**

広報には、神戸だけを描くんじゃなくて、日本地図を入れて、東日本と。当時洪水もありましたね。中越もあった。ですからテーマとしては神戸で動くんだけど、東日本のことは、やっぱり触れるということに結論になったと思う。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

中越の方にも来てもらったし、東日本の方にも来てもらったし、それからインドネシアのバンダアチエとか、いわゆるインド洋大津波に関わってきた若者たちにも来てもらって、彼らの取り組みを一生懸命話してもらった。その中に、もうちょっと大人のほうが、神戸のときはこうだったみたいなことで、お互いの話をかみ合わせていくみたいなことをしましたね。

○**京都大学防災研究所 牧先生** 思い出しました。大人が見るのではなくて、要するに環境防災学科の子たちが、ボランティアでそういうところに行ってるので、あくまでも次世代ということでしたから、その高校生が阪神・淡路大震災を経験したような、してないような高校生が、その新たな被災地に支援に行き、それでどう思ったかみたいなことを議論して。東日本とか中越とかの災害というのを、大人の私たちが見てどうだったということではなくて、その若い世代が行ってどう思ったかということで取り上げていたと思います。

○**防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん**

あと、そういったことが起こって、われわれメンバーの中でも新しいキーワードとして、要は、こういうことっていうのはイベントと言ってみたり、取り組みって紹介されることが結構あるんですけど、僕らの中では場という、場所っていうのが結構明確になったんですよ。そういったことができる場所が「メモリアル」だと。というのは、他にやっぱりないですよ。そういう仕組みも含めたこういう場をもっている

というのがあって、これは早速入れましたね。ここに。われわれは、これを場だと。はい。それはすぐ覚えてます。

○**人と防災未来センター 河田センター長** 実は、東日本大震災起こった後、私たちと同じようなグループが立ち上がるだろうと。そういう期待を持ってたんです。だからやっぱり被災者がこれやらないとうまくいきませんので。私たちがわざわざ出かけて行ってやるものじゃないって。むしろ、向こうから立ち上がるのを支援するという形で待ってたんです。それが全然立ち上がらないんですよ。それが問題なんです。だから今、東日本大震災の復興が非常に難渋しているというのは、本当にその被災地で、こういう「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」をやるというふうな、みんなが協力してね。研究者だけじゃなくて、みんなが協力して、これからの社会をつくっていくっていうね。そういう気概が全然発信されなかったというのが非常に残念なんです。そんなところにアドバイスするような、そんなミーティングじゃないですから。私たちを見てくださってという形ですから、ですから非常にこれは、ある意味は残念な結果になってるんですよ。

○**大山コーディネーター** でも先生、そこに参加した若い人たちというのは何をこう学んだり気づいたりしたもんなんでしょうね。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

何を学んだんでしょうね。あの子たちね。千差万別だと思えますよ。彼らが学んだことはこれだって、僕らが総括するんじゃないくて、一人ひとりが持ち帰って、自分なりの何かの学びにしてくれたらいい。

あのおとき「伝える」か、「伝わる」かで議論したんですよ。でもやっぱり大人が偉そうに伝えるんじゃないくて、ト部さんおっしゃるように場をつくって、そこでいろんな経験してもらって、こちらの体験も話したら、それは伝わるだろう。で、伝わったものを持ち帰って、それをどう自分のものにするかは、それはその子たち一人ひとりで違うんだと。だから今あれにかかわってくれた環境防災科の子もそうですし、他の若い子たちもそうですけども、将来医者になった子もいる、京大に雇ってもらって今研究員になってる子もいる、NPOに入ったとか、海外に出て行って青年協力隊員で頑張ってる帰ってきた子とかです。学校の先生になって、防災担当。舞子高校出身だってばらしたら、すぐ防災担当になるらしいんです。学校も短絡的だなと思うんですが、そんなふうにして専門家になった人もいるけど、専門家じゃなくて市民として、やっぱり防災と向き合い続けようっていう子です。さっき言いました、東日本の若者がすごく語ってる話と、今若い子ががんばっている話をしましたけど、京都の若者を組織して連れてきて1.17の東遊園地に朝行ったら、ほんとね、京都の子、神戸の若者、東日本の子、ようさんおるねん。同窓会みたいにして集まってる。そんな場をつくっていく流れをつくっていった子らが、実はこの「災害メモリアルKOBÉ」で登壇してくれた、子供のころの体験を語ってくれた子たち。彼らが、もう子じゃないですね。十分30超えてますから。彼ら

が中心になったと思います。

○**人と防災未来センター 河田センター長** こういう場で言うのはちょっと失礼なんですけどね。社会安全学部が10年前にできて、舞子高校からも受験生来てくれているのです。でね、入学してからむちゃくちゃ伸びるんです。入るときはね、あんまり成績よくないんだけど。これはね、やっぱり現場に学生連れて行ってるから勉強時間がどうしても少なくなるでしょう。だから入試の成績はそんなにパツとしないんだけど、入ってからですね。非常に目的意識持ってるというか、がんばるんです。やっぱりこのモチベーションというか、そういうものが、こういうミーティングで上がるというか、これはもう間違いないと思います。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん** ありがとうございます。前はね、全然勉強できないってぼろくそ怒られたんですけど、きょうは褒めていただいたんで、もう今日の話だけ覚えておきます。ありがとうございます。

○**大山コーディネーター** 今振り返りましてですね、「メモリアルKOBÉ」の意義というのは、どんなところにあるかなと思いますか。ト部さんいかがですか。

○**防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん**

はい。やっぱり情報をしっかりと積み上げていくということと、さっきから言ってるように、やっぱりこの場をね、提供し続けて、いろんな人に関わってもらえるっていう、そこじゃないかなというふうに、最近なんですけど、思ってます。

○**大山コーディネーター** でも世間ではすごく風化、風化という。短絡的と言いましょか、評価と言いましょか、世間で言われることがあって、それに対してこう、あらがい続けてきた面もあると思うんですけれども、そこら辺のことはどうですか。

○**防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん**

そこは個人的にはもう半分意地みたいなのところもあるんですけど、やっぱりやり続けてやるというほどのものではないのですけれど、何もなかったということよりも、どんどんやっぱり情報が増えてきて、自分も賢くなってるんですよ。そういう意味では、昔全然知らなかったけど、今は結構防災のことわかるようになって、ああ、ここで揺れたらこういうぐらいのことが起こるのと違うのかなぐらいまで、何となくわかるようになっている。そういう人が増えたらね、やっぱり確実に世の中、大変な思いをする人が減るんじゃないかなというふうに思っていて、それはずっと続けてることからきてるのでやっぱりやり続けるということは必ず役に立つし、みんな賢くなっていくってこういうふうな実感があるから、やっぱり毎年毎年、やっぱりここに来てるっていうことも、自分なりにこだわっているところがあるから、この場はそういう場である。林先生もよく言ってるけど、1年に1回、涙を流すじゃないけど、心洗われる会だって言ってるんです。ふだん忙しくていろんなことやってるので、やっぱりメモリアルに来て、ちゃんと防災について自分もリセットすると言ったら変やけど、向き合うんだというのは、個人的にはそういう感覚もあります。

○**大山コーディネーター** 諏訪先生はこの10年を振り

返ってみて。

○防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん

災害体験をしたときが小さくても語っていいんだ。大人だけが語るとか、つらい体験をした人だけが語るとかじゃなくて、どんな体験でも小さな体験でも語っていいんだということを若い子たちに体験してもらえたのかなと。それはもう5年たてば体験がなくても語っていいんだって。災害体験がある人だけが語るんじゃないって、それは、ない人が語り続けるから風化がなくなるんだ。僕はよく言うんですけど、井伏鱒二が黒い雨を書いたけども、あの人は直接被爆してないんです。重松静馬という人の日記を読んで、書簡を交換しながら、あの文学を書いたという。つまり体験しなくても書けるんだ。日本中の平和教育をやってる先生、あのら、みんな戦後生まれなんです。それ考えたら震災後生まれたって、災害体験を聞いて、河田先生の話聞いて、牧先生の話聞いて、ト部さんの話聞いて心が動いたら、それを誰かに伝えたら、それが語りになる。それこそが僕は風化にあらがっていくことかなと。それを今、若い子たちが兵庫県はすごくふえたんですよ。防災ジュニアリーダーって、いろんな高校が20ほどの高校がやってるんですね。これはもう全国で兵庫だけなんですけど、そんなことができていったのも、やっぱり「メモリアルKOBÉ」で、どんな体験だっていいんだよ。語っていいんだよ。小っちゃい子供の体験って重いんだよっていうことをやり出したから、だと僕は思ってるんですね。

○大山コーディネーター はい。河田先生も先ほど午前中の部で、やっぱり震災体験ない人が伝えていけるということをしていかないとだめだとおっしゃってました。やっぱりそういうことにつながってくるわけですね。

○人と防災未来センター 河田センター長 今これだけ災害多発激化時代に入ってる、義援金を出すよりも被災地に行くと災害に遭うということが、どんな悲しいことかということを経験していただく。こういう人を増やさないと、この災害に対してどう取り組んだらいいかというのが、何か拍子抜けのような形になってしまっている。やっぱり今まで被災した人たちは必ず、もっと前からちゃんとやっていいたら良かったという後悔の念を示されますので。それじゃあ、経験しないと賢くならないということでしょう。でも経験せずとも賢くなるにはね、やっぱり被災するということが、どんな悲しいことかということを経験するということか、ですからね、被災地に行ってください。別にボランティアでなくてもいいから、その被災地へ訪れるということが非常に大事だと思ってるんです。

○大山コーディネーター はい。そしてこの10年を引き継いでまいりまして、この「災害メモリアルアクションKOBÉ」ということで、被災者が被災者に伝えることを掲げていますけれども、やっぱりこの若い世代の思いの変化といいましょうか、こう伝えることによるこの変化って、この4回ぐらいの間で何かありますか。

○京都大学防災研究所 牧先生 そうですね。いや、完全な未知の領域、20年で、まあまあ、その今までですから、10

年災害復興で頑張ってる、そのことについて取り組んでくると。その中で災害を経験してない世代が増えてくるから、次へ語り継ぐまでの問題設定って、まあまあできたと思うんですけど、20年終わるときに、私ももうそろそろ引退やと思ったら、河田先生に今度、牧おまえやれと言われてましてやってるわけですが、完全な未知の領域。じゃあ、この神戸の問題が何なのかというのがまずよくわからないのですね。語り継ぎみたいな課題はもう前でやってるし、次20年、25年という今年が、まあ一つ大きなこの阪神・淡路大震災によって転機というか、25年過ぎてまだ言うかみたいな時を迎えると思うんですけど、ですので、この今の始めたこの今やってる、最後じゃないのです。次はまた引き継いで50年までやるんですけど、アクションというのはほんとに未知の領域で、そんなにまあ、2回目ぐらい、20年目まではテレビ局も何にも、よく来られます。その問題設定として、風化するから次へみたいなの、わかりやすいですからね。その20年目以降というのは何がキーワードなのかがよくわからない中で、非常に今日も感銘を受けているのは、若い人たちがほんとに、河田先生が先ほどまとめておっしゃられましたけど、それぞれの受け止めかたをされて、それをそれぞれ自分の言葉でお話しになってくれるということに非常に感銘を受けてまして、ただそこで一番重要なことと思ってるのは、まだこの神戸の地では、実際に震災の経験をした人の話を自分が直接、さっきのその井伏鱒二さんの話でも、やっぱりその経験した人と直接まだ話ができてということから受けるその影響というのはすごいなと。今日、舞子高校は先生方から話を聞いています。それから渚中学校も、今日あんまりお話の中では出てきませんでしたが、このHAT神戸には震災の経験をされた方もおられて、そういう方が避難所訓練する中で、直接お話をされて、そこから何かを受け取っているとか、彦根東の方は福島で被災している、自分の同世代の人たちと直接しゃべっている。やっぱりその生の言葉をまだ今なら聞ける。それは、その自分の中でどう理解し、どう言葉に出すというところまではいけたのかなと。

だから次は、今日おいでになってる若い世代が、まだ生の言葉を聞いているやつを、じゃあそれを、どう表現して、その次にどう伝えるのか。それがどう伝わるのか。実際に震災の経験をした人と会って、直接しゃべって聞いて理解するということは、ああ、すごいなというふうに思いますけど、じゃあそれを自分の言葉にして、その次に伝えていくというのは本当に未体験ゾーンなので。でもこれをやらないと次に待っている新潟、さらに東日本の方がどうしたらいいのか。このフェイスブックにこのパンフレットを上げたら、いきなり東北の佐藤翔輔さんが、よく枠組みできてますねって返ってきました。やっぱり私たちはその一番初めを走って、それを見ていただくという義務もあるのかなというふうに思いますし、一番いいことやってるという自負は、だんだん河田先生の魂が乗り移ってきましたけど。いや、一番ええことやってるという自負はあると。

○**人と防災未来センター 河田センター長** 実は、このHAT神戸というのは、神戸製鋼所の製鉄所の跡地で一人も住んでなかったんですよ。今、約1万4千人住んでるんです。これやっぱり復興のシンボルなの、このまち。ですから、このまちの活性化を成功させないといけない。今、人と防災未来センターが中心になって、渚中学、小学校の協力も得て、ここの全体のお祭りを年2回やってるんです。夏休みになったら、ここで夏休みの宿題をやって、この研究員がそれをお助けするというふうなこともやっていましてね。次にどんな町をつくるかということを見せていかなきゃいけない。今までは起こったからその反省に立ってこうあるべきだということを、まあいろんな紆余曲折しながらやってきたんだけど、行く行くは、この豊かな社会というのを、震災経験を受けて次にどう具体的に目標をつくるのかということにね、この「メモリアル・コンファレンス」が成長していくと。今までは起こったことに対しての見方で、その教訓を生かすということだったんだけど、今、牧先生おっしゃるようにね、新しい豊かな社会をつくるのに、この経験がどう生かされるかって、ここにやっぱり応用問題が実はあるわけね。

ですから、この被災者が被災者に伝えるというのはまさに、新しいまちで、とてもすてきな生活ができる地域に、このまちをしないと、阪神・淡路大震災の復興は失敗したということになっちゃうのですね。

これは、亡くなった貝原知事が、「河田さん、HAT神戸を頼むよ。あそこは復興のシンボルだから」って。まさにね、ここが今度は新しい文化を発信する地域にならなきゃいけない。そこにこの「メモリアル・コンファレンス」をね、成長させていくというか、これはまあ僕の時代にできなかったら、次のまた若い世代がやってくれると思うのだけど、そういう方向性は示しておかないと、起こったことを幾らたたいても、元には戻りませんので。ですから新しい希望のある豊かな社会に、この被災地をどうすればいいのかっていうところを。これは未知の領域なので、みんなの知恵を借りながらやっていかなきゃいけないと思ってんです。

○**大山コーディネーター** はい。復興まで話が進みましたけれども、ここで会場からご意見やご質問をちょっといただく時間を設けたいと思うんですけど、企画委員の方も積極的にご発言いただきたいんですが。これまでのお話を受けまして、皆さん何か、感想でも結構ですので、コメント、感想あるいはご質問いかがでしょうか。

ではここで奥村先生に。

○**奥村コーディネーター**

午前中十分しゃべらせていただいたんで遠慮しようかと思ったんですけど、すみません。

私、25年前は先ほど申し上げたように中学生だったので、勉強としてしか教訓を得ることができない世代。自分の経験として、そういうことを学ぶというのは難しいのですが、去年は直接自分自身が大阪府北部地震を、別に大きな被害があったわけでは

ないのですが経験して、この取り組みと関わってたからこそ、阪神・淡路大震災とのつながりの中でその経験をした感じがしてるんです。

25年前の災害で、ブロック塀で過去最大の犠牲があったはずなんだけど、阪神・淡路大震災、ブロック塀の話になったときにそれほど話題に出てこない。宮城県沖地震が出てきますよね。それから家具家電の転倒で犠牲になられた6名のうち3名の方は、大阪北部地震は各家電、あるいは屋内落下物で犠牲になられてるんだけど、阪神・淡路大震災では推定では500人ぐらい、そういう形で亡くなられてるはずなんですけれど、25年たってそういう犠牲が出ないように本当になってるんだろうかというので、家具の固定率でいうと、きょう午前中、舞子がアンケートしてくれてたんですよ。50%ぐらいという。いわゆる国勢調査の結果なんかでも、阪神・淡路のときに6%ぐらいしか平均で固定されてなかったのが最新だと40%半ばぐらいまで固定されてるそうなんですけど、死亡率でいうと阪神も大阪北部もそんなに変わらないんです。やってることって本当に生かされてるのかなっていう、何かこうもやもやしたものを感じる。改めて25年前のことをしっかり学ばないといけないという思いで、今日も参加させていただいているし、これからも参加させていただきたいと思ってんですけれども、きょうの午前中のパネルディスカッションにもあったように、過去は過去になりきっていないという、私の頭の中にある過去は間違ってたのかもしれないと。僕が知ってる阪神・淡路大震災のイメージ、それから今までの歩みのこのプロセスも、常に新しい勉強を通じてリセットし直しながら、私だけじゃなくて学生たちやいろんな先生方と一緒に協力して未来をつくっていかないといけないと思うんですけど、ずっと、その先輩でいらっしゃる先生方は、25年間、今日ずっと話されてきてるんですけど、どなたから、ト部さんかな。焦燥感っておっしゃったの、誰でしたっけ。太田さんかな。

○**大山コーディネーター** 藤村先生ですかね。

○**奥村コーディネーター** 藤村先生ですか。焦燥感。実はこの取り組みの中で、ほかの実行委員からも焦燥感という言葉が出てきたことがあるんですよ。人と防災未来センターの事務員していた方だったと思うんですけど、どういう感じでこの震災から25年間を、いろんな取り組み、ずっとやって、そのときそのときの求められるその取り組みが何かっていうのを考えながらやってこられてはいると思うんですけど、ちゃんとうまくいってるんですかね。っていう、何かこう、すごいこう不安というか、正直言って、やってるけれど、それがどういう未来をもたらしてくれるのか。いろいろやってるけれど、実は亡くなる人の数、減らないのと違うとか、何がどう良くなっていく活動ができてるんだろうかなとか、何かそういう私なりの不安みたいなものがあって、先輩方はどういうふうに受けとめてらっしゃるのかなというのをちょっと聞いてみたいと思うんですけど。すみません。話が長くて申しわけない



のですけれど。

○**大山コーディネーター** ありがとうございます。では先輩方ということでお願いします。

○**人と防災未来センター 河田センター長** それはね、君が巨大災害をわかってないからだよ。あれはね、1月17日の朝5時46分に起こったんだ。そんなときにね、ブロック塀の横歩いてないじゃない。倒れても人的な被害出ないじゃない。大阪の北部地震って、朝7時58分じゃない。登校時間だよ。あるいは通勤時間だよ。そこで倒れたら当然出てくるじゃない。ですから、阪神・淡路大震災の教訓では拾えない、実はそのアクシデントというのはいっぱいあるわけですよ。

例えば、今、首都直下地震2万3千人と言ってるけど、朝のラッシュアワーに起こったら、そんな2万3千人で済むわけじゃない。だからやっぱり基本は変わらないけれども、実際に災害が起こると、その応用問題が課せられるということなんだよね。応用問題解くにはね、基礎がわかってなかったらできないじゃない。基礎がわかっていて応用問題できるかって、これはまた別の問題で、ただどはつきりしてるのは、基礎がわかってなかったら応用問題は絶対解けないんですよ。ですから何を教えるかといったら、やっぱり基礎をちゃんと知って、その上でチャレンジするとか、そうしないとね、もうケース・バイ・ケースですずっと変わっていくじゃない。

例えばね、同じM7.3で、大阪中心部で地震が起こったら、とんでもないことになりますよ。ただ大阪の人、それわからないんだ。なぜかという、正常化の偏見だから、俺たち関係がないと思ってんじゃない。それであの6.1のマグニチュードで、初めて自分たちのところで地震が起こって大変なことになると。だけど、あれでもまだ薬効いてないんだよ、大阪は。そこが問題なんだよね。つまり、のん気な人間が多過ぎるんだよね。僕ら防災研究者から言うと、みんな、のん気過ぎるんだ。みんな他人事になっちゃってる。だから出てくる現象は、あるいろんな中の1つが出てきてるだけで、全部俯瞰できるわけじゃないんで、そこから次にどう備えるということを考えなきゃいけないんだけど、みんなやっぱり日々忙しくて、またうとうしいことだからね。考えたくないんだよね。そういう状態がずっと続いているって。そういうふうに私たち考えている。

ですから、阪神・淡路の教訓がそのまま使えるなんて思ってない。場所が変わる、時間が変わる、季節が変わることによって、どう変わるかというのをやっぱり見せていけないと、みんな人ごとになっちゃってるって。次、あなた答えてください。

○**京都大学防災研究所 牧先生** はい。おっしゃった、その焦燥感こそが大事。やっぱり伝わらないジレンマというのは、まあ25年あると。でもそういうもんだと逆に理解するというのが大事な気がして。さっきも漢方薬みたいなこと言いましたけど、私たち建築土木だと、一回設計基準変えたら大丈夫みたいなものではないから、やっぱり、あかんからずっとこう続けて言い続けたいとあかんみたい

な、まあそういうことなんだと私は理解しているので、同じことは、ずっと起こり続けるんだと。

でもじゃあ、それを減らすためにどうしたらいいのかというのは、今までみたいに設計基準を変えたり、耐震改修をしたら収まるという、そういう問題じゃないというふうに理解を。

いろんな被災地で同じことがまた起きるんですよ。東日本でも、新潟でも。また新たな発見のように言われるの、めちゃくちゃムカついてたんですけど、若かりし頃にはね。またこんなことが起きましてって。それ、前もあつたし知らないだけみたいなこと。でも、そういうモデルなんだと思って、だから同じことを言い続けたいとうまくいかないんだというふうに、年取ったので、ちょっと達観するようになりました。

○**大山コーディネーター** ありがとうございます。今いろんなキーワードが出てきましたけれども、これから30年、そしてその後を見据えてですね。今後の活動への期待、方向性みたいなものを御一言ずついただこうと思います。まず諏訪先生、お願いできますでしょうか。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

これから30年というのは、震災30年の意味ですね。

○**大山コーディネーター** このメモリアル。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

私、今年で60なんで、これから30年言われても、ほとんどあっちの世界の下のほうにいますから、はい。

○**大山コーディネーター**

100年時代でございますので、今。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

ああ、いやいや自信ないな。

○**大山コーディネーター** はい。「災害メモリアルアクションKOBÉ」の次の課題といいたいでしょうか。これからに向けての何か期待とかですね、方向性をお願いします。

○**防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪さん**

奥村先生と河田先生のお話聞いてて、僕は森と木をずっと考えていて、やっぱり巨大災害を研究して、国全体の防災力を上げようと人は、やっぱり森を見て、森がどう育ったかを最終的には見たいと思うんですけど。僕はどっちかという教育ばかりやってきて、防災教育をやっている、その中の小さい木がどれだけ育ったかなとか、どんな木が生えてるかなというのをずっと見ていて。

例えば、東日本の被災地行ったときに、高校生と一緒に泥かきするんだけど、何人かへこむですよ。毎日泥かきして、めちゃめちゃ頑張ったのに周りみたら何も変わってない。森は変わってないんですよ。でもええやん、そこで1個1個バケツ1杯の泥のけたら、それを100人がやって1,000人がやったら、いつか変わるみたいなことを僕言ってたんだけど、教育というのは、そういうバケツ1杯の泥を、どうのけるかとか、小さい木をどう育てるかということもやっぱり見たいので、僕はこの先も、若い子たちが災害と向き合うような場づくりをして、そして若い子だけじゃなくて、やっぱり体験者と若い子が交流できるような場をつくって、昨日

も襟裳地区で、襟裳のおじいちゃんとおばあちゃんと高校生のワークショップやってきたんですけど、そんな場をいっぱいつくっていくことで、若い子の中に防災っていう木を育てていきたいな。それが20年、30年先にちよこつとした森になってくれたらいいなと思っています。

○**大山コーディネーター** ありがとうございます。ト部さん、お願いします。

○**防災デザイン研究会GK京都デザイナー ト部さん**

なるほど。諏訪先生の話に乗かって言うと、僕はね、森と木の間の、新種の樹木をつくる立場かなと思ってるんですよ。デザインなんですね。

奥村さんの話にちょっと戻すと、震災の当時、津波がここ危ないよというサインの標識はなかったですよ。逃げるべき避難所はここですよという表示もなかった。そういう意味ではそれやったんですけど、そういう意味でアップデートされてる。それをちゃんとつけようねという法律もできたというのを、やっぱり積み重ねていくという意味では、やっぱり一人ひとりが賢くなるということは、個人の努力なんですけど、その公共のライフラインに関わるような部分とか、生活にかかわる部分のサポートみたいな、その国や行政がやるようなところに、もっともっと普通の防災を入れていくというか。だからわかりやすく言ったら、何か起こっても結構大変にならないような仕組みが普段から入っているような、そういう社会をつくる。これめちゃくちゃ難しいことなんです。ゆりかもめがとまったときに、線路と、めっちゃめちゃ怖いしごを降ろされるのじゃなくて、ちゃんと快適に降りられるスロープがついてるみたいなことですよ。そういうのって、やっていきたいなと思うし、ここから30年、僕はがんばってちゃんと健康に気をつけられたいというぐらいです。ということは、まだ仕事ができますので、少しでもそっちに近づくようにできたらいいなと思っています。だからメーカーも大事ですよ。家屋が倒れてくるのを止めたかったら、家にそもそも家具がついてたらいいいんでしょう。そういう家をメーカーがやっぱりつくるべきだと思うんですよ。そこにデザインとして、その新しい木を植えれば、よりよい社会になるかなと思います。

○**大山コーディネーター** はい。牧先生、「災害メモリアルアクションKOBÉ」が、阪神・淡路から30年まで。その後もまた新たな展開もあると思うんですけども、方向性や期待感は、いかがでしょうか。

○**京都大学防災研究所 牧先生** そうですね。まあやっぱりそれでも、私がおのづかのことを本当に考えるべきなのかどうかということも少し思っていて、前のところでバアッて言いましたけど、今日、おいでいただいている高校生の方とかお若い方々が、こういう場、こういう人たちがしゃべっている話とか、被災した人の話を聞いて、何を思ってるのかというところが重要な気もして、次どうしなさいというのがようわからんっていうところがあるんですけど、ただ、この場をつくることによって、そういうことを何かしていきたいという人が生まれてきて、その人たちが何か新しいアイデアをもって引っ張っていくっていう

ことになるのかなというふうに思ってます、さすがに次の10年は引退をしようとは思ってるんですけど、やはりこの神戸、この「メモリアル・コンファレンス」が続いている一つの理由って、カリスマ研究者というか、河田先生とか林先生とか、まあ諏訪さんとか、その面白い、矢守さんとか、「ああ、面白い、この人たち」みたいな、そういう人がこう引っ張ってることもあるので、そういう次、引っ張っていく人、もう何人か、今委員会の中にはいますけど、そういう人たちに栄養とえ続けるのと、それから、その人たちの下の、諏訪先生が育ててきた木が、だから木が、ガツと1個大きく伸びて、それが木陰をつくるでもいいと思うんですけど、そんなことが役割かなというふうに思ってます。

○**大山コーディネーター** では河田先生、お願いします。

○**人と防災未来センター 河田センター長** 僕は非常に健康なので、あと20年ぐらいはやれると思っているんですけどね。僕は大学が京都大学で、ですから学生のころから退職するまで30数年、京都で活動していたわけ。今住んでいるのは大阪で、これは生まれてからずっと大阪に住んでいる。阪神・淡路大震災でご縁があって、この神戸と非常に親密な関係になっていて、見るとね、兵庫県というのは一番文化が進んでいる。ほんとに文化が進んでいる。これは歴代の知事が賢かった。これがやっぱり如実に県政に反映されている。だって、人と防災未来センターだけじゃなくてね、美術館にしてもね、音楽にしてもね。やっぱり兵庫ってね、他でできないことをやっているじゃない。だから地元の人の話はね、それよくご存じないのだけでも、僕ら、外を知っていると、兵庫県ってすごいなって、もう半端なお金じゃないですよ。熱の入れ方が。

ですから、阪神・淡路大震災という不幸な災害が起こったけれども、その後のこの文化の成長ぶりというのは、もう群を抜いている。ついていけないというのが実は他の自治体だと思うんですよ。例えばフェニックス共済制度なんていうのは、どこもよう作らないんだよ。なぜかという、保険がパンクするかもわからないからと。だけど兵庫県はそれに学んで、そういう制度をつくっているじゃない。他は、できないんだよ。なぜかという、政治家が勇気ないから、これ協力したらもっとよくなるのにね。マーケットが兵庫県だけにやっているから兵庫県はとて大変なだけで、こんな大阪も京都も入ってくれたら、もっと掛金安くできて、大きくできるのにやらない。で、誰も文句言わない。ですから、僕は25年前に不幸なことがこの兵庫県で起こったけれども、それがきっかけになって、それまでやってこなかったことをやり出したという。だからこれからどんどん、この被災地はよくなっていくと。それをやっぱり私たちは後押ししなきゃいけないって。私たちに勇気がないと、多分埋もれてしまうって。ですからやっぱり兵庫県が先頭を切って、この災害文化もそうですけども、文化を日本に全体に発信するって。

だってね、去年の台風19号でね、ここから遠いところほどやられているんだ。なぜかっていったら学んでないんだよ、やっぱり。申しわけないけど。だから、やっぱりここ

が災害文化を発信しているって。だからその受け手がね、ポッーとしとったらやられるぞっていうことなのですよ。ですから、ここはこれから中心地としてがんばらなきゃいけないし、またそれに学ぶということも全国の自治体でもやっていただきたい。それは非常に難しいことだと思うのだけれども、ただやっぱり、勇気をもって挑戦するという社会にしないと、もっと大きな災害が起ころうとしてるんだから、やる前から負けるじゃない。だから南海トラフとか首都直下とかね、それ考えたら、今動かないと間に合わないって。起こらないことにしてはダメなのですよ、日本政府みたいに。起こるのだから、それに備えるということを今やらないと、間に合わない。だからそこはね、やっぱりこういう形で発信していかないと、全部だめになっちゃうって。

○大山コーディネーター ありがとうございます。

特別シンポジウム、向き合い続けた25年。そして、これからということで、グラフィックのレコードでたくさん今、

濃密なこの25年の要素が書き込まれておりまして、これで皆さんご覧になってですね、ぜひとも振り返っていただきたいと思います。

鈴木さん、多田さん、ありがとうございました。

そして御登壇されました河田先生、牧先生、そしてト部さん、そして諏訪先生、ありがとうございました。

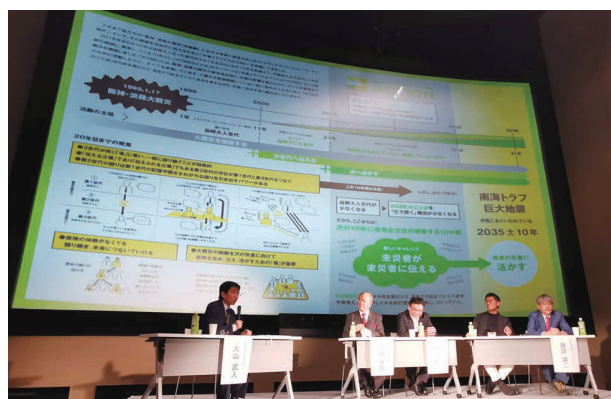
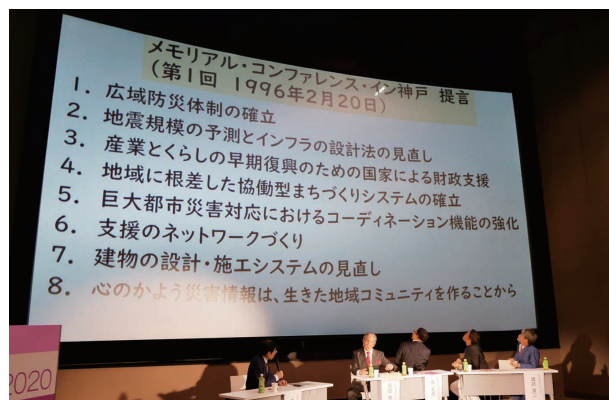
以上、「向き合い続けた25年、これから」でございました。

○司会 どうもありがとうございました。

阪神・淡路大震災から現在までを一気に振り返る大変興味深いシンポジウムだったかと思います。皆様も、さまざまな思いをもち、神戸の言葉を受けとめられたのではないのでしょうか。

ここで舞台の先生方、司会の大山さんに、いま一度、温かい拍手をお送りください。

本日の「災害メモリアルアクションKOBÉ2020」は、これをもちまして終了です。



プログラム

阪神・淡路大震災 25年

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2020

伝える大震災、つなげる防災

KOBÉのことは

参加無料

活動報告会

日時

2020.1.11 SAT
10:00 → 16:00

会場

阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター

主催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所

共催：京都大学防災研究所 自然災害研究協議会

企画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

後援：兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞神戸総局/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞社/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部

これまで私たちは「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」、そしてその教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアルKOBÉ」を実践してきました。

2016年からの10年は当時大人だった世代が少なくなるさらに次の10年を見据えて、今後使える方法やしくみを試行錯誤し、発見し、つくる10年とし、「KOBÉのことは」をキーワードに「災害メモリアルアクションKOBÉ」という取組みを開始しました。

「KOBÉ」とは、阪神・淡路大震災の被災地全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。大震災を直接経験していない若い世代の人たちと共に、「KOBÉのことは」から何を受けとり・何をどう伝えていくべきかを考えながら、未来へ活かす取組みをしていきます。

プログラム

第1部：災害メモリアルアクションKOBÉ 2020 活動報告会

※敬称略

10:00

開会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会委員長
人と防災未来センター震災資料研究主幹
京都大学防災研究所 教授 牧 紀男

10:05

活動発表

- 発表 ① 神戸市立渚中学校 + 兵庫県立大学
② 兵庫県立舞子高等学校
③ 滋賀県立彦根東高等学校
④ 国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°(明石高専防災団) 地域連携チーム
⑤ 国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°(明石高専防災団) 開発チーム
⑥ 神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
⑦ 関西大学 社会安全学部 奥村研究室

12:00

パネルディスカッション「今、私が伝えたい??こと」

防災は、わたしたちの大切な出来事を、だれかの大切な未来へつなげる試みです。
そんな試みをアクションすることになった学生たちと、震災を「伝えたい」「活かしたい」という思いの原動力や活動の中での迷いや気付きを考えます。
福島の一とたちと一緒にことばを探しているチームと、神戸の一とたちと一緒に避難所のあり方を考えているチームに登場していただき、次の時代に「KOBÉのことば」が伝わるかたちを探ります。

コーディネーター

関西大学 社会安全学部 奥村 与志弘
人と防災未来センター 研究部 高原 耕平

グラフィックファシリテーション

TAGAYASU 鈴木 さよ
滋賀県立大学 環境科学部環境建築デザイン学科3年 多田 裕亮

パネリスト

神戸市立渚中学校 生徒
神戸市立渚中学校 教員
滋賀県立彦根東高等学校 新聞部 生徒
滋賀県立彦根東高等学校 教諭 新聞部顧問 藤村 知行

12:55

講評・閉会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会顧問
人と防災未来センター長 河田 恵昭

13:00

昼休憩

第2部：阪神・淡路大震災25年 特別シンポジウム

14:00

オープニングコンサート

子どもに音楽を贈る会 福島しあわせ運べるように合唱団

14:30

特別シンポジウム「向き合い続けた25年、これから」

阪神・淡路大震災を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」(～2005年)、その教訓を次世代に伝えるための「災害メモリアルKOBÉ」(～2015年)、さらに次の10年を見据えて若い世代が取り組む「災害メモリアルアクションKOBÉ」(2016年～)。この3つの活動について振り返り、活動の意義や思い、これからについて、それぞれの活動を牽引してきた、河田・諏訪・牧の3氏が語り合います。

コーディネーター

NHKアナウンサー 大山 武人

グラフィックファシリテーション

TAGAYASU 鈴木 さよ
滋賀県立大学 環境科学部環境建築デザイン学科3年 多田 裕亮

パネリスト

人と防災未来センター長 河田 恵昭
防災学習アドバイザー・コラボレーター 諏訪 清二
京都大学防災研究所(人と防災未来センター) 牧 紀男

アクション参加チーム紹介

活動発表

神戸市立渚中学校 + 兵庫県立大学



阪神・淡路大震災後に出来た新しいまちHAT神戸に渚中学校があります。ここで、防災を中心に人と人のつながり、コミュニティを作り上げていくことを目的として、渚中学校と地域住民が連携した活動を行っています。そして、大災害を経験した大人たちから若い世代に、防災の知識、経験、ノウハウ、コミュニティの大切さを伝えています。

兵庫県立舞子高等学校



私たちは「同年代に語り継ぐ～被災者の視点だからこそ見えることを～」を目標に活動しています。ターゲットを被災者に絞り、阪神・淡路大震災の被害や背景を知ってもらうことで、これからの災害に備え、減災へとつなげます。私たちだからこそ伝えられることを伝えていくために、より多くの情報を分かりやすくまとめ、広く発信していきます。

滋賀県立彦根東高等学校



彦根東高等学校新聞部は、東日本大震災が発生してから8年間「福島をつなぐ」と題し、実際に福島に行き取材してきました。そこでは、復興活動に力を入れている方や、福島の魅力を伝える活動をしている高校生を取材し、お話をうかがいました。震災の記憶を風化させないためにも、これからも新聞部は福島の、そして神戸の様子も伝えていきたいと思っています。

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団)



地域連携チーム

私たちは地域と連携した活動をおこなっています。過去の活動では「明石市東二見地域の減災まちづくり」として感震ブレイカーの設置・点検や子ども世代を対象にしたイベント「防災寺子屋」の企画運営を行いました。現在は魚住まちづくり協議会の活動支援として、オリジナルの防災ゲーム「RESQ」を用いたイベントを開催するなど、地元での防災活動ネットワークを広げています。



開発チーム

私たちはオリジナル防災ゲームの開発をおこなっています。防災ボードゲーム「RESQ」の体験会を開催し、そこで出た意見を基に更なる改良、新たなゲームの開発を進めています。また、神戸高専との共同開発で作られた避難所運営ゲーム「チャレンジ!」のルール改訂への協力を行うなど、高専生ならではの視点を活かして「遊んで学べる」防災ゲームの開発・改良を進めています。

神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ



安富ゼミでは、2017年度からこの企画に参加し、「阪神淡路大震災の教訓って?」をテーマに調査・研究を続けて毎年発表しています。今年は、住民の方9人、研究者ら12人、消防経験者4人、マスコミ関係者3人の計28人を目標にインタビューを進めています。昨年の27人と合わせて55人となり、新聞の枚数としては19枚となります。

関西大学 社会安全学部 奥村研究室



阪神・淡路大震災では、直接、地震で命を落とさなくても、大きな精神的ストレスと劣悪な生活環境によって失われる命があるという事実が初めて広く社会に認知されるようになった。「災害関連死」である。あれからまもなく25年、私たちの研究室では、その後の災害でも繰り返される関連死の発生状況を分析するとともに、当時の教訓は生かされているのかを検証している。

ポスター発表

未来の準備室



福島県白河市を拠点に活動する高校生ライターグループ「裏庭編集部」です。東日本大震災からの復旧・復興・防災に関するヒト・モノ・コトを、ウェブサイトやフリーペーパーを媒介に、取材&発信しています。コミュニティ・カフェ EMANONを活動拠点に、現役高校生のメンバーとOBOGの大学生が共に活動しています。

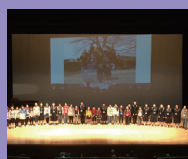
兵庫県立明石南高校 めいなん防災ジュニアリーダー MRDP



平成25年に兵庫県教育委員会の「学校安全(防災)総合支援事業」への参加により防災ジュニアリーダーが誕生しました。毎年4月に1年生から募集し、防災や地域づくりに関心のある生徒が自主的に取り組んでいます。「絆～地域で繋がる防災～」を活動テーマに防災に限らず様々な地域イベントに参加しています。

合唱

子どもに音楽を贈る会 福島しあわせ運べるように合唱団



東日本大震災で被災した福島県浪江町と二本松市の有志により「子どもに音楽を贈る会」を結成。その後、二本松市立杉田小学校を中核に公募により集まった市内在住小中高・大学生で編成される合唱団。震災経験を通じて出会い、以来歌い継ぐ「しあわせ運べるように(福島バージョン)」などを披露します。現在の団員41名で来神。

災害メモリアルアクションK0BE企画委員会名簿

役 職	氏 名	所 属
企画委員長	牧 紀男	京都大学 防災研究所
委 員	伊藤亜都子	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	卜部 兼慎	NPO法人防災デザイン研究会（株式会社GK京都）
	太田 敏一	防災リテラシー研究所
	大塚 毅彦	国立明石工業高等専門学校
	奥村与志弘	関西大学 社会安全学部
	近藤 誠司	関西大学 社会安全学部
	中野 元太	京都大学 防災研究所
	西口 正史	ラジオ関西編成営業局
	馬場美智子	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	福岡 龍史	株式会社 エフエム・プランニング
	本塚 智貴	国立明石工業高等専門学校
	安富 信	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	横山 愛子	株式会社GK京都
	榎田 順子	兵庫県立舞子高等学校環境防災科
	大山 武人	NHK 大津放送局
	藤村 知行	滋賀県立彦根東高等学校

サポーター	甲斐聡一郎	兵庫県災害医療センター
	越山 健治	関西大学 社会安全学部
	諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
	細川 顕司	公益財団法人市民防災研究所
	松元 正博	NPO法人 人・家・街・安全支援機構
	宮本 匠	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	矢守 克也	京都大学 防災研究所
	高森 順子	大阪大学大学院、阪神淡路大震災を記録し続ける会

顧 問	河田 恵昭	人と防災未来センター、関西大学
	土岐 憲三	立命館大学衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所（特別研究フェロー）
	新野幸次郎	神戸大学（名誉教授）
	林 春男	防災科学技術研究所

災害メモリアルアクションK0BE2020参加学生名簿

※順不同

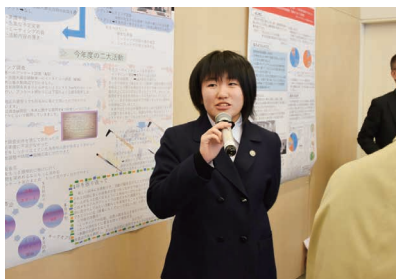
グループ名	氏 名	所 属	
兵庫県立大学 + 神戸市立渚中学校	筒井 淑子	兵庫県立大学	3
	廣田友梨奈	兵庫県立大学	3
	近澤 恵	兵庫県立大学	3
	金子 凜	神戸市立渚中学校	2
	疊谷 優生	神戸市立渚中学校	2
	小寺 隆斗	神戸市立渚中学校	2
	深田 千真	神戸市立渚中学校	2
	松田 優輝	神戸市立渚中学校	2
	小沼 楓夏	神戸市立渚中学校	1
	橋本 和香	神戸市立渚中学校	1
兵庫県立舞子高等学校	大塚 美紗	兵庫県立舞子高等学校	3
	松岡 紗輝	兵庫県立舞子高等学校	2
	戸澤 幸咲	兵庫県立舞子高等学校	2
	前林 亮香	兵庫県立舞子高等学校	2
	宮本 莉沙	兵庫県立舞子高等学校	2
	三好 彩香	兵庫県立舞子高等学校	1
	森 亮太	兵庫県立舞子高等学校	1
滋賀県立彦根東高等学校	小峠 実咲	滋賀県立彦根東高等学校	2
	宮下 晶	滋賀県立彦根東高等学校	2
	清水 陽奈	滋賀県立彦根東高等学校	1
	前川 萌愛	滋賀県立彦根東高等学校	1
	福本和華奈	滋賀県立彦根東高等学校	1
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団) 地域連携チーム	曾我部敬太	国立明石工業高等専門学校	3
	石原 由貴	国立明石工業高等専門学校	3
	江口 陽花	国立明石工業高等専門学校	1
	川枝 夕姫	国立明石工業高等専門学校	1
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団) 開発チーム	金子 雄哉	国立明石工業高等専門学校	3
	塩坂 優太	国立明石工業高等専門学校	3
	藤田 裕	国立明石工業高等専門学校	1
	尾崎友理奈	国立明石工業高等専門学校	1
	泉 智尋	国立明石工業高等専門学校	1
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	楠橋 力	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	田邊 銀平	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	灘井 彩乃	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	大矢 哲也	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	佐々木文都	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	安藤 彪華	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	山 楓生	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	榎本 倅生	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	武岡 洸樹	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	林 優真	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
	鈴木 大貴	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	3
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	川崎 雄太	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	4
	豊澤 弘八	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	4
	稲葉 真緒	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	4
	西村 映輝	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
	西田 早恵	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
	楠木皐耶香	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
兵庫県立明石南高等学校	田村 優奈	兵庫県立明石南高等学校	2
	常本 紗月	兵庫県立明石南高等学校	2
	宮定 夢実	兵庫県立明石南高等学校	1
福島県立白河旭高等学校 福島県立白河高等学校	駒坂すみれ	福島県立白河旭高等学校	2
	斎須いぶき	福島県立白河旭高等学校	2
	坂田 実紀	福島県立白河旭高等学校	2
	星 颯斗	福島県立白河高等学校	2
	松本 大河	福島県立白河高等学校	2

発表風景・交流会等

キックオフ会 (ワークショップ) 2019年8月19日



中間発表会 (ワークショップ) 2019年11月23日





阪神・淡路大震災 25 年



令和元年度 災害メモリアルアクションKOB E 報告書

主 催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
京都大学防災研究所

企 画：災害メモリアルアクションKOB E企画委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内

災害メモリアルアクションKOB E企画委員会

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階

Tel：078-262-5060 Fax：078-262-5082

http://www.dri.ne.jp/memorial_action_kobe

本研究は京都大学防災研究所共同研究（令和元年度一般研究集会2019K-03）の成果によるものです。